
ひねくれヒーロー

無花果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねくれヒーロー

【Zコード】

Z3070Z

【作者名】

無花果

【あらすじ】

NARUTO転生ものの皮を被つたナニカ。並行世界のNARUTOへ転生した後、原作世界ヘトリップ。逆恨みに嫉妬、恐怖と自嘲で構成されたヘタレ氣味主人公が覚悟を決める話。目的は生存、敵は虚弱体質と・・・ツツコミきれない天然忍者たち

死と共にはじめるものか、生である（遺書）

死と共にはじめるものか、生である

ホセ・マルティ

死と共に生じるものか、生である

地球温暖化が各地で叫ばれる最中、猛暑日が続くとある田

ある高校に異変が起きた

1人の男子生徒を担架に乗せ、慌ただしく保健室に運び込まれたもの・・・

部活の仲間や教員たちが青ざめた顔で祈る中、手当での甲斐なく熱中症で死亡した

黄色い太陽が焼きぬくしたような、夏の日だった

まさか、口酸っぱく注意されていた熱中症で死ぬことになるなんて
思いもしなかった

先生、職員会議もんだな・・・

いや、絶対それだけじゃ済まないだろうけどさ

悪いことしちゃったな

死んだっていうのに軽すぎるかもしれないけれど

今は本当にそんなことほんとうでもいいんだ

目の前の光景が明らかにおかしい

彼方には、見たことのある額当てにベスト、手裏剣やクナイを使つた牽制攻撃、もはや目では追い切れない回避行動

此方には、これまた見たことのある黒マント姿の男たちで、赤い雲が刺繡されている

マントを靡かせながら次々に人外的な攻撃を繰り出している

これが走馬灯なのだろうかいや絶対違う

巷で噂の・・・トリップとかいう奴だろうか

「これは神様が現れるのがテンプレだろうに、何をしているのか現実逃避がてらまだ見ぬ神への暴言を考えた隙に、誰かの忍術の余波が俺を襲つた

（ああ、靈体じゃなくて生身だったのか・・・）

傷口からとめどなく溢れる血を拭おうとした処で、俺の意識は途絶えた

誰かの声が聞こえる

甲高く、それでいてか細い泣き声

声の主を探そひと皿をあけよつとして違和感に気づく

瞼がひびく重い

とてもじやないが自力では開けない

怪我の影響だらつか、包帯でも巻かれているのだらつかと考えているうちに、突如腹部が熱をもつた

じんわり、いや、そんな優しいもんじやない

熱を認識した途端、激しい痛みが俺を襲い、その衝撃で微かに瞼が開いた

ターバンの上に額当てを付けた青年と、まるで活らわしいことでも言わんばかりの目を向ける、白衣の中年たち

いつの間にか泣き声は止んでいたが、ここからが泣いていたわけではなさそうだ

三田円が掘られた額当て

そんな額当てがあつただろうか
もう長い間ナルトは読んでいないから新キャラだろうか、それとも
アニメのお約束、オリジナルだろうか

「・・・泣きもしないとは・・・気味の悪い器だ」

「いや全く・・・九尾の人柱力といえども、もう少し赤子らしさが
見たかったです」

九尾？

人柱力？そんな馬鹿な、ナルトはどうしたんだ、四代目はどうした、
お前らは何者だ？

どうして器と言つて俺を見てるんだ

「封印は無事に施された

しかし適合するかどうかはまだ分らぬ

地下神殿にて隔離せよ」

ターバン男が俺を抱き上げた

いくら忍者といっても、簡単に横抱き出来るほど俺は小さくなつた

俺は転生したのか？

赤ん坊から、一からやり直しなのか？

「畏まりました

もしものために医療忍者を数名傍に付かせます

・・・里長、姉君の、・・・御遺体はどう処理いたしましたか

「我が姉と言えど、こ奴は先代人柱力

他里に暴かれぬよう荼毘にふし、地下神殿に無縁仏として処理せ

「

短い返事を残し白衣の男たちは去つて行つた

麻袋に詰められたナニカを持つて

「・・・恨むなら、好きなだけ恨め

お前から平凡な人生を奪つたこの叔父を、この月隠れの里長を・・・
・恨んで生きていけ」

男は震えながら俺を抱きしめて、諦めたかのように呟いた

この記憶を最後に、6歳までの間、俺の意識は途切れることとなる

神を信ずるか信じないか、感情の問題である（前書き）

神を信ずるか信じないかは常識や倫理や議論の問題ではなく感情の問題である。

神の存在を立証することは、それを反証することと同じく不可能である

カマセイ・アーモーム

神を信ずる「J」とは、感情の問題である

今日は6度目の10月10日

この世界に転生した日、俺の誕生日

太陽の当たらぬ地下神殿、そこが俺の唯一の居場所

大いなる化け物を、尾獣を封印している巫子さまとして恐れられ、
敬われ、軟禁されている

供え物を運んでくる周辺住人と面会する以外、何一つすることがない

いつも傍で控える、医療忍者から情報を収集することで暇をつぶす

分っている」とは、この世界はNARUTOによく似た別世界だと
いうこと

木の葉と違う里は存在しないということ、そもそも火の国自体が存

在していない」と

この国は火ではなく、田の国、太陽神を奉る小国

そんな太陽神のもと、御国のために働く月隠れの忍び里

ここが、俺の生まれた場所

そして今日、誕生日でありますから悲しいお知らせが発覚した

戦争兵器として扱うべく、大切に、しかし放置氣味に育成されていましたにも関わらず

俺には忍者の才能がない、との判断が下され一生幽閉されることが決定した

理由は簡単

チャクラコントロールが出来なかつたのだ

いや、そもそも文字を習得しただけの段階で、教科書だけでチャクラとかいう意味のわからんものをコントロールさせよつといつのが間違いなのであつて！

俺自身に問題はない！・・・と、断言出来ればいいのだけれども

虚弱体質である俺は、生まれつき忍者に向いていないと言われていた

九尾が入つたまま、地下暮らし

出来ることとは読書（宗教関連のみ）だけ

ははつ 泣きてえ

せめてもの救いは、九尾が割と友好的だといつことだらつ

いや、もっと小さこ頃は体を乗つ取ろうと、画策してたらじいんですがね

精神世界で殺氣を向けられる度に失神、発熱、生死の境を彷徨うと

いつ流れが確立し、いつやいかんと思われたそうですが

その発熱の影響か、俺の記憶はここ最近まで飛び飛びです

そして九尾=命に関わるところ図式が体に刻み込まれたため、声を
かけられただけで気絶する始末

完全にトラウマですありがと「」やれこれました

いいよ不貞寝するから

それしか出来ないからな

チャクラコントロール・・・出来たら、もっと俺違つてたのかな

才能 があつたら、ナルトみたいにアカデミー通つて、友達作れて、忍者になれたかな

せめて体が丈夫だったら、ロック・リーみたいに体術で頑張れたかな
なんで俺、こんな体に生まれてきたんだろう

才能があれば

もつと丈夫な体なら

・・・そもそも、転生なんて、なければ

こんなことには、ならなかつた

妬ましい、とはこの事だらうか

憎い、とはこの事だらうか

なんで俺をこんな風に転生させたんだろ？神様は

見たこともない、居るのかもわからぬ神をただただ信じじて

なかばハツ当たりのようこそその存在にケチつけて

頭を抱えてしまつたりして

「・・・・ハハハ・・・」

抑えきれない嗚咽が零れる

なんでもないのに、いつなつたことは仕方がないのに

布団にぐるまり口元を押される

泣けば全部すつきつする

いやな気持ちは全部涙が溶かしてくれる

そう信じて、泣き続けた

暗く、黒い涙が落ちてくる

この狭いとも、広いとも言える牢獄に溢れだしている

「うしょくもない恨みと妬み、そしてほんのわずかの怒りが溢れて
いる

あの小さな宿主が泣いているのだろう

正氣を取り戻して泣いている

「・・・哀れな仔・・・」

先代の宿主は、かように脆弱なものだつただろうかと溢し、

尻尾で涙の洪水を一掬い

鈍い音を立てて、毛どころが身をもを焦がした

大いなる獸よと、大妖怪よと讚えられた、この我の身を焼き尽くす涙

凝縮された恨み

我以上の恨み

「本当に・・・哀れな・・・」

せめて最後まで、天寿を全うするまでは守ろうつ
それが狂わせてしまつたことに対する、せめてもの償いのはずだから

たとえ今日負けても、人生は続くのさ（前書き）

たとえ今日負けても、人生は続くのさ。

メチージュ

たとえ今日負けても、人生は続くのさ

18歳の誕生日の朝が来た

相も変わらず軟禁・地下生活

度々吹っ飛ぶ記憶に、自分に何らかの障害が起きていることが理解できた

肉体的なもの以外に精神にも異常があることから、生まれながらの虚弱体質が原因だと断言できない

九尾の声・・・ああ、そういうばパルコと呼べと言われたつけ

尾獸・パルコの呼びかけがある度に発熱するのが、異常の原因なのか

生まれつきの虚弱体質か、それともこの地下での軟禁生活か

あるいはこれら全てが原因なのか

パルコの言では、このまま行くと、俺は30歳ぐらいで死ぬ確率が

高じようだ

熱に魔されながら、早死にやだなーとおぼろげに考えていた口が懐かしい

俺はきっと、今日にでも死ぬのだろう

腰元に迫つくる水を眺めながら椅子に座した

昨日初めて知つたことだが、なんとの世界にも”暁”は存在していたのだ

ここ最近信徒さん来ないし、里上層部も傍付きの医療忍者も慌ただしいので聞いてみたところ

この国、他国と絶賛・戦争状態だそうです

昨日、敵国の雇われ集団”暁”に襲撃されたそうだ

そして本日未明、暁による地下神殿への襲撃が始まった

傍付きの誰かと暁が交戦したらしく、水遁が使用され水責めに近い

ことになっている

原作でも同じように何処かに雇われていた暁だが・・・この世界で
も同じらしい

ということは、だ

尾獣狩りも行われている可能性がある

木の葉の里ないけど、マダラとかいるの?と思つたけれど別人が黒
幕かも知れん

予想でしか考えられないが、人柱力である俺が狙い・・・なのか

もしそうなら、近いうちに尾獣を抜かれて俺は死ぬ

里の人間は助けてはくれないだろう

我愛羅のように、命をかけてくれるような人は・・・いないから

「九尾の人柱力か」

ついにやつてきた雲の外套の男たち・・・って、八人もいる？

おいおい、たつた一人の人柱力相手に大人数で囲むとは大人げねえ

俺に戦闘能力があれば原作知識で逃げ切れるんだろうけど・・・

病弱巫子様の噂は他国にも流れてるって言う話はどうにに行つた

しかし原作通りのメンバーだな・・・いなのはペインと小南の2
人か

トビがいるということは原作通りマダラが黒幕かな

「・・・なー旦那、あれマジで人柱力かな?
なんかすげえチビなんだけど、うん」

生”うん”頂きましたありがとうございます

しかしサソリはビルの姿か

「婦人方の間で美少年と名高い本体を見てみたかったな

「・・・小さきるな」

「やつぱり？座ってるからかなーって思つてたんだけど、うん
鬼鮫の腰ぐらいいしかないよな、うん？」

そんなに身長が気になるんだつたら立てやるよ勝手に測れ

「あ、立ちましたよ」ティダラセンパイ
「うわ、ちつちゅ」

「・・・大体140？といったところだな」

「肉食わねえからじやねーの？」

「ほら、坊主とか肉食禁止してんだろ？」

「えーっ太陽教にそんな戒律ないっすよー
ボク信徒だから知つてますよ！」

なんだかノリがとてつもなく軽い

原作の凄味はどうやらやつたんだ

飛段とトジはともかく、角都、田瀬で身長を量てるな悲しくなる

ギャーギャーと敵地で騒ぎだす男たちを押しのけて、一人前に出てくる

・・・イタチだ

「信徒として非常に心苦しいが・・・巫子殿、抵抗せず御同行いただこう!」

トビコや、マダラもイタチもつちの信徒?

つちは一族は月隠れに住んでいたのだろうか

この世界における木の葉隠れの里は月隠れの里ってことでいいのか?

・・・どうでもいいか

両手をあげて降参のポーズ、意味は通じたようだ

水の抵抗により、足取りは格別に重く、牛以下の歩みでイタチに近づいて行く

宿主、正氣か?! 彼奴等に大人しくついて行くなど、何を考えているのだ!

パルコの切羽づまつた声が響く

ズキズキとした痛みに顔を攢める

直に発熱して、倒れてしまうだろう

だけど、今は、今だけは倒れちゃダメなんだ

何も出来ない俺が出来る、唯一の意地の張り所なんだから

胃の腑から何かがせり上がりてくる

喉を逆流し、口の端から垂れ下がる液体

「・・・暁の、目的は」

わずかに目を見張ったイタチを尻目に、問いかけた

真つすぐ天をさし、疑問を浮かべた男たちがその指に注目する

口を開くたびに赤い飛沫が見えた

トビに向かい、問いかける

「 月か?」

何を、宿主よ、何を知つて

九尾の困惑、迫りくるトビ

ああ、やっぱり原作と同じだったんだ

熱を上がってきたのがわかる、もう立つていられない
目にも止まらぬ速さで俺の顔を覗き込んだその目は、赤く、
いていた

軽く笑つてみたら、有無を言わさず氣絶せられた

何がどうなったのか

我が精強なる月隠れが、傭兵集団「」とさに敗れ去るといふのか

眼下に頃垂れる負傷者たちにかける言葉も見つからず、里長としての責務も忘れて神殿に向かう

あの地下神殿が顕在であれば、他国に散らばる信徒たちを焼きつけて奴らに対抗する事が出来る

早く、早くと焦りすぎたせいか、側近たちは周りから姿を消していくしかし、早く到着する事が出来たことに安堵したのも束の間のこと

信徒用に作られていた、重厚な石造りの入り口が無残にも爆破されていた

神殿関係者のみに教えられる出入り口から地下へと降りる

クナイや手裏剣、爆発や様々な術の痕跡

地下に降りるたび、その傷跡は深く、激しい戦いがあつたことを知らされる

水浸しとなつた大広間へとたどり着き、柄にもなく叫んだ

仮面の男が子供、いや、小柄な青年を抱き上げている

口から血を流し、青褪めながら気絶しているその青年は、まぎれもなく我が里の人柱力で　俺の唯一の甥であった

「その子を離せッ！」

仮面の男は振り返ることもなく、人柱力を連れて消えた

また、周囲にいた男たちもそれに翻ひつかのように消えていった

負けた

完璧な敗北だった

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い（前書き）

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。

愛、ただこれによつてのみ人生は与えられ、進歩を続けるのだ。

ツルゲーネフ

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い

守つてみせると誓つたのだ

他の誰でもない、自分自身に誓つたのだ

あの仔を守ると誓つたのだ

誓つたといつて、何故我は何もできない？

何故助けてやれない？

拷問を受け、我を抜かれ死を待つだけのあの仔を、どうして助けてやれないのか

トビと呼ばれた仮面の男が、黄泉路へ旅立といつとするあの仔を引きずり上げる

切り刻まれた体、首に絞め跡、幻術を見せられた虚ろな目、毒が混じりあい濁った唾液が滴り落ち、手足は碎かれ爆破された何の抵抗も出来ないあの仔を助けられない

何が尾獸か、助けることもできない無力な獸が、何が尾獸か

必死に模索する

助ける術を、見つけなければならない

ふと、記憶の隅に追いやった術を思い出す

時空間忍術、まだ我是完全には封印されていない、チャクラの使用は可能だ

出来る、守れる！

藁をも掴むかのように、チャクラを練り上げる

彼奴等に気づかれない前に、早く、逃がさなければ

「・・・九尾め、時空間忍術を利用したところで 人柱力はもう持たんぞ？」

仮面の下で嘲る声が聞こえる

「 ああ、そりだな

我が抜かれた、ただでさえ弱い体はもう、じきに果てる

もひへ、心臓の音も止んだ

トビがまるで汚物を捨てるよひに投げ捨てた

「ならば大人しく封印されていろ」

そういう二ングエン如きの思い通りになつてたまるものか

「抜かれて足りぬのであれば、詰めて満たせばよからうつ~」

そつ言つて笑つてやれば、目が赤くきらつきよつた

全く、これだから二ングエンは好かんのだ

最後の術を発動させる

火があの仔を包み込み、我が尾を2本入り込ませた

もひへれ以上してやれることはない

あとはただ、成り行きを見抜かれて

「・・・あ、の、ばぐばづま、・・・

診てくれた医者の腕が良かつたのか、なんとか動かせた
なかば炭化していた右腕を動かそうと力を込める

白い柔らかなシーツの冷たさが、体の火照りを冷ましてくれる
そのジクジクとした熱さが、黄泉路への灯火だということを知った
痛みと苦しみ、恨みと嘆きが合わさつて胃の腑を燃やした

「…がぜっでーなべ・・・げほつ」

口内に溜まつた血で嘔せ返る

2、3分ほど嘔せ続け、ようやく落ち着いた

何をやつていたんだろうか

意地をはつたところで、現状をひっくり返せる力を持たない俺に何
が出来たというのか

結局マダラに警戒され拷問を受け、洗い浚い吐いただけじゃないか

そうして死を待つだけの俺に、あの狐は何を考えていたのか

なんで俺なんかを助けた

お前なんか嫌いだったのに、恐がったのに

涙が溢れて止まらない

「おお、起きたか！」

白髪に赤い隈取り、眩しく笑った老人は、伝説の三忍・自来也

手に水の入った桶に真新しいタオル、どうやら助けてくれたのは彼らしい

礼を言うことも忘れ、溢れる涙をぬぐつことも忘れ、ただ呆然と口を開いただけだった

愛する者に欺かれている方が、幸福である。（前書き）

愛する者に欺かれている方が、時として眞実を知らされるより幸福である。

ラ・ロシュフーゴー

愛する者に欺かれている方が、幸福である。

「両足と切り傷は大体治せたが……手のほつは時間をかけて治療することになった
……とにかく、目覚めてよかつたわい」

からうじて動かせた右腕を見てそつまつた

顔周りに飛び散った血を、タオルで拭い取ってくれる

何から話せばいいのか、何がどうなっているのか

混乱しそぎて分らない

「お前さんは そうじゃな、5日ほど睡眠状態でな

わしの知り合いの医療忍者に治療されてしまふやく落ち着いたんだ」

知り合いの、医療忍者？ツナデか？

「あとは、お前さんが何者なのかといつのも知つてある

・・・の、並行世界の人柱力よ」

「はあ！？」

「ちよ、げほつぐえつ・・・並行世界だとー？」

好々爺とした表情が一転、剣呑としたものに切り替わる

「どうこいつことだ？何故俺が人柱力だといつことを知られている？

しかも並行世界？なんなんだ、こじはどじだ？

「あ、おじえでくれ！」

「こじはどじも、円隠れの里、もじげはざとの周辺だらつ」

喉を痛めているからかろくな発音にならない

またもや血が飛び散り、それを拭つてもひつ

「落ち着けい、体に障る

・・・こじは湯隠れの里にある湯治施設だ

御主がこじう月隠れの里とやらは存在せん

なんで湯隠れ・・・ああ、覗きか変態仙人

布団の傍にあつた水を飲ませてもらひつ

血が混じつた嫌な味がしたが、幾分か喉の痛みが和らいだ

「・・・なんで、あんだばそれを知つていいる?」

「五日ほど前、わしが山道にて倒れた御主を見つけた

パルコと名乗つた九尾が、わしに全てを教えた」

パルコさん、貴方何をしてらっしゃいますか

自来也はまっすぐ俺を見て、5日前の出来事を語りだした

金色の光が、炎で出来た卵を庇つかのように包み込んでおった
そしてわしは見た、鮮やかな金色の光が空間を引き裂いた瞬間を

新たなネタを、と思い山道を駆み歩いておつた

しばらく通い続けた湯治場から、隠れた名店たるこの施設のことを見
聞いてのう
「わしは自來也といつての、物書きとして取材旅行をしておつた
ここ湯隠れの里は良い観光地で、若いおなじげふん・・・インスピ
レーションを湧きたてる場所だ

空間の裂田からは黒い禍々しい炎が、光を追いつめるかのように溢れ出た

裂田自体は直に消え去ったのだが、残りの黒炎は光に一太刀浴びせてから消えよつた

そのうちに光は狐の姿をとり、わしに氣づいて交渉を持ちかけた

もはや息絶える寸前の者の願いを切り捨てるほど、冷酷ではないんですね

わしはパルコの願いを聞き入れ、引き換えに知識を渡された

喉が渴いたからか、それとも、次の言葉に悩んだためかここで自ら
也是言葉をつぐんだ

「・・・知識？」

「うむ・・・

日の国、太陽教、地下神殿、そして・・・暁のことだ

お前さんが人柱力で虚弱体质だということを教えられた

「・・・炎の、卵つで？」

「お前さんにはパル」の2本の尾が入つてある
そのうちの一本が防衛機能として作りだしたのが炎・・・そうじ
やの、狐火、とでも言おつかの」

もう一つは生命維持に使われてある

遠い目をしながら説明される

思わず右手で腹を撫でた

・・・命が助かつた」とよりも、それに対する謝罪よりも先に思い
浮かんだのは疑問

何故、と声に出でずかずく

答えは返つてこない

「・・・パル」の、いつも言つておった

あまりにも不憫だったのだと、思わず憐れんでしまったのだと、
な

思考が停止した

憐れみ？

ああ、そうだな、いつだってあいつは俺をひ弱だの、未熟だの、可哀想だとのたまいやがる

そうか、不憫か

不憫な境遇になつたのはてめえの存在だと知つて抜かしたか

自来也の目が、ひどく冷めたように見えて、哀れんでいるようで憤った

「・・・見返したいか？」

自来也の手が俺の目を覆つた

じんわりとした暖かさが体に染み渡る

何だらうこれは、どこかで感じたことがあるのだけれど分らない

「今までチャクラが扱えなかつたそつだの

しかし、パルコのチャクラがお前に力を与えた

「これからわしが修行を見てやる、パルコの巫女よ、忍者になれ」

思わず涙があふれた

大声で泣きわめくことはなかつたが、それから小一時間は泣き続け
ていたと思つ

泣き疲れて眠るひに俺はぼんやりと誓つた

パルコの守りが、狐火が必要ないぐらい強く生きよう

チャクラが使えないても、忍者になれるとい、証明して見返してやろう

眠りに落ちた時、金色のお日様が笑った気がした

竜胆よ貴方に届け（前書き）

竜胆の花言葉

淋しい愛情、
悲しみにくれているあなたを愛する、
貞淑、勝利、的確、正義感

竜胆よ貴方に届け

本当にこれで良かつたのか

いへり約束と言えど恨みを糧とする生き方をさせて良いものか

「難儀だのう・・・」

泣き疲れて眠つた子供、いや違つた、青年を見る

赤く腫れた目蓋が痛々しい

ふと、腹部を見る

弟子である四代目火影が使つた封印術と似通つた術式

並行世界の九尾・パルコが言つたように、この世界とあちらの術は
類似しているようだ

「・・・必要ならば嘘もつぐが、本当にこれで良かつたのかのう・・

」・

瞼を閉じればすぐ思い出せる

決して忘れてはならない記憶、語ることは許されない記憶

これは取引だ、仙人よ

取引、だと？わしにそんなものする必要はないんだがのう

僅かながら宿主の記憶は我と同調している

ゆえに、御主の最期と木の葉の行く末も理解してある

息も絶え絶えに笑った九尾

何故そこまで人柱力の助けを求めたのか

なあに、毎回声をかけただけで死にかけられると同情もあるさ
・・・それに、償わねばならぬからな

炎の卵が解れしていく

中にいたのは満身創痍の子供

何も出来ないと思いつめ、追いこんでしまつたのは我が原因
なればこそ、我が守るべき・・・

しかし、今となつてはもう守ることも出来ぬ

・・・せめて、戦う術を、叶うならこの仔の夢であつた忍びにしてやつてくれ

子供を見るその田に嘘はない

だが・・・

・・・九尾、いや、バルコと言つたな
お前にひとつこの子はどういう存在だ?

田を見開いて空を仰ぎ見る

困つたような、照れたような動きが尾獣とは思えない仕草だつた

どのような存在と言われても・・・はじめは、恨みと哀れみだけで・・・

しかし、名を貰つてからは・・・成長を、見守りたいと思つたのだ

だ

これが、尾獸か？

いや、違う

こやつは、親だ紛れもないただの親だ

・・・貴様の弟子の子を、この世界の人柱力を守りたくば”曉
”を探れ

里を守りたくば、蛇の動向を探ると良い
詳しいことは、宿主から聞け

もつと長くは持たないと溢し、子供を託される

なんと子供の軽いこと、氣絶しているはずなのに重みが感じられない

派な忍びにしてみせよー！
あい分かつた！
この三忍・自来也、御主の命がけの嘆願を聞き届け、必ずや立

胸をはって答える

親から子を預かるのだ、自信がなければ心配するだろつ

・・・そして、どうか宿主には伝えんてくれ

頼む

九尾パルコは、ただ憐れんだだけだと、そう伝えてくれ
宿主が正気を保てるのは、誰かを妬み、恨んでいるときだけな
のだ

・・・ 一体全体何だといつのか、こやつらの関係が理解できん

それと大切なことを忘れていた

宿主は今年で18歳、分別のつく年頃だ

まさに衝撃といつていい位、すさまじい発言だった

こんなに小さいのにか！？

そう叫べばもうパルコは光の粒子となつて消えていた

「・・・しかし、パラレルワールドの狐だからパルコとは・・・
案外安直な奴だの、お前さん」

運命は我らを幸福にも不幸にもしない（前書き）

運命は我らを幸福にも不幸にもしない。
ただその種子を我らに提供するだけである。

モンテニコ

運命は我らを幸福にも不幸にもしない

「」は湯隠れの里

観光地として有名な湯治施設を多く保有する、忍びの隠れ里とは思えない平和な里だ

月隠れからこちらへ逃れて4ヶ月

地元住民と交流を持つに至つたこの俺だが、残念な子と評されている

それはなぜか

「おいらHロジジー！
テメエ俺を囮にして逃げるんじゃねーぞ！」

三日と開けずに騒動を起こす人物の連れだからだ

俺は簾巻きにされ、Hロジジーこと自来也に覗き場へ引きずられて
いる

取材と称して覗きを行ひジジイの悪癖に付き合わされるたびに、こ
れも修行と言われて俺が囮にされるのだ

覗きがバレて女性客に追われる事もある、俺が施設の人々に怒られる事もある

理不尽だ

「Hの自來也さまで向かつてHロジジイとは何事か！
そんなんだからお前は大きくなれんだ」

呆れたように溜息をつかれる

こいつのまつが呆れているところ、Hのジジイ反省の色もない

「関係ねーだろうが！……げほつ
あ、あのねーちゃん良い尻」

覗き場に到着すると、微かに見える女体を観察する

胸も良いものだが、尻も良いよね

「何ー？」

途端田を輝かせ鼻息荒く覗き始める

本当に何故こんな男が伝説とまで呼ばれるのだろうか

立派に育つた弟子、四代目火影に申し訳なく思わないのか

あと弥彦と長門と小南に謝れ

三代目火影は割と口かつたのでもうと同類なんだろう、多分

メモをとりながらヒートアップしていく自来也を尻目に、深く溜息をついて・・・咳きこんだ

良かった吐血しなかった

場所を移して人里近い野原に向かい合つ俺たち

「よしよし、本日の取材はこれまで!
それでは修行の時間といふかの」

にんまりと笑われたのがムカついて脛を蹴りつとするが、案の定軽く避けられた

「そんな見え見えの蹴りじゃあたらんぞ？」

頭に手をのせられる

18歳だと知っているのにこの行動、おちよくつている、ここにはおちよくつてやがる

「・・・わわと修行つけろよ」

手を払いのけてやる

そつするとカツカツと笑つて座りこまれた

「つむ、それではいつも通り瞑想からだ、座れ」

以前チャクラコントロールのオがないと言っていたが、自来也の修行を受け始めてから少し変化が見られるようになつた

そもそも、チャクラとは肉体エネルギーと精神エネルギーを練り上げたものだと言われている

人間に生まれつき備わっている力がコントロール出来ないわけがない、そう自来也は断言した

神殿時代、教科書見せられて後は放置という状況に問題があるのでとも言つた

チャクラはあるのだからどう練り上げるのか、どう扱うのかを教えなければ使えるわけがない

慰められるかのように語られた

・・・確かにそうだよな、いきなり教科書見せて試合やれとか言われたことないわ

ぶつけ本番にもほどがある

「コン、集中が乱れとるぞ？」

自来也に指摘されて思考の渦から引き戻される

再び瞑想に集中する

俺の腹部に熱が籠もる、自来也が唸つた

また失敗か、溜息をついて立ちあがり、皿を開けると炎に包まれていた

「うーむ、やはりバルコのチャクラしか引き出せんか

首をかしげて悩まる

・・・自来也に修行をつけてもうつて早三ヶ月、未だに俺自身のチャクラを練り上げたことがない

瞑想すると必ず九尾の、バルコのチャクラの残照たる狐火が俺を覆うのだ

俺自身のチャクラは練れないが、この狐火を扱うことは可能になつた

覆わせることしか、出来ない防御用だけどな

これはきっと我愛羅の砂と同じなんだろうか

「とりあえず狐火纏つたままリハビリ運動せい」

不燃布で作られたクッシュョンを手渡され、関節運動を始める

切り傷とか爆破痕は治ってるんだが、サソリに飲された毒の影響
が残っていて体が動かしづらい

寝こんで関節を曲げたり伸ばしたりしていると、そそくさと木桶
と水差し、タオルに着替えまで用意される

ふつ過保護師匠め、慣れてきたリハビリ運動で吐血なんぞ、もつし
ない！

せっせと用意された看護用品を横目に勝ち誇った笑みを浮かべた

その15分後、血塗れになつた上着を洗つ姿が住民に目撃された

湯隠れの里内部、決して未成年は入り込めない風俗店が立ち並ぶ裏路地

2人の男が居た

「・・・なー角都よオ」

1人は鎌を持つた黒い外套の男

連れであるもう1人の覆面をついた、同じく黒い外套を身に付けた男、角都に話しかける

「・・・黙つて歩け」

「俺ら、尾獣狩りしてんだよなア？」

立ち止まる角都、訝しげに連れを見る

「どうした? どうどう頭がイカれたか?」

「冗談抜きの低い声、医者によるか? と声をかけた

「・・・なんか癪に障るけどよ、今は良いや
俺ら、九尾の人柱力って、捕まえた・・・よな？」

「・・・飛段、お前死に過ぎて頭が・・・」

冷や汗をかいて飛段を哀れむ

それに激怒するはずの飛段から何の反応も返つてこないことがまた不審がらせる

「いや、捕まえたって・・・あれ？でもまだ尾獣狩りの説明されただけ？」

まだ人柱力の居場所探しの途中で・・・あれ？」

頭を抱え始めた飛段

自分でも何が何だかわからないと騒ぐ

「あーツわかんねえ！」

「そうだトビに聞きやいいかつてトビって誰だ？」

・・・うーん・・・鬼鮫あたりならわかるだろ、な、角都ウ！」

納得したらしく、立ち止まつたままの角都を置いて足早に歩き出す

「・・・・・・・・・・・・

溜息をついて仕方なく歩きだす角都
騒がしい相方に疲れが出てきたようだ

「・・・・・結局何だったんだ・・・・」

聊か肩を落とし年相応の哀愁を漂わせる

寂しげに風が外套を揺らした

考えるな、感じり（前書き）

考えるな、感じり
燃えよ、アリゴン

考えるな、感じろ

広い野原、そよぐ風

自来也が真剣に見守る中、チャクラを練り上げ印を結ぶ
ゴクリ、自来也から大きく聞こえるほどの静けさ

大丈夫、俺なら出来る、そう何度も繰り返して臨む

「分身の術！」

薄い煙が立ちあがり、もう一人の俺が出現する

成功だ！

「やつた、成功だーーーっ！」

半年、半年かけて成功した分身の術！』

何故だか俺の分身は血を吐いていたがそんなの気にしない、俺も今
吐血している

よつやくまとに出来た忍術、たかが初級忍術と侮ることなけれ

俺の努力が実ったんだ

分身体を消して自来也のほうへ振り返ると、泣いていた

・・・やだこわい

「・・・チャクラを練り上げるたびに、穴といつ穴から血を噴出し
とつたお前さんが・・・
よつやく・・・ようやく・・・」

自来也は田元を手で蔽い隠し男泣き

田元の隈取りが落ちかかっている

そんなに泣かなくても良いと思つんだがなあ

「そんなこともあつたね」

思わず遠い田で空を仰ぐ

自分自身のチャクラだけでは血を噴出してしまい、印すら組めなかつたがバルコのチャクラと合わせることにより忍術の使用が実現したリハビリも大体終わり、狐火のコントロールを覚え、次の段階へと移行した修行の初日

1週間意識不明の重体に陥ったのがもはや懐かしい思い出だ

「本当に良くやつた！」

・・・それでは、約束通り・・・褒美を渡そつかのお

涙を乱暴に拭き取り、懐から何かの書類を取り出す

その中から一枚、それとペンを俺に渡す

えーと、何々？木の葉アカデミー編入者の氏名を記入・・・ああ名前を書くのねつて

「アカデミー！？しかも木の葉！？」

「分身の術はアカデミーレベルでは上級忍術に位置する
半分だけだが自分のチャクラも練れるようになつた今のお前なら、
入学いや編入させて大丈夫だと思つてな」

「俺が・・・アカデミーに・・・でも、俺勉強あんまりしてない・・・」

不安で胸が締め付けられる

そんな心配性な俺に自来也は笑い飛ばして見せる

「今までの修行で基礎は教え込んだあるし、ワシの小説の誤字訂正
まで出来るんだしの

アカデミー位なら大丈夫！」

頭を撫でられる

久しぶりの感覚に微妙に顔が赤くなるのを感じた

懐かしい、前世の親にな」「んな風にされたことなかった

思わず涙があふれ出す

「・・・自来也、その、いつもヒロジジイだの変態だのびひょつもない覗き魔だのと思つてたけど・・・」

涙声になつてこるのが自分でもよくわかつて、段々と声が小さくなつてしまつ

「・・・お前のお・・・」

少し傷ついたように肩を落として困んだジジイ

これだけは言わなくてはと、耳元で囁く

「あのや・・・先生、ありがとう」

本当に、ありがとう

素直に感謝したのは何年振りだろうか

神殿時代は感謝なんて形式だけだし、パルコなんか論外だった
もしかしたら転生して初めてのありがとうかもしれない

「わはははっ！お前から感謝されるなんて久しぶりだの！
さあや、早く書類に記入せい！」

「わかってるよー。」

鞄から厚めの本を取り出して（イチャバラに非ず）下敷き代わりに

使
う

生年月日は1909年10月10日で血液型はB、性別は男

ん？好きなものとかも書くのか、何に使つんだらう

好きなものは・・・うーん雑炊かな、嫌いなのは油っこいもの

前世は中華そばが好きだったんだけどな、今はラーメンとか食べる
と胃が死ねるね

好きな言葉は・・・「考えるな、感じろ」・・・燃えよドリフコンだ
つたつけな

鼻歌交じりにやうたらと書きあげて行き、やがて筆が止まる

・・・どう、しようか

「・・・何故、名前を記入せんのだ？」

訝しげに首を傾ける

そういうえば、今まで名乗りすらしなかつたな

「うーん、なんていうか名前、ないからねー」

後日、名前がない発言に心底胸が痛んだと語られた

神殿 チカとかどうだらうか

いや女っぽいな、うーん月野 ミコ、駄目だ女性名だ

そういうや里長の名前、最初笑つたわーなんだよ月影つきかげ 乃斗ないと つて名前

某美少女戦士のアニメ版にそんないたよな月影のナイト様ーって
言われてるやつ

前世の名前は使いたくないしな 、なんか踏ん切りつかないし・・・

この世界で俺を表現できるのは・・・神殿？地下？巫子？九尾？

九尾、パルコか

俺がこんな体になつた原因、恨んでも、妬んでも足りない奴

・・・「たみ、ねたみ・・・

「出来也、俺の」と今日からコソヒツで呼べ

れいわいと書あおげ、書類を突き付ける

「・・・コソ?」

田をまん丸にして問いかけられた

自信満々に笑つて答えてやる

「や、俺は今日から、ねたみ コソだ!」

胸を張り、宣言する

そうだ、俺はねたみ コソになるんだ

人柱力でも、地下神殿の巫子でもない、ただの忍者見習いのコソに
なるんだ！

名前があるといつことは胸が温かくなる

何処となく腹部も熱を持ち、思わず腹を撫でおろす

「どうから出てきた？」

「嫉妬に怨恨」

笑つたつもりだつたけれど、うまく笑えていただろうか

「・・・（狐だからかと思つた）」

「・・・（安直すぎるな俺）」

急に静まり返つた2人の間に暖かい風が吹き抜けた

何処からか　　風に乗つて声が聞こえた

おめでとう、コン

甲高い狐の一鳴きが、あたかも人間の言葉のように聞こえたのは氣のせいだったのかな

希望に満ちて旅行する」とは、目的地にたどり着くことを望むことである（新

希望に満ちて旅行する」とは、目的地にたどり着くことを望むことである（新

ステイーブンソン

希望に満ちて旅行する」とは、目的地にたどり着くよりより良いことである

木の葉アカデミー編入書類が受理されたことを伝書蝦蟇から伝えられた

自来也は一足先に木の葉へ赴き、移住の手続きをしてくるらしい
・・・湯隠れに俺を一人置き去りにして、だ

湯隠れからどんなルートを使っても良いから木の葉へ行くこと

それが自来也の修行、最終試験

寝起き吐血で朝の目覚めが血生臭い「え貧血氣味」この頭に、突如
降りかかったこの問題

伝書蝦蟇も酷く同情してくれたうえ、面白いことを聞かせてくれた

18歳だし、一人旅ぐらい大丈夫、そう自分に言い聞かせるものの
凄く不安げな自来也がいた、と

・・・18に見えなくて「めんな、自来也・・・

吐血痕を片づけ、身支度を整え、顔なじみになつた宿の主人に声をかける

湯隠れから木の葉まで、子供が一人旅で無事にたどり着けるルートを聞き出す

なけなしのプライドが木つ端微塵になつたのは内緒だ

かなり主人を悩ませてしまつたがなんとかルートを決めることが出来た

火の国の北東に湯隠はあるが、忍びでない子供が真っ直ぐ木の葉へ向かうのは厳しいそうだ

なので、一旦雷の国へ行き、そこから船で火の国へ向かうことを勧められる

すいぶんと遠回りになりそุดなど地図を確認しながらぼやいていふると・・・

「坊主、大国レベルの医療技術じゃないとぶつ倒れた時がヤバイ」

両肩をつかまれえらく真剣に説得される

・・・そりだよな、俺、綱手が置いて行つた薬で無事なんだもんな
薬が足りなくなつたら蝦蟇経由で薬を貰いに行つてたしな・・・
最後に路銀の確認をし、チエックアウトを済ます（宿代は自来也が
別にとつておいてくれた）

「じゃ、またいつか泊まりへんよー飛階のおひやん!」

『らへ泊まつた思い出深い宿

飯も美味かつたし絶対また来よう

「吐血したままひづくなよー」

新聞を見ながら声だけ返してくれ

ロマンスグレーの崩したオールバックが途轍もなく渋い

いつか俺もあんなオッサンになりたい、と脳裏に淡い希望を描く

歩みも軽やかに雷の国へ行く商隊を目指す

声をかけて一緒に連れて行つてももらおう

・・・そういうや、飛階のおっちゃんつて何処かで見たことがあるよつ
な気がするんだが・・・

何処で見たんだろう？神殿時代の信者かな？

いぐり唸つてみても記憶から導き出すことは出来なかつた

悩みながら呆けて歩いていると躓いた

「あらビート！」のあたりに小石があつたせいで無駄にダメージがでかい

しばらく蹲つていると人影が近づいてきた

「オメエ大丈夫か？うん？」

黒いポニー テールの青年が手を差し出してくる

出された手に大人しく握まり立ちあがる

「デコに小石めり込んで痛かつたけどもう大丈夫、心配掛け下さい
ません」

一礼して距離をとる

純粋に心配してくれただけかもしけんが用心にこしたことはない

「うん・・・お前、凄い血流れてるぞ、口から」

「通常運転であります」

敬礼して答える

面喰つたように瞬いて呆れたように見つめてくる

「・・・お前、本当に大丈夫か？」

何処が？と聞きたいがまあ、大丈夫なものは大丈夫だ

乱暴に口を拭つて商隊を追いかけると何故か青年もついて來た

「兄さんも商隊に用があるのか？」

振り返つて声をかける

「ん、雷の国までちょっとな

あの商隊を追いかけるってことはお前も雷の国までか？うん？」

後ろにいたはずの青年はいつの間にか真横で歩いていた

・・・コンパスの差ですね妬ましい

領いて返すと、青年は領き返したあと大声で商隊に呼びかけた

聞きつけた商隊の人間が現れると、俺から離れ交渉が始まり、あれやこれやの内に馬車へ誘導される

されるがままに馬車に乗り込み腰かけると青年が笑った

「病氣の弟を雷の国^レの病院まで連れて行くんだって言つたら」「コレだ、うん

得した気分だ」

何やり利用されたが、いつこいつのも旅の醍醐味かもしれない

「髪の色違つから疑われるんじゃないの？」

「大人は複雑な関係を妄想したがるもんさ・・・うん」

青年の髪は黒、俺の髪は白髪・・・いや、乳白色だこれだけは譲れない

たとえドヤ顔で決められても、この青年と兄弟といつのは嫌だ

「そもそも弟つていつのも気に入らない」

なにやら粘土を取り出してこね始めた青年

あまりにも自然に出してくるから吃驚した

粘土くせえ

「うん？ だつて年下だろ？」

デフォルメされた鳥を作りながら問われる

・・・「こいつが何歳であるかといの発言を許してなるものか・・・

「18歳だ」

「・・・嘘は、駄目だぞ、うん」

額に汗を流し眼をそむけた青年

本当だよ馬鹿

「俺、コン
あんたは？」

いい加減青年青年言ひのりも飽きたので血口紹介してみる

「うん？ オイラは、ダラーッてんだ
道中よろしくな、弟」

金ひつねれこのだらうかと考え込んだ

弟とこの言葉に向やうい念みを感じた

・・・なんか」こいつ、見ためよつまだ若によな・・・

「・・・なあ、お前何歳?」

聞こ聞かると粘土を弄る手を止める

冷や汗が出てきてこの

「・・・・・・」

無言で顔をそむけた

・・・年下だつたか・・・

希望に満ちて旅行すれば、田舎にいたるつらじるがつら（後

アーナルで木の葉から畠の国へ行くのに船を使っていたのでこんな感じに。

・・・ナルトの詳細地図は公式で出ないかな

世間の人が友愛と呼んでいるもの（前書き）

世間の人が友愛と呼んでいるものは、ただの社交、欲望の駆け引き、親切のとりかえつこに過ぎない。

結局自愛が常に何かの得をしようとする一種の取引に過ぎない。

ラ・ロシュフーコー

世間の人が友愛と呼んでいるもの

ガタゴトと音を立てて馬車が走る

雷の国、国境近くの街道を進む商隊

いくつかの馬車を囲む護衛の忍びたち

揺れる馬車の出入口から外を伺うと、何人かの忍びと目があつた
何気なしに会釈してみると、彼らも同様に返してくれる

年ころ12・3歳ぐらいだろうか、下忍になりたてらしく、何処
か様子が危うげだ

長く続く街道の景色に飽きが来て、なかへ引っ込む

中は商隊の荷物以外にダラーが作り出した粘土細工で埋め尽くされ
ている

丸い蜘蛛を手に取り眺め、徐に潰し捏ね直す

もこもにもにもこ・・・

「まかろーん」

前世でよく女子が好んでいた円形の菓子をモチーフにしてみる

吐血した血を練りこみ赤く染め上げるとまるで梅のマカロンのようだ

食いたくない

「・・・何だそれ」

ダラーの問いかけを無視し、旅のおやつにと思い作ってきたマカロンの袋に粘土を混ぜる

思わず、といった風に手を伸ばしたダラーを制止、出入り口にかけてある布をあげ、近場にいた下忍の少年と少女に声をかける

「あげる、はずれ付きだけどね」

背後から性格悪いぞ、うん等と聞こえてきたがスルーである

2人は顔を見合わせ、少し離れた場所にいる担当上忍りしき男を向つ

男は少々泣つたが、問題ないとでもいふよつて頷いた

いただきます、と一寧にマカロンをとる2人

様子が気になつたのかダラーも顔を出したので、彼にも袋を渡す

「ほれ、兄ちゃんも食え」

渋々袋に手を入れマカロンをつかみ取った

「変わつたお菓子だけど美味しいわ」

何処の世も女子は「いつこつものが好き」らしい

マカロンアイスのほうが好きなんだけどな

「アーモンド使つたお菓子だよ」

赤は苺で緑は抹茶、茶色はチョコだと説明する

少年は抹茶をとつたが少々苦かったらしく、チョコをあげた

「アーモンド?」

きょとんとした顔で呟かれた

あれ、アーモンドブーラルは売つてたのに、知らないのか?

「・・・落花生?」

どつ説明すればいいのか分からなくなつたので、誤魔化す下忍との和氣あいあいとした会話に上忍は微笑ましく眺めている

会話に交じれなかつたスリーマンセルの残り一人の少年が少し寂しげだ

甘いものがあると会話が弾んでいいな、と久しぶりの賑やかな会話に和む

・・・ナツコえんばダラーは何マカロンとつたつけな・・・

ふと後ろを振り返ると、口元を押されて蹲るダラーの姿

えづく音が聞こえてくる

「お、兄ちゃんがはずれだ」

「うわー・・・カワイソー・・・」

「なあなあ、はずれって何味?」

半笑いで訪ねてくる少年少女

そんなに笑つてやるなよ

「粘土With俺の血」

とびきりの良い笑顔で親指を立ててやる

「 「・・・・・」 」

途端に顔色を青くした2人が後方を指さす

うん、何か威圧感があるね

「なあ、コン
兄ちゃんといよっとお話しよつか・・・うん」

力強く肩を掴まる

2人に助けを求めようと視線を向けるが逸らされる

「仮にも兄ちゃんの粘土なんだから臭いで氣づいてもらいたい」

なんで食べたの?とでも言いつつ元気返して叫ぶ

我ながらムカつくな

「お前の血の匂いで分らなくなつたんだ、うんッ！－」

食べたことない菓子だからそういうもんだと思つたんだよー・ヒス
テリックに呼ばれ拳骨を落とされる

袋に入れた時点で血の匂いが充満してしまつたのか

いつも自分自身が血生臭いから氣にも留めなかつた

ひらひらと忍たちに手を振つて馬車のなかへ戻ることにした

「兄弟アピールは出来たんじゃない？」

ダラーに向き直り、マカロンを渡す

「うふ？…お前そんなこと考えての行動だつたのか？」

素直に受け取つて口直しに食べ始めた

吃驚したような関心したような、目が輝いている

「いや、ただの暇つぶしなんだけどな」

「お前嫌いだー！うん！」

残りのマカロンを奪い取られ、やけ食いされる

味は気に入つたらしい

俺のおやつが・・・

落ち込んだが、これでなにがあつたときの看護要員を確保できたと思えば安いものだ

周囲に兄弟と触れ込んで馬車に乗つたんだから、弟の面倒ぐらゐ見てくれよオーライサン？

芽吹いた孔雀草（前書き）

ご機嫌よう 友情 悲しみ 美しい 思い出 飾り気のない人

酷い目にあつた

傍らで粘土をこね続ける自称・18歳から目をそむけ不平を飲み込んだ

確かに、この子供にしてはやけに大人しく、かといって大人だと断言できないアンバランスさは青年と言つていいだろう

任務でなければ声など掛けなかつただろうに

路傍の石と同じ存在を何故気にかけてしまつたのか

いまや悔やまれる

そもそもS級犯罪者として名をはせた自分が気にかけるなど有り得なかつた

任務の遂行に必要だと感じたが故の、行動だったのだと自分に言い聞かせる

(・・・七面倒臭い任務押しつけやがつて・・・)

変化でなく染め粉で黒くした髪を弄る

脳裏に任務を言い渡したりーダーの顔が浮かび、無性に腹立たしい

雷の国に本拠地をおくテロ組織の補給商隊の割り出し及びその壊

滅

組織の末端であるこの商隊を尾行するのではなく、商隊所有の馬車にいつも安々と潜入出来るなど思つてもみなかつた

2・3日もしない間に幹部クラスの商隊と合流するとの情報もある

気づかれないように尾行する手間を思えば随分と楽だ

組織の末端も末端、普通の商隊と変わらない

忍びや護衛を雇う金の無い人間は皆、商隊を頼り旅をする

この商隊にもそんな人間たちが大勢着いてきている

馬車に同乗しているのは余程の老人か病人ぐらい

1人だけでは確実に護衛の上忍に怪しまれただろ？が、今回は大丈夫らしい

馬車に乗せるよつ交渉したときの商人

口から血を流していたコンを見て、随分と氣の毒そつこひからを見ていたあの顔

どこからどう見ても病人といった子供に歩いてこいなどとは言えぬ小心者

良い拾いモノをしたと思った

あちらから進んで兄弟として行動するため、幻術をかける手間がない

だからといって粘土菓子の件は許さないが

正直に言つて、そのままコン諸共すぐに爆破させたい気持ちでいっぱいだ

しかし下準備もなしに無計画の爆破といつものは美しくない

己の美意識を優先させ機が熟すのを待つているのだが・・・どちらも調子が狂う

文字通り現在も血反吐を流し続ける少年が原因だと・・・

・・・現在も？

「コン！？お前大丈夫か、うん！？」

粘土が血に染まり、抑えた手の間から血が流れ出している
顔色も悪く、医者を呼ぶべきかと考え粘土を片づけておく

「・・・げえ・・・酔つた・・・」

青白い（鬼鮫には負けるけど、うん）顔が血に染まった

しかしコンは意外と平氣そうに持っていたタオルで血を拭いだす

「乗り物酔いで吐血すんのかお前は…」

上着が血みどろになつてるので剥ぎ取りうと手にかけると振り払
われた

（・・・なんかムカついたぞ、うん・・・）

「自分で着替えるから後ろ向け」

見て気持ち良いものじゃないと追い払われる

素直に後ろを向き、衣擦れの音が聞こえ始めた時振り向いた

ただの、仕返しのつもりだった

見られたくないと言つた意味を考えもせず、生意気な子供をからかつてやろうと思った、ただそれだけだったのだ

青白く細い体に浮かぶ刀傷、縫い痕だらけの背中

腕や首筋に浮かぶ注射痕、拷問でも受けたのか

小さな体に不釣り合いな夥しい傷跡

そのなかでも鮮明に映つたのは、まるで、爆発でも受けたかのような火傷のあと

芸術家としてのオイラが、ただひたすら美しいと感じた

脳裏に浮かんだコンへの忍び疑惑など、捨て去るほどに美しさだった

立ち止まって声をかけるとダラーは身を正し、真っ直ぐにこちらを田で射抜いた

「ここ……ダラー、ここまで面倒見させて悪かったな
俺はここから港町に行くからここでお別れだ」

ダラーの目的地は知らないが、ここいらで兄弟じつこは辞めてお別れとじよつ

粘土マカロン事件より口数が減ったダラーとともに商隊に別れを告げ、広場まで歩きだす

片手で広げた地図を確認すると、この町から一歩ほど歩いたところに港町があるようだ

野盗や獣に襲われることなく、無事に雷の国へとたどり着いた

長い間馬車に揺られていたせいで体のあちこちが軋みだす

「・・・」ン、聞きたいことがある・・・うん

おまえは、忍か？

そう問い合わせられ、少しばかり悩む

自来也に修行をつけてもらつたとはいえ、忍者登録も、アカデミーにも入学していないこの身

忍びかと聞かれれば否と答えるしかないだろう

首を横に振ることで答えた

「なら！

お前のあの、爆発痕、誰にやられたーー？」

血氣迫る表情とまじのことか

肩を掴まれ問い合わせられる

着替えのときに視線を感じると思つていたけど・・・

「」で素直に曉の『ティダラ』です、と答えると何故曉を知つているのかと大変ややこしい状況を引き起こしそうだ

悩みに悩んだ俺の答え

「爆発に美を見出した芸術家にやられました」

誤魔化したよつて誤魔化し切れていない、分かる人なら分かる特徴を告げてしまった

・・・まちがつてねーもん

「・・・やっぱ、芸術は爆発なんだな、うん!」

しがりく震えていたダラーは顔を上戻せた喜んでいた

なんだか、この回士発見とでも言いたいな皿は

・・・やっぱタワーっぽいから見た」とがあるよつた・・・

「その芸術家はどこの誰だ?! オイオゼひ念いたいんだ、うん!」

悩んでこの最中に邪魔される

「あー・・・もつ(この世界には) いないんだ、じめんな

嘘はついてない

「そんな・・・つ
・・・そいつの最期の作品はコンツヘントとなるのか・・・」

意氣消沈してぶつぶつと呟きはじめた

ここつ怖いな

「・・・なあコン、芸術といえば? 「爆発です」・・・その通りだ、
うん!」

お前は芸術を分かつてゐるーそう肩を叩かれるながら叫ばれた

叩かれた拍子に吐血したが、ぐく自然に拭われた

自来也といふ、ダラーといふ、俺の看護要員はレベルが高いな、うん

おつと、口癖がつづいた

・・・うん? 口癖?

引っかかる、何かが引っかかる、だが、まさか・・・

「よし、オイラもこいつをやいられない、誰にも負けないアートを作り出してやるぜ

勿論、コソに負けないぐらうのだ、うん！」

笑いながらポーテールを結い直し、トキにしたダラー

・・・段々と記憶の中にある人物を彷彿とさせるよつな・・・

「コソだから教えてやるよ、オイラの本名はティダラだ
覚えておきな、いつか爆発の芸術家として名を上げてやるからな、
うん！」

・・・それからの会話は、良く覚えていない

混乱した頭で旅の無事を祈つて別れた

ディダラと商隊が去つて行つた方角から爆発音が聞こえてきた氣も
するが無視だ

港町へ至る街道を歩きながら頭を抱える

「・・・だつて金髪じやなくて黒髪だつたから・・・

誰に聞かせるわけでもない言い訳を繰り返す

「デイダラといえば金髪丁髷だろ？」と心の中で呟いた

狐火が頬を撫でてくる

何の慰めにもならなかつた

「・・・あつ

「一発殴るの忘れてた・・・」

子供は空を飛ぶ鳥である（前書き）

子供は空を飛ぶ鳥である。気が向けば飛んでくるし、気に入らなければ飛んでいってしまう。

ツルゲーネフ

子供は空を飛ぶ鳥である

港町へと至る長い街道

足取り軽く等と言えぬ状況に陥っている

俺の後方を歩く覆面の男性、もつじきすぐ傍まで近づくだらつ

歩幅の差が恨めしい

足音に気づいたときに振り返ったあの瞬間

肝が冷える感じではなかった

思わず首に手を当てる、今は消えさつた絞め跡をなぞる

後ろを歩く男は暁の角都だった

(何なんだよお前のJ級犯罪者だろうせめて『ティーダラ』みたいに少しほ
変装しようふざけんな怖い！)

肩に担いだアタッシュケースがより恐怖を際立たせる

あれか賞金首を換金されたんですね？

走り去りたいが一本道の街道で、まだまだ道が続くこの道で逃げ切れるわけがないだろう

せめて飛段がいないのが救いだろうか・・・

・・・そういえば湯隠れの里の飛階のおっちゃん、飛段に似てたな・・・

・・・まさか親族か！？

思わず肩が震え、抑えるように両手で抱き締めた

「そうは言へることはない」

声をかけられた

何故話しかけてくるんだお前は

沈黙は金なりという偉大な言葉を知らないのか！？

汗をかきながら黙つていると悩みだされた

俺のほうが悩みたい

「ふむ・・・そう怖がられると困るな・・・」

困られても困りますう！

距離を取らうと早歩きで行くが・・・全く距離は変わらない

何だと言つただ

「・・・何か御用でしょうか・・・」

「ああ、少し協力して貰いたくてな

駄賃はやろう」

協力？と聞き返す間もなく、俺は首根っこを引っ掴まれ後方に投げ飛ばされた

衝撃に備えて可能な限り受け身の態勢をとるが、地面ではなく、誰かにぶつかった

あれ？

「うわっ・・・くそ、ばれたか？」

茂みに隠れていたゴロシキらしき男たちは刀を抜き、臨戦態勢にはいった

ちなみに多分リーダーであつただの「馬ばぶつかつた拍子に氣絶しており、子分たちが必死に振り起さうとしている

角都は困まれても悠然と立つており、「ロロシキなど眼中になんこようだ

(・・・俺、投げる必要あつたか?)

意味のわからない行動に田を田黒をせっこるつて、角都対「ロロシキ集団は勝敗を決し、あたりは血の海になつた

噎せ返るみなみの血の匂にて眉を顰める

いくじり血分の血に慣れていると云つても、これだけの血は耐えきれない

氣絶から回復したリーダーも復帰してすぐに心臓を貫かれて死亡していた

「・・・ふむ、一文にもならん雑魚め」

返り血を浴びて手帳を確認している

恐らく賞金首について書かれた手帳だろ?

「ああ、悪かつたな

まじ、約束の駄賃だ」

立ちあがつて近づいた俺によつやく気付いて何かを渡される

・・・飴玉だった

ひとつふたつビビリじゃなく、五袋べりにあった

何故こんな大量にと思い、飴の袋を確認すると賞味期限が今日だった

歩き出しながら話しかける

「・・・食べれないから?」

肩をすくめ、呆れたよつて答えられた

「仕事の相方が預けていつて、そのまま忘れてくるみたいなんでな

飛段のおやつを手に入れてしまった

ジャシン様に呪われないだらうか、心配だ

でも投げ飛ばされただけでこんなに貰つのも悪いな・・・

一度も血を拭つたことのない、新しいタオルを角都に差しだす

「返り血、拭つてください」

「・・・ああ、頂ひ」

飴袋を取り出してからも外套のなかを漁っていたのを見て感づいた
ここいつタオル忘れてやがる

予想は正しく、素直にタオルを受け取つて返り血を処理し始めた

横田で眺めていると、潮の匂いが辺りを漂い始める

田を凝らせば海から反射する光が見えた

ここからなら、走つて町にすぐ入れる

角都に向き姿勢を正して一礼した

「タオルは捨てていただき構いません、飴ありがとうございます！」

失礼します！」

言つが早いが海に向けて走りだす

俺は海が見たいんだ、海は初めてでテンションあがってる子供なんだ

青春少年なんだと自分に言い聞かせて限界まで走る

海だ と叫びつつ走り去る、そつ俺はつみんちゅだ！

背中から生温かい眼差しを感じたが決して振り返ることはなかつた

町に入り、茶屋でトイレを借りた瞬間、今までにない量を吐血して死にかけた

「飴？んなもん渡してたっけ？」

「・・・やつぱり忘れていたか」

「んー？まあいいけどよお・・・処分つて捨てたのか？珍しいな」

「いや、海が大好きな子供にやつた」

「・・・ヒュウガアコトハマリサヘ」

「子供が近くにいたから攻撃を仕掛ける」とのできなかつた「ロツキ共の死体だ」

「・・・子供？」

「ああ子供だ」

「そつかー子供かー」

「海が大好きなんだ」

「お前が？」

「違う」

親切にしなさい（前書き）

親切にしなさい。あなたが会う人はみんな、厳しい闘いをしている
のだから。
プラトン

親切にしなせい

一度茶屋から出て船着き場で乗船チケットを購入しておいた

まだ3時間ほど時間ががあるので茶屋で食事でもとるかと思い元来た道を歩き出す

歩いてくるうちに無性に気分が悪くなり、口内に血がたまり始めた。この吐血とは違つ感覺に焦り、慌ててトイレを借りる

茶屋のトイレを借りて30分はたつただらりつか

店員が心配そうに外から声をかけてきている

それを無視して喉を押さえて吐き続けていた

備え付きの小さな鏡が、青白い顔を、この短時間の内にこけた頬を映し出す

喉から手を離し、紙を乱暴に手繰り寄せる

不意に映った喉元に、褐色の絞め跡を幻視した

すこし治まっていた吐き気がぶり返した

心の内に灯るのは恐怖または恨み

ただの弱者でしかない自分に対する恨み

気絶しないよう足をつねつて痛みを止める

冷たい壁に身を預け、座りこむ

血の匂いと胃液の酸い臭いが立ち込めてくる

茶屋の者にいくら包めばいいだろうかと考え息を整える

じまじくして、外から騒がしい音が聞こえてきた

店員が医者でも連れて来たのかと思ったが、突如壁に伝わる衝撃に飛び上がる

似ているよつて、似ていな

どこか懐かしくも、真新しいチャクラ

これを俺は知っている

熱が上がり始めた頭が警鐘を響かせる

思わず腹部を押さえ、壊され動かされた扉を眺めた

金髪の女、長い髪を一つにまとめたくのいちらしき人物

(・・・一位、ゴギト・・・)

同じ、人柱力

なるほど、懐かしいと感じたのは尾獣のチャクラのせいだったのか

俺の存在を確認し、吐き続けた血のあとを見るや否や血相を変えた
ゴギトはポーチから増血丸を取り出し、そのまま俺の口に含ませた

吐き続けたせいで口内の感覚があやふやになっていたが、なんとか
噛み砕き飲み込んだ

「君、大丈夫かい？ 常備薬はある？」

優しく、幼子に問いかけるように診てもう一つ

震える手で腰につけたポーチをあける

俺が探るより早くゴギトが中を確認し、何種類かの薬を取り出す

小ビンに入った錠剤を指し、指で数を示す

途中噎せこんで血を撒き散らしてしまつ

店員が水の入ったグラスをコギトに手渡し、彼女は錠剤と水を口に含み、そのまま俺に口移しで流し込んだ

(・・・)の体のファースト、キス・・・だな・・・

薬を飲んだ安心感からか、眠気が襲う

このまま寝てしまつてはいけない、気を紛らわすようにコギトの手を握つた

「・・木の葉の、里に・・・港の船・・・」

乗船チケットを取り出しゴギトに見せる

言いたいことが伝わつたらしく、チケットを確認してくれる

「木の葉に行きたいんだね？大丈夫、船は安心していいよ
医者はもうすぐ来るから、しっかりおし！」

もしかしたら俺以上に青褪めている茶屋の主人が見える

自分の店で死者でも出ちゃ商売にならんわな

迷惑料を取り出そつと胸元から財布を取り出し、何枚かお札を握りしめる

「まうや・・・?」

「げほつ・・・めい、わくじょつ・・・ごめ、んなさい・・・」

主人に向ける

ただでさえ青い顔が余計に青ざめていく

いらない心配だつたんだろうか

瞼を閉じると限界が来た

遠くから医者が来たことを告げる声がする

ガクツと音を立てて崩れ落ちた

「・・・あひ・・・起き・・・」

誰かが揺さぶっている

頭が重く、起き上がりたくないが、呼ばれてるから起きたねばならない

ゆつぐつと皿蓋を開く

・・・ああ、一位ゴギトか

一瞬誰だか分らなかつたが歯を見て思い出した

レモンじゃなくて血の味だったね

「・・・おはよひ、『じぞこ』ます、『じ』迷惑をおかけして誠に申し訳ござこません」

秘儀・起きぬけ土下座の術

湯隠れにて強制留待した高等技術だ

これを使えばどれだけ血で汚れていようと大抵のことは許していた
だけるすばらしい術であるマル

「どうやら大丈夫そうだね、それじゃ、私は任務があるから失礼するよ」

苦笑しながらコギトは立ちあがり、傍らの医者らしき人物と茶屋の主人にあいさつする

「お姉さん、増血丸ありがと『じぞこ』ました」

「・・・ああ、気にしなくて良いよ

といひで船はあと30分経つと出航するから氣をつけてね

瞳があやしく輝いたがそのまま走り去つて行つた

流石忍者だけある、田にも追えない早さだった

「坊主本当に大丈夫かい？入院したほうが良いと思つんだが……」

医者がそう言った

確かにここまで吐き続けたとなると一田入院しておきたいが、まずは木の葉に行かないとだめだ

茶屋の人々や医者に謝り倒し、迷惑料を支払い団子を買い船着き場へ移動する

途中まで医者がついて来てくれるようだ

「本当に、御手数お掛けしまして申し訳ありません」

「いやいや、それだけ元氣があればこちらも有り難いよ
あのまま死んでしまうかと思ったからね……」

遠い目で頭を撫でられる

いや、本当に申し訳ないです

「やういえば君は身内に忍者でもいるのかい？」

ん・・・何か探しを入れられて・・・るのか?

一体なんだ?

「祖父代わりの人があいつが忍者やつてました」

自称祖父とか言つてたけどな自来やは・・・

俺はあいつを忍者と認めたくない

あいつただの変態か紳士じやねーか

「なるほどねえ、いやね、増血丸を知つてる子供つて中々いないからね

・・・以前にも増血丸を使つたことが?」

そうか、増血丸って一応忍具だから一般人は知らないはずなのか

といふことはユギトの目がおかしかったのもこれのせいか

「何十回と使用します

増血丸だけじゃなくて兵糧丸も食べさせられましたね

薬だけじゃ栄養補給できないし血も増えないし・・・知り合いで

医療忍者の方に術をかけてもらったこともありますね

ひーふーみーと増血丸などを使用した記憶を数えだす

両手で数えきれないぐらいで医者の顔色が変わった

「・・・よ、よく生きてくれたね・・・」

純粋に心配されてしまった

拷問の傷も大体癒えてきているため、尾獣効果だと思つ

根本的な体质改善には繋がっていない

船着き場が見えた

「・・・それじゃ坊主、氣をつけて旅をするんだよ
危ないと思つたらすぐ何処かの病院に駆け込みなさい」

「はい、肝に命じます
あのくのこちさんと出合つたのがあればお礼を言つていただけませんか？」

きちんとお礼を言えなかつたのが気になつていてと言葉を濁しながら

「うう」と医者は黙つて頷いた

船着き場と船を結ぶ木の板を登り船員にチケットを見せる

部屋のかぎを貰い、振り返つて医者に手を振つた

「・・・じゅり、本当に忍者ではなかつたようですね

医者は出航した船が小さくなるまで見つめていた

ポツリと溢した咳に反応して女が現れる 一位ユギトだ

「ただでさえ情勢の悪い昨今

雲と揉めた木の葉へ行きたがる子供まで疑わなければならぬ
んて、な

「そんな事言いだしたらきりがないでしょ」ユギト様

「そうだな・・・入国者の監視なんて嫌な任務ね・・・」

過失の弁解（前書き）

過失の弁解をすると、その過失を目立たせる。
ショーケスピア

晴れることなく暗雲が立ち込める大海原

嵐が絶え間なく続き、船員たちにも支障が来ていてなんとか火の国へたどり着いた

正直に言おつ

雷の国で入院すべきだった

船医はもうすぐ火の国へ着くと言った記憶はあるが、病室のベッドに身を任せたまま日数など感じられない

吐き気など通り越し、苦い液が口内を蹂躪した

どこからともなく、港についたことを知らせる声が聞こえて来たときには喜ぶ氣力もなかつた

陸にあがり、新鮮な空気を吸えたおかげか頭がすつきりしていた

先程までは

「コンよ、よくぞ無事に火の国まで来れたツ
頑張つたぞ！」

俺を抱きしめ号泣するHロジジイのおかげですつきりした頭も頭痛に悩まされている

・・・木の葉で待つてゐんじゃなかつたのか、なんで港にいるんだ
ヒツシコミたることは多い

だがそれよりも・・・

「抱きしめるビリバカサバ折りに進化していくその行動を止めろー！」

くの字に曲がり始めた体が限界を示すようにボキボキと鳴り散らす

道行く人々、特に老人が無事で良かつたですの一と声をかける」と
がまた気に食わない

「しぬ！比喩表現じゃなくて死ぬ！モツでる、吐血した！－！」

叫んだ拍子に溢れ出る血が自来也の髪を染めた

それでも氣にせず抱き締め上げられる

ふざけるなジジイ

そのまま数分はサバ折りされたままだった

「死にかけてたお前が無事に自力で歩いていたことが嬉しくてのお・
・・」

拘束から解放され、船着き場から移動し始めた自来やは言い訳がま
しく呟いた

吐血して失った分を補うように増血丸を貪り食いながら聞き流す

そりや、死にかけてたなら心配・・・するのかな・・・イマイチ分
からない

「ここから木の葉まではわしが連れていくから
さあおぶされ」

町の門につくなり俺の前にしゃがみこみ促される
だから木の葉云々の試験はびびじたってんだよ

渋々背中に体を預け、首元に手をまわして固定する

それを確認して自来も忍者のスピードで走り始めた

自動車よつもはやーい

周囲の景色が田まぐれじへ変化し、認識できるのは色べりこだつたまるで溶けて行くよつな緑色に意識が飛びそこになり氣を引き締めた

・・・そういうば、引っかかるていたことがある

「おこジジイ、なんで俺があの港に来るつて分かった?」

手に微かな身震いの振動が伝わる

つばを飲み込んだ感触まで伝わってくる

「・・・んん、雷の国から来る船だったらあの港が一番多いからの、ヤマカンがあたつたわい!」

誤魔化すよつな、そんな声色

ヤマカンのあたりでしゃべるのが早くなる

・・・雷の国から、ねえ?

「・・・・・なんで、俺が雷の国から来るつて確定してんの?」

陸路から来る可能性も、あつたよな？

耳元でそつ噏く

感情の乱れを感じ取つた狐火が発現する

「・・・・・・・・・いや、その、湯隠れから・・・だとそう考
るのが一番で・・・「ジジイ」

・・・すまん、尾行しどつた

首筋に大粒の冷や汗をかきながら誤魔化そうとしたジジイの耳元に
狐火を押し付けた

痛みはさほど感じていないようだが呆気なく答えられた

「ディダラとか角都のときも、見てたのか？」

蝦蟇に試験だと言われたときから見られていたのだろうと予測する

角都のときは助けてもらいたかった

「ん？あの芸術家気取りの小僧と・・・お前を投げ飛ばした男か？」

そこまで見てたら助けてくれ

「あいつらU級犯罪者だぞ、助けるよーあとあいつら月隠れで俺を拷問した奴らだよ！」

怖かつたんだからなどジジイの髪を引っ張りながら叫び続け、木の葉に着くころにはお互い気力ゲージがゼロに近かつた

過失の弁解（後書き）

人間は自分の知っていることなら半分は信じる（前書き）

人間は自分の知っていることなら半分は信じるが、聞いたことは何も信じない。

クレーク夫人

人間は自分の知っていることなら半分は信じる

木の葉の里、火影邸で三代目の到着を待ちながら茶を啜る

良いお茶だ

何人かの監視の忍者から不羨な視線を感じる

自来也は彼らを無視して原稿を書き連ねている

「・・・俺超アウェイ」

視線に耐えきれず自来也に懐に潜り込んで身を隠そうと試みる

無駄に等しい行動だ

時折自来也の原稿の誤字を指摘しつつ湯呑を握りしめた

旅の疲れがでたのか眠りそうになる

「・・・ひーまー・・・」

後日、忍びたちの不羨な視線が、仲の良い爺孫を見る暖かい眼差しだつたと説明された

「待たせたのう自来也や・・・それに、コンじゅつたか?」

火のマークが入った笠を脱ぎつつ部屋に入ってきた老人、原作より
些か若い三代目がこちらを見た

自来也の懷に潜り込んだままの失礼極まりない態勢を正すため出ようとする

すると自来也に制止されそのままの状態で捕獲される

良く分からぬがされるがまま二代目に会釈だけ返した

「自来也さま、その子供あまりにも無禮ではありませぬか?...」

当然俺の態度が気に食わない側近が怒鳴り散らす

どんな躾をしているのかと小言を食らつ

「構わぬよ、わしは猿飛ヒルゼン、この木の葉の火影をしておる者だ
自己紹介してもらえるかのう?」

顔を真っ赤にした側近を押さえて三代目が進み出る

いつの間にか原稿を片づけた自来也が俺を強く抱きかかえ、静かに促す

「・・・・ひらみ ハンです

年は・・・見た目より上です

親の顔は知りません、夢は忍者になることです」

当たり障りのない自己紹介

親の顔[云々]で三代目の表情が曇る

それは同情かそれともスパイかどうかを判断しかねているのかわからない

「俺には不思議な力があります」

そう言いつつ狐火を腕に纏わせる

熱さなど感じない、俺だけを包む炎

ざわめく忍者たちを制する自来也、また僅かに表情が厳しくなる二

代目

・・・九尾のチャクラを、残照でも感じ取つたのだろうか

「自来也はこれを狐火と呼びました

木の葉は狐と縁深い地とも聞きました

この狐火はその狐の力の欠片だとも教わりました」

三代目の田を見ないよう、炎だけを見て淡淡と話す

嘘はついていないが納得させられるだけの言い分がない

「・・・自来也よ、お前の言つていたことは事実だったのだな・・・

」

ありえないとも言いたいのだろうか

震える声が俺と重つ存在を否定してくるように聞こえてくる

「わしが発見したときにはすでに狐火を纏つておつた

・・・尾獣の兵器利用の実験体ではないかと思つてある
もしくは九尾の肉でも食らつたことがあるのかも知れん」

異世界なんて話しさ信じてもらえない

こへり弟子である皿来せの言葉と並べば、信じざるものではない

だからとこつてやつこつ説明をするのはじつかと黙つ

同情でもひいて解決する問題ではないだらつ

「雲の金銀兄弟のように、か・・・」

誰だそれ？原作でそんなんいたつけ？本誌で出たキャラか？

ざわめく周囲から時折、狐やバケモノなどとこつセコフが聞こえて
くる

忍でない俺が聞けるほど の声、聴覚に優れているであらう二代目たちにも聞こえ顔を歪めていた

「コソ」と言ったの、お前に会わせたい子があるんじゃ
ついて来ておくれ」

誰の共もつけず、二代目が退室しよつとする

俺がわからないだけで暗部がついているから大丈夫なんだらつ

自来也が俺の手を引いて歩き出した

一度取り残される忍びたちを見て、手だけ振った

三代目に連れられてやつて来たのはどこかで見た覚えのあるボロア
パート

扉をノックすると少年らしき声が聞こえてきた

「あれ、じいちゃんビーフしたんだってば?」

珍しいとでも言いたげに扉から顔を出す金髪の少年 ナルト

原作の主人公、ドベと言われながらも後に才能を開花させた、俺と同じ九尾の人柱力

チャクラが豊富だったと思い出し思わず睨みつける

視線を感じたのかナルトも対抗するかのよつと睨みつけ・・・やがて何かを思い出したのか笑いだした

「じこちやんじこちやん、もしかしてハイシ、前に会つてた!?」

「つむ・・・わあン、ソレジガ今日からお前の嫁じゃよ」

・・・え

「なあお前名前はー? オレはつままれナルトだつてばよー。
仲良くなつてばよー。」

元気よく手を差し伸べられる

流石にアパートの一室に同居とかないよな?

お隣さんになるだけだよな? こんな騒がしいのと同居とか心安まる
暇がないぞ?

黙つて自来也を睨みつけ、反応が返つてこないので渋々差しだされた手を握った

「ねたみコソだよ
仲良く・・・なれるのかね」

こちらが恥ずかしくなるほど満面の笑みを浮かべられる

握った手はリズムカルに上下左右に振られている

「ナルトよ、コソは病弱での、道中も吐血しておった
なにかあつたらすぐに病院に連れて行ってあげるんじやネ」

吐血と聞いて意味がわからなかつたらしく、口から血を吐くことだと教えてやれば、血相を変えて二代目に力強く頷いた

「このナルトさまでせうつてしまふよー。コソもーしこくなつたら俺
に壊つてしまー。」

このトランショングが・・・一日中続くのか・・・

なんて罰ゲームだ

思わず溢した言葉に三代目と白来也が笑っていた

24時間営業中（前書き）

家庭 最後の頼みの綱として語れる場所。
24時間営業中。
ピアス

ナルトと同居生活を始めて早一ヶ月

いつのまにやら食事担当はオレになり、洗濯（主にオレの血拭きタオル）担当はナルトになった

ナルトは有り得ないぐらい野菜を食べないし、放つておくと二食分一メンで済まそうとする

好物だから良いかもしないが・・・飽きないのだろうか

今でも三田に一度はラーメンを出して、野菜炒めをのせたりと工夫している

オレが気を使っているのか、初めての同居人に対して人見知りが発動しているナルトのおかげか同居生活は十分機能していた

そんなオレ達を確認して自来也は取材旅行に行くと木の葉を発つた大蛇丸や暁についての動向を調べに行つたのだと、信じたい、信じたかったのに向かう先は温泉で有名な観光地だった

信じるって、難しいな

「ナルトー、弁当出来たから鞄に入れとけー」

弁当作りを終え、洗いものに取りかかる

朝食を終えたテーブルを拭いていたナルトが弁当を詰め始めた

洗いものを終え、支度を整え、家を出る

今日こそ早退せずにアカデミーを終える、そつ心に決めアカデミーに向かった

教室に入るときスケを中心にして女子が騒いでいた

朝っぱらから元気だなお前ら、オレにその元気を分けてくれ頼むから

「コン、顔がこわいってばよ」

「・・・だれかおらにげんきをわけてくれー」

半泣きでナルトに向かい手を伸ばす

切実な願いはあっさりと流された

2人の男女が近づいてくる

「おはらつきー、ナル君コン君」

「・・・さがそづせ龍玉へいや狐玉を・・・」

男子はモノクルをかけ口元をバンダナで隠した含み笑いが特徴の油女シユロ

女子の方は天然パーーマを結わえた、雪のように白い肌の志村イカリアカデミーで新しく友となつた同士である

イカリ、それだと九つ球を集めることになるのか？

2人ともオレ達を抱きしめてあいさつを交わす

イカリに抱きしめられたオレ達を睨みつける遠くのサスケ・・・

「ああ、青春だな」

イカリはくのいちクラスで五指に入る美人だからな

気持ちはわからんでもない

オレだつて中身の性別知らなきや惚れてたさ

「氣をつける青春師弟に目をつけられるぞー。」

シユロが慌てて止めに入る

コイツは油女一族の異端児と呼ばれるだけあつてひるさいな

「コソ、今日の放課後、あ、無理だな

お前が入城したら話がある」

ナルトは自分がサスケに睨まれたと勘違いし、喧嘩を売りに行つた

お前も元気だなナルト

「オレが保健室へ駆け込むこと前提に言つた、あとオレの城じゃねえ」

保健室通いなのは否定しないが、今日ぐらい放課後まで頑張れるさ

・・・多分

「保健室の主が何を言つゝえ、何だ、ねたみの奴もつ保健室行くのか！？」・・・あーあ

イカリの言葉を遮つて犬塚の奴が割つて入つてくる

編入初日からケンカして犬塚と仲が悪い、が、決してオレのせいではない

体が弱いことを馬鹿にしてくる奴が悪い

無視して席に着く

どうせ放課後になればシユロやイカリが勝手に集まつてくるだろう

出席簿を持つて入室してきたイルカを見ながらため息をついた

・・・結局、放課後まで体力が持たず、一時限目に保健室送りとなつた

「堂々とサボリか貴様いら」

まだ授業中だといつのにショロヒイカリまで保健室に屈座つてている

手桶抱えて血反吐を吐いてるオレを見ながら弁当を取り出しあがつた

「それでは第9回転生者会議始めるがマスよー」

お茶と新しいタオルを配りながらシユロが言つ

そう、何を隠そう、ここにいるオレを含めた三人は、転生者なのである
しかも、オレと同じように一度並行世界に転生してからさちら側に
来ているのだ

ここから前世の性別と現在の性別が違う

シユロは元々女子高生で、イカリは大学生、男だつたらしい
そのせいかイカリは自分の性別について悩み過ぎ、軽い鬱に陥つて
いる

「宣誓！今週もワタクシ油女シユロは里の中心たる大広場でイカリ
はオレの嫁と叫ぶことを誓います！」

そういうことするからサスケから（恋の）ライバル扱いされるんだ
よお前は

「・・・宣誓、私志村イカリはシユロか「ンと結婚する」と誓い
ます」

そういうこと言つからオレまでライバル扱いされるんですよイカリ
さんや

「「ノン相違う思いますか」」の清々しいまでの「一股宣言」。」

「股かけられてるのに嬉しそうだなシユロ

「ぐぐり同じ転生者だからって惚れた女の一股発言を喜んではいけない

「オレを巻き込まないで頂きたい

「・・・で、前回は自己紹介で終わっちゃったけど・・・今回の議題は?」

前回は本当に自己紹介、すなわちオレが人柱力である」と、シユロが油女シノと従兄弟であること、イカリがあの志村ダンジョンの養女である」と

内容が内容だつただけに話が重かつた

特にイカリ

「うーん・・・今さら意味がないかもしれないけれど・・・原作介入する?しない?をはつきり決めちゃつおひぜー!」

ナルトと同居してゐる時点で介入してゐるような気がする

「前にも言ったが自来也に長門情報教えてあるから……ああ、試験の話か？」

「中忍試験いや木の葉崩しのことと言つていいらしい

イカリが弁当の米で蛇を模る

器用だな

「自来也様はねーまあ正直原作でも止められなかつたから、ストーリー通りになると思つよ」

・・・といつ」とは死んでしまつじやないか

せめて自来也は生存してもらいたいぞ

「卒業試験を半年後に控えた今、現在の成績から考えても私達が班になる可能性は高い

体に問題があるが座学はサクラと同等な後衛コン、実技はサスケの次でナルト、キバと並ぶ馬鹿トリオな前衛シユロ、孤立しがちなコン、シユロと問題なく合わせられる忍術の評価が高いこの私が中衛

中々バランスの取れた班じゃないか

・・・まあイルカ先生のメモを盗み見したんだけどな

流石に勉強について負けるわけには行かなかつたので本氣出した

小学生と同レベルとか嫌だという確固たる意志の元、先週あつたテストでまさかのサクラと同点だった

・・・シカマルは、鉛筆ころがしてテスト回答してた

それにしても・・・

「「イルカエ」」

アカデミー生に盗み見されるつてどれだけうつかりしてるんですか
貴方は・・・

「誰が担当上忍にならうと、オレの体力関係で推薦されないと思つ
けどな」

推薦されてもサバイバルで落ちるぞ？

「そりいやそりだな、議題変えよう、サスケについてだ」

イカリはオレの嫁なんだからフラグは断固阻止するとか意気込んでる

里抜けの話じやないのか？

「・・・やつぱつビリでフラグを立てたかさつぱつわからん・・・」

頭を抱えだしたイカリ

お前髪の毛長いし綺麗だから好かれたんじゃないかな?

「顔立ちがほんと似てこるし、お淑やかに見えるし髪の毛ふわふわだし・・・
何より騒がしくない」

「やめて・・・落ち込む・・・」

「シユロ君は彼をボコボコへこましたいです、てへペル」

好きなキャラはサスケだと血口紹介したお前は一体どうしたいんだ
シユロ

24時間営業中（後書き）

ここからオリキャラ祭りがはじまります

大まかな設定

油女シユロ（女 男）

油女一族分家の子、シノの従兄弟、仲は良い。
好きなキャラはいじめたい派なサド
おしゃべりだが交友関係は狭い
コンには嫉妬より庇護欲が勝つている
原作介入したい派

志村イカリ（男 女）

志村ダンゾウの養女、見た目は儂げな美人
中身はオタク街道爆走中な兄ちゃん
精神的ホモか肉体的レズかを選べずシユロ以外と結婚する気はない
コンは息子及び弟的立場で構つてている
原作介入したくない（原作沿いの方が楽そう）派

棕櫚と錨草（前書き）

棕櫚

「勝利」「不变の友情」

錨草

「あなたを捕らえる」「あなたをつかまえる」「人生の出発」「君
を離さない」

油女シユロの物語　二だわる理由

ん？なんだオレの話なんか聞いても面白みはないよ？

死因とか調べて転生する条件を究明する・・・ねえ

ゴンッてクソ真面目だね、研究者とか向いてるんじゃないかな

まあ、イカリとの出会いを物語ると思えば楽しいか、じやあ聞いて
ね？

ただの女子高生だった”私”は些細な争いから死に至り、”オレ”
となつた

きっかけは浮氣、トモダチの彼氏と浮氣をしたかしていいかで揉
めたんだ

確かに？以前はその彼氏さんのことが好きだったよ

そして私はトモダチに”負け”て身を引かざるを得なかつた

だからといってしつこく疑うトモダチとの口論はエスカレートして
いつて・・・最終的に私が全て無視して帰つた

その翌日、通学路で待ち伏せされ、どこからか持ち出されたレンガ
で頭を殴られて・・・死んじやつた

一度目の死、そして二度目の誕生がはじまつた

一回目の油女ショロは成績上位でアカデミーを卒業後、うちちはフガ
ク、ミコトと班を組み出世し続けた

あるとき”私”は恋をした

君も知つてる原作キャラクター、ネジの父、日向ヒザシに

だけど”存知油女ショロは男だ、また”負け”たんだ

いろんな想い、しがらみから逃げるように戦い続け暗部に入り、人
柱力クシナの護衛に選ばれるほどになつた

なのにオレは守り切れず、マダラに”負け”たのだ

死なせてはならないと先走つた揚句呆氣なく死んだ

視界の隅で四代目が時空間忍術を使つたことを確認してそのまま・・

・

「うつして一回田のシユロは死に、一回田が始まった、三度目の誕生だ

今のオレのことだね

何かがおかしいと気付いたのはいつだったか

同じ世界に転生し直したなら、暗部入りしたシユロの記録があるはず

油女一族の異端児とも言われたシユロを知っている者は多かつたはず、しかしそんな存在はいなかつた

世界が違つたのだと理解した

それから吹つ切れたようにアカデミー生活を満喫中さ

心のどこかにしじつを残しながら、ね

だけどそのしじつはすぐに解れた、イカリとの出会いによつて

ある日編入生が来た、戦災孤児でスパイ容疑などが晴れるまで入学できなかつたくのいちが来ると聞いた

今でも憶えている

雪のように白い肌、海のような髪と目、彼女の名は志村 イカリ、
オレの三回目の恋の相手

誰かが言つた サスケがイカリに惚れたらしい

今度は”負け”ない、そう決めて積極的に話しかけ 彼女が”彼”
であると知つた

「サスケと対等な油女一族つて原作にいたつけな」

ぽつりとこぼされた言葉に食いついた

仲間だ、味方がいる、もう、オレは1人じゃない

イカリも同じようにオレの存在を受け入れ・・・俺は”勝利”した

オレとイカリで世界が埋まりかけた

だけどもこの世界はオレの世界でもイカリの世界でもない

何かあると世界に疑惑を抱いたオレ達の前に、お前が現れた

人柱力だつたと聞いて驚いたけれど嬉しかった

何故かつて？クシナの時の”負け”をコンを守ることで帳消しに出
来る

うちはマダラに”勝つ”

コンを守り、イカリを嫁にして幸せに暮らして勝利する

だから絶対にサスケにフラグは立たせない、折る

根元から叩き斬つて灰燼に帰すまでズタボロに・・・

あれ？もう良いの？何だよヤンデレって酷いわ乙女になんてこと
いうのよ

お氣の毒に・・・おい何だその田は

死因その他諸々を吐け・・・うーん何處から話せばいいのか

とりあえず死因は急性アルコール中毒だな

大学3年目の新入生歓迎コンパで一気飲みしててな、うん、それで死んだ

情けない終わりだったな

気がついたら水の国、霧隠れの里で生まれていた

血霧の里と呼ばれた時代に生まれおちて・・・辛かつたな卒業試験・

・

物心ついたとき、あるはずの物がなくて錯乱してな、近所に住んでた兩由利さんって人が病院まで連れて行つてくれたのを覚えている

・・・連行といつても差し障りはなかつたな

女になつて本格的に絶望したのは、月の物がきたときだった

かなりきつい体質で下忍だつた当時任務中に氣絶しちまつて・・・
ああ、子供産みたくないなーとか思つてた

微かに残つてる男としての意識が”私”をおかしくして、月経をとめる薬を服用し始めた

誰にも知られないようにこそこそ行動して、中忍になつてしまはらく
たつた任務中

スパイ容疑をかけられて追われる身となつた

任務で渡すはずだつた巻物をずっと持つたまま実家に助けを乞いに
戻つた

・・・干柿 鬼鮫、奴が実家の前に立つていた

今でも憶えている、鮫肌が私に迫る風圧と音、私の死など幾許の興
味もない無慈悲な目、削られしていく肉の感覚

握つたままの巻物が手から離れて、気がつくと私は草原に立つていた

何事かと辺りを見回し、異変に気付いた

体が幼少時のものになつてゐる、服装までもがその当時の物だつた
呆然と立つてゐると忍びらしき人々が私や、同じ年代の子供を木の
葉に連れて行つた

皆、戦災孤児だつた

そのなかにサイとシンがいたみたいなんだが・・・今は関係ないな

何人かの忍びと面会したあと何故かダンゾウに引き取られた

霧隠れの南天 イカリは木の葉の志村 イカリになつた

てつくり根の者として育てられたのかと思つたら普通に養子の手続きがなされた

未だに養父の考えは読めない

それからは、うーん、ショロが大体言つてるしなー

あ、そ�だ原作にサクラにじめていたグループいだらう。

あいつらの標的になつたわ、何故かサスケファンクラブも一緒にいじめてきた

だからね私はどこでサスケとフラグ立てたかさつぱりわからんのだよ

なんで男なんかに好かれなきゃならなんんだよー！

「女だからだよ」つて・・・やめてくれ泣きたい

やめろよーそんな目で見るなよーやだー シュロ助けてー

希望は底の深い海のうえでなければ決してその翼を広げない（前書き）

希望は底の深い海のうえでなければ決してその翼を広げない

スマーリン

希望は底の深い海のうえでなければ決してその翼を広げない

ただいま授業中、しかし暇であるゆえに・・・下らんことを考えて
みる

転生したことになんらかの理由があるのでないか

そう思いついてオレ達三人の死因や転生した状況をまとめ考察して
みた

話を聞く前に仮にあげておいた転生条件などをノートに書きだす

・転生者の死因が関わる ×

死因は他殺、事故（？）死、・・・病死？熱中症なら病死なのか？

偏った死因はなく、これも規則性はなさそうだ

自殺はなく、”神様”が同情した説もないだろう

”神様”のミス説はわからないので保留

- ・転生者の年齢が関わる ×

シユロは15、イカリは21、オレは16で死亡
年齢に規則性も見出せず、享年は関係ないようだ

- ・転生時に”神様”は出現したか

俗に言う神様転生ではなかつた、三人とも気づけば転生していた
だが、出会つた記憶を消されたという可能性も少なからずある
しかしそれならば何故原作知識があるのかという問題点が挙げら
れる

- ・我々はチートか

虚弱体質元・人柱力、元・暗部だがマダラに瞬殺された油女一族、
万年中忍止まりな感知系くのいち

- ・・・正直、最強系チートではない

頑張ればシユロがチートになれるかもしれない

・我々に共通事項はあるか

日本出身、全員平成生まれ、NARUTOを既読、転生後再びト
リップ経験

コンの場合 高校生・病死 転生・人柱力 時空間忍術の応用で
並行世界ヘトリップ

ショロの場合 高校生・他殺 転生・油女一族・他殺（時空間忍
術の発動を視認） 並行世界に転生し直す

イカリの場合 大学生・事故（？）死 転生・霧隠れくのいち・
他殺（任務で所持した巻物は時空間忍術に関わる）幼少時の姿で
並行世界にトリップ

もしかすると、我々は死ねば転生しなおすというループが出来か
けている？

トリップ時の状況から考えると時空間忍術が関係しているかもし
れない

そしてその時空間忍術が同種のものであつたとするなら、三人が
同じ世界にいる原因になるのか

またこの世界が原作と決まつたわけではないが、限りなく原作に近
い並行世界だと仮定する

明らかに違う世界だつた月隠れ、

油女一族にトルネがいなかつたといつシユロの世界、
水影がやぐらではなかつたといつイカリの世界

原作と多少ズレがある各世界だつたが、この世界が一番原作に近い
のではという意見がまとまつた

・結論

時空間忍術がトリップに関わると仮定、その情報収集及び研究を
進めること

転生ループが続く可能性があるためそれの阻止を目指

「・・・でも全部仮定に過ぎないんだよな・・・」

ノートを閉じ机に突つ伏す

イルカ先生が黒板を消している

授業を受けた振りをしながら無駄に頭を悩ませた

「・・・コン、シユロから手紙だ」

隣の席のシノがこいつそつと手紙折りしたメモを置く

本田シユロはナルトと犬塚とともに悪戯を決行したため罰として、一番前の席に座つて授業を受けている

先程から問題をあてられまくつで可哀想である

「じつこづルートで回つてきたのか、前の席のシカマルとチョウジに
覗きこまれる

シノは虫を使つて見よつとしてる

「・・・なんなんだよお前ら・・・」

そこまで見たいもんじゃなーだろと机につつ隠しながらメモを開いた

シユロパパよつ

・・・田が点になるつていうことだらうか

「コソ、一枚田が来たぜ」

シカマルが新しいメモを渡す

「

イカリママと一緒に一楽だつてばよー！

ナルト兄ひやんよつ

「オレが兄だよー。」

思わず叫んだ

認めない、絶対に認めない、ナルトが兄とか認めない！

前の席で2人分の含み笑いが聞こえてくる、ふざけんなお前

「…、パン…パン…」と軽く咳きこむ振りをすればイルカ先生は顔を青くして頷いた

体の心配より頭の心配をしたような慌てたイルカ先生

「…すみません、本日はこれで早退をせいでいただきます」

帰り支度を済ませ教室を出ると、何故かイカリが居た

「ママだからな」

親指を立てるな良い笑顔をやめろ

その後、四人でアカデミーをサボつて一楽に行つた

希望は底の深い海のうえでなければ決してその翼を広げない（後書き）

一 楽で頼むもの

ナルト	みそチャーシュー	(濃い味好み)
シユロ	魚介醤油	(あっさり好き)
イカリ	サンラ タン	(キワモノ好き)
コン	鶏がらスープ	(ラーメン食えない)

アカデミーでの日常

恐らく次話でアカデミー編終了

予定は未定

未来の「じぶせない」（前書き）

未来の「じぶせない」。しかし、我々には過去が希望を託してくれ
るはずである。

チャーチル

未来のことは分らない

待ちに待った卒業試験

現在ナルトが不合格を言い渡され、肩を落として教室から出てきたミズキが事件を起こせば合格できると分かっているので慰めもしない

正直に言つて今は自分の試験のほうが心配なのだ

先程から緊張しすぎて血を拭ついたことも忘れていた

「次、ねたみコンはいれー」

イルカ先生の呼びかけ

倒れそうになる体を叱りつけ入室する

「良いがコン、集中してやれば出来るんだからな」

印を組み、バルコのチャクラと自分のチャ克拉を混ぜあわせる

狐火が現れないよう、ゆっくりとチャクラを合わせ分身のイメージを作り上げた

出来る

オレは出来る

そつ何度も心に念じ、術を発動させた

アカデミーのプランク、悲しい時にいつも座る嫌な思い出に溢れる
プランク

試験に落ちたオレは、合格した奴とその親の会話を眺めながら「」
を待っていた

「ナルト、残念だったな！まだ落ち込むには早いけどな」

合格したシユロが背後から現れた

どんなイベント事も、シユロの家族が来たことはなかった

シノの親は来てたのに、相変わらず不思議な奴だつてば

シユロが居るならイカリも居るだらうと辺りを見渡す

居なかつた

「残念！オレの嫁は御養父様と今頃お食事会だよ」

イカリの父は一度だけ見たことがある

いじめがエスカレートして事件が起きた時にアカデミーに来ていた
つてば

「ママが居なくて淋しいか？ん~？」

「・・・シユロの親、どうしたんだつてば」

「多分その辺の陰から見てるんじゃねーカナ、親じやなくて兄貴だ
けど」

・・・やっぱり油女一族つてわけわかんないつてば・・・

シユロと話してみると、周囲からの嫌な声は聞こえなくなった

その代り、妙なざわめきがはじまつた

「合格した……」ぼつ

コンがミズキ先生に支えられながら大量に吐血してた

・・・そりや普段見慣れてる俺等はともかく、親は騒ぐつてばよ・・

「・・・って、合格!…やつたなコン!…

体が弱過ぎて術が大丈夫でも、合格を言こ渡されるかどうか不安だ
ったコンが合格だつてば!

これで馬鹿にしてたキバの奴に一泡吹かせられるつてぼつ

まるで自分のことのように嬉しくなつた

オレつてば、不合格だけど・・・

「ああ・・・でも無理しそぎた

「これから病院行ってくるからシユロついて来い」

ミズキ先生がシユロにコンを渡す

シユロは慣れた手つきでコンをおぶつた

「本当なら教師のボクが行くべきなんだけどね・・・」

良い先生だつてば

イルカ先生なら問答無用でシユロかイカリに引き渡すつてばよ

「いやーでもミズキ先生はコンの入院セットの場所知らないからなー
イルカ先生なら任せるんだけど・・・火影さまに捉まつてるから
駄目だね」

・・・?

なんかシユロの言葉が刺々しいよーな?

「それじゃ、俺ら病院行くわ
ナルト、多分今日中には帰れないと思うから戸締りして寝てて良
いぞ」

そつ言つてシユロは病院に向けて走つて行つた

2人が居なくなるとまたオレへの陰口が始まり、ミズキ先生が肩に手を置いて場所を移動しようと言つてくれた

ナルトもミズキも知らなかつた

病院へ行つたはずのシユロとコンが陰から覗いていたことに

原作通りに進むと確信し、改めて病院に向かつた一人であつた

「えー、それでは既に、無事卒業試験合格とこいつとおめでとうございます！」

入院ではなく診察だけで済んだコンの体調にもおめでとう…
というわけで会場をお貸し頂いたダンゾウ様にお礼を申しあげま
しょう！」

ここは志村邸の地下と言えば地下、根の本部につながる控えの間

小さなテーブルを運び込み、ジュースとオレの嫁手製の料理が彩ら
れる癒しの空間である

たまに任務帰りの根の人々がリア充爆発しろ的な目で見てくる

おつかれさまです

「「ありがとー」」

部下に報告され注意するために控えの間にやつてきたアラタダン
ゾウに、2人からのお礼の言葉を贈呈していただく

オレの嫁と息子は可愛かろい、お前の義娘と義孫は可愛かろい

「・・・お前たち・・・いや、もう何も言つまこ・・・」

怒鳴るつもりだったようだが出鼻を挫かれ頭を抱えてしまった

「めんなお養父さん！」

「……はあ……久しぶりだなねたみ、体調はどうだ？」

さめるまで雑炊を搔き混ぜてこるコンを温かく見守るダンゾウ

流石ジジキラー・コンだな

「今日は吐血しても入院しませんでした」

コンや、爺はともかく他の根の人が引いてるよ

「……ダンゾウさま……」

部下がダンゾウに耳打ちする

もじゅや……

「……もつ拷問部隊に連れて行かれたころだらう、放つておけ

アカデミー卒業試験の日に拷問部隊が必要な事件……

ミズキが動いたか

「・・・ナルトは無事ですか養父さん」

俺らには聞こえなかつたのにイカリには聞こえていたようだ

感知系だけあって耳が良い

「・・・影分身を習得したため、不合格を取り消し合格となつた」

コンがうつすら微笑んだ

その笑みが示すのはナルトの合格への喜びか、それとも別の物か

始まる、ここから原作が始まるんだ

今度は負けてたまるかよ

何よりも足りないものは

志村邸より直接アカデミーに向かい、説明会場に座る

ちらほらと席が埋まっていたが、どこか騒がしい

ナルトはすでに会場入りして、合格になつたことを自慢していた

隣にシノが座つてきた

「・・・声をかけないのか」

「良いんだ、分かつてたから」

「・・・それなら、良い」

ミズキは逮捕され今頃背後関係を洗い浚い吐かされているだらう

原作に入れるにしてもしないにしても、ナルトには合格してもら
いたかった

「ナルトが、うちの子がヤローとキスう～！？」

ナルトに声をかけに行くと離れたシユロが泣き叫んでいた

原作で分り切っているはずなのに、わざわざ見学するなんて・・・

ヤロー同士のキスとか嫌だろ

「・・・引くわー・・・」

泣き崩れたシユロを慰めながら距離を置くイカリ

「！？イ、イカリ、これは事故だ！」

顔を青くして主張するサスケ

その横ではナルトがサクラにボコボコにされていた

・・・地獄絵図だな

「お前ら、席に着け！
これから班を発表するぞ！」

「イルカ先生オレ、コンどが良い！」

何のための班わけだよ

案の定イルカ先生に怒られてやがる

「・・・可能ならば、オレもコンどが良い
もしくはシユロだ、何故ならどちらもオレの性格を熟知している
からだ」

騒がしいと言われるシユロだが仲は良いらしいシノ

基本的にシノの話を最後まで聞くよにしてるからだらうか

「油女一族に挟まれるとかバランス悪いぞ
でも一度シノとシカマルとシユロのトリプルで組んでほしい」

作戦立案シカマル、情報収集シノ、実行シユロ・・・ああドSトリ
オだな

「・・・以上第五班、次、

第六班は 油女シユロ、志村イカリ、ねたみコン！」

いつのまにか班が発表されていた

多分こうなると思っていたが・・・

(((イルカ先生メモのまんまじやないか? !)))

サスケが睨んでくる

そつかそつかごめんな

「では次第七班

「つちはサスケ、春野サクラ、つずまきナルト!」

こちらも原作通り

くのいちトップの学力のサクラならバランスは良いの・・・かな

「やだー「コン」とが良い! サスケと「コン交換するつばよー!」

ナルトが駄々をこね始めた

オレ嫌だよ体力持ちそうにない班に入るの

しかしオレとサスケを交換したらえらいことに……

「やめろ修羅場を作るつもりかお前は！」

シカマルがみんなの心を代弁してくれた

火花舞い散るどころじゃないからなシユロとサスケは……

言われて氣づいたらしくナルトは青ざめていた

シノまでもがシカマルの言葉に深く頷いていた

イルカ先生が騒ぎを納めて次々と班を発表していく

原作通りの班となつた

「それでは一旦休憩を挟んで、午後から担当上忍から説明を受けて
もらう

なお第六班の担当上忍は、任務上の連絡不備により遅刻されるそ
うだ

だからと書いてアカデミーから出たりせず教室で待つこと、以上

！」

休憩をはさみ、各自昼食をとつて教室に戻ってきた

七班は何かしら問題が起きたようだが関わる気にはなれない

しばらく待ついると次々に上忍がやってきて担当の班員を連れて行ってしまう

現在残っている班はオレたち六班と、ナルト達七班だ

遅刻してくる上忍といえば原作では1人しか思いつかなかつたのが・・・誰だろう

(力カシかな?)

(え、でも力カシって遅刻連絡とかしないじゃんか
別の人じゃないか?)

(あんまり上忍つていないよな、特別上忍つて担当になつたかな?)

(「コンつてば三人でひそひそ何を話してんのだつてばよ」

(うう・・・サスケ君の視線が志村さんに・・・)

(・・・シユロ、近すぎだ・・・)

そろそろナルトが待つのに飽き始めるじゃなか?

そう思つてふと扉を見つめると影が一つあつた

・・・担当、上忍か

耳を済ませると女らしき高い声とやる気のなさそうな男の声が聞こえてくる

女が叱りつけてくるようだ

扉が開けられた

冷や汗をかいたはたけ 力カシと、長身のくのいち 何故か竹刀を背負つている が無表情で歩いてくる

「あ～・・・七班担当のはたけ 力カシだ
七班は、君たちだね?」

「遅刻してすまない、六班担当のまじらず シナイだ
六班は・・・揃つているな」

シナイ、原作には居ない人だな

どんな経験の人なんだろう

「それじゃ、説明するから場所を変えようか」

「え、もつ合図で良くないか?」

きょとんとした顔でカカシに言いつのね

「ダメです」

「ひつ」

わざとらしい舌打ち

ジト目で見つめられ顔をそむけた

呆れたようにカカシがしゃべりだす

「シナイ、君説明が面倒なだけじょ」

「いやいや、こちらの不手際で生徒をこんなにも待たせてしまった
んだ

これ以上無駄な時間はかけるべきじゃない

そう考えるとこの場で説明するのがベストだと私は考える

「シナイの場合は仕方ないでしょー？」

「一時間前まで国外にいたんだから」

「・・・なあ、私は仕方ないとしてなんでお前遅刻してきてるんだ？」

目を逸らした

そうだよな、七班の連中が可哀想だからもつと言つてやつてくれ先生
便乗するように七班がそーだそーだと騒ぎたてているとカカシがキ
レた

「お前らの第一印象はキレイだー！」

・・・俺たちも入つてんのかな

カカシが逃げるように七班を連れて場所を移動した

開いている席に座ったシナイ上忍が俺達を向きあつ

「それでは改めて自己紹介しようか

私はまじりず シナイ、先月まで特別上忍として国外任務で里を離れていましたが、この度上忍に昇進しました

君たちと一緒に頑張っていきたいと思います、受かればね

分かつっていたことだが言われるとまだまだ忍者には遠いと実感させられる

「・・・やっぱまだ試験あるんですね」

イカリが声を絞り出した

「予想してたか？残念ながらまだお前たちは下忍じゃない
このプリントに書いたとおり、今から試験を受けても「
それに無事合格すれば晴れて上忍となる
がんばれよ、合格率0%の試験だ」

時が止まるとは何を言ひてこるんだ

一体何を言ひてこいつらは

「・・・は？」

「ああうん、だつて私今回初めて下忍試験するから

笑いもせず淡々と言われる

・・・誰も受けてないから、ね・・・

一体どんな試験なのか、渡されたプリントを読む

問・下忍に足りないものは、情熱思想理想思考氣品優雅さ勤勉さであるが

そして何よりも足りないものは何か、答えよ

―― が 足りない

(((. . .)))

三人共一斉にプリントから目をそむけ空を仰いだ

「どーしたー? わからないかー?」

無表情ながら笑っているような声がイラつかせる

限界が来た

「スクライドじゃねーか！」「クーガー兄貴の名前を良くも汚してくれたな！」「衝撃のアルベルトー！」

三者三様、机から身を乗り出し叫ぶ

イカリ、分かつてるとは思うけどファーストブリットだから、衝撃
破出してくるおっさんだからそれ

「・・・え？え！？ええ！？」

まさか、と小声で呟いた

「・・・先生、あんたも転生したのか」

何よりも足りないものは（後書き）

・・・うん、クーガー兄貴つて熱いよね・・・

活動的な馬鹿（前書き）

活動的な馬鹿より恐ろしいものはない。

-ゲーテ-

活動的な馬鹿

まさか担当上忍までもが転生者だとは思いもしなかった

第六班は転生者集団、完全なイレギュラーだ

自分の問題の元ネタを指摘され、机に不貞寝していたシナイ先生だ
つたが氣力を持ちなおしたらしく座り直す

「と、とりあえず自己紹介！自己紹介しようそうじょう
まじらす シナイ、元中学二年女子、木の葉創設以前に生まれた
それでもう一度死んで転生したんだが・・・皆は？」

中二か、病気は発症していないだろうな

いや、発症してたらもうひとつ世界が変わってるか

「・・・志村イカリ、大学三年男子、霧に生まれ後にトリップして
きた

現在は志村ダンゾウの養子となつている

好きなものはきのこ料理、嫌いなものは・・・サメだ

「え、T S? しかもダンゾウ・・・!?

あと霧でサメってなんか思い浮かぶ方がおられるのですが・・・

想像通りであつてると思つ

軽く、とこうより間違いなくトラウマになつてゐるだろうな

「じゃ、次オレね

油女シユロはぴちぴち女子高生、うちには夫妻と同期で転生しなおしてこうなつた!

シノの従兄弟で蜂使い、好きなものは海鮮鍋とはちみつ、嫌いなものは薬草カレー

いやーカレーの不味さに油女一族滅べばいいと思ったね

「JJJにもT S・・・だと・・・?

・・・油女一族にしてはやかましい・・・いや騒がしいな

言ひ直しても意味変わつてないぞ

確かに五月蠅いけど

「・・・ねたみ ロン、元は男子高校生、人柱力として生まれてト
リップしてきた

尾獸は封印されちまつたからただのガキだ
好きなものは・・・雑炊、嫌いなものは油っこいもの
TS2人とそのままが2人か」

「なんかチートっぽいのがいるな・・・」

残念ながらそんな力はない

じっくり観察されてもオレはチートじゃないんだ

「なんだよある程度覚悟も経験もありそうな奴じゃないか・・・

・・・いいよもう合格で」

「「「試験しろよ」」」

「・・・じゃ、私はアカデミー内で隠れるから見つけろ
一番最初に見つけたやつを合格にしてやる
では、散！」

諦めたように溜息をつき、目にも止まらぬ早業でこの場から消え去

つた

「・・・一番最初つて・・・」

「どう考へても仲間割れを誘発してないか」

「裏の裏、つて奴かもな?」

・・・多分、チームワークを見るつもつじやないのかな

しかし、あの人話聞いてたのかな

「リリーリーのシロロ様が居るつてこうのこ・・・」

服の陰からあととあらゆる蜂が飛び出していく

命じない限り決して人を刺すことはないが、大量にいると怖い

「よつしや蜂子、蜂美、蜂蟻、まじりすシナイを見つけ出せー!」

蜂なのか蟻なのか

「口寄せ・・・遠見水晶」

バッグから口寄せ用巻物を取り出し水晶を呼び出す

・・・それ、三代田が使つてたやつじやないか？

「養父に誕生日プレゼントに強請つた類似品だ」

甘くないかなダンゾウ

遠見水晶でアカトミーの教室を写し出し、不審そうなものがあればそこへ蜂を派遣させ確認させる

・・・

「ちよっと行つてくる」

「分かつた、何をしてくるかわからんから『氣をつけろ』

教室からでてしまし歩き続ける

『氣配は消さない、足音も出るがまま

校内に残っている教師からはこいつ吐血するかびくびくされる

職員室についた

おもむろに扉を開き、田当ての人物を探す

良かつた戻つてきてる

「イルカ先生」

お田当ての人物は我らがイルカ先生

昼頃に二代目と昼食取りに行つてたから、職員室に戻つてきている
か不安だったが大丈夫らしい

「どうしたコン? 担當上忍の先生はどうした?」

「ちよつと先生にお願いがあるんですが・・・」

このまじりず シナイ、影の薄さはシノクラス
幼少期より最後まで見つけてもうえず泣く泣く帰宅した思い出ばかりだ

懐かしいな、私の下忍合戦試験もかくれんぼだった

違うのは隠れるのが私達生徒側だったというところか・・・

感傷を振りはらい、気を引き締める

油女一族の蟲を警戒して、匂いのキツイ保健室に隠れてみた

名家はこういう風に対策が取りやすいが、残る2人がどう出るか

原作を知っているといふことは仲間割れしないだろう

見るからにイカリといふ子は後方支援型、コン・・・あの子何なん
だろう

人柱力つて探索・・・感知出来るつけな

恐らく戦闘がメイン、囮役と見る

各人の予測をつけこちらからも様子を見なればと口寄せでタンチ
ヨウツルのチョーさんを呼び出す

千里眼持ちのチョーさんを介して教室の様子を伺う

・・?

コンがない?

ピンポンパンボーン

緊急放送、緊急放送

まじりゅう上忍、アカトミー内におつましたら至急職員室まで来られだし

繰り返します、まじりゅう上忍、至急職員室までお越し下さい

緊急放送、おわり

ピンポンパンボーン

・・・緊急放送！？

しかもこの妙に聞き覚えのある声は・・・つみのイルカか！？

三代目の信頼厚い謎の中忍（あいつ絶対中忍じゃねーよ）が緊急放送だと！？

ま、まさか昨日の任務にミスでもあつたのだろうか

急いで職員室まで走りこむ

勢いよく扉を開け放つと、キヨーンとした顔のつみのイルカがいた

「放送を聞いて参りま「みつけ」……した……？」

彼の膝に座る幼子……いや違つ、やつを呑つたコンだ

理解した

「私つて、ほんとバカ」

「……つと、本当に来ると思わなかつた」

「コハ、まじりあ上忍、一体何がどうなつてゐるんですか」

「どうわけで、合格していいよ君たち」

仁王立ちで合格を告げられる

真面目に頑張っていたシユロとイカリが不憫だ

「・・・釈然としない」

「五月蠅い五月蠅い！明日から早速任務・・・と言いたいところだが
が・・・

だがしかし、お前らは体力が全然足りない
みつちり基礎を仕込んでから任務に移るぞ」

「まあ術とか覚えてても一度生まれ直してるので
ガキ並の体力しかねーや」

そんなこと言われたらオレの体力ダメダメじゃないか

「とりあえず明日は昼に演習場に集合
夜には拷問部の見学に行くから」

「は？」

「視覚から鍛えないとな」

そして翌日、宣言通り夜に拷問部へ行き・・・森乃イビキが冷や汗
かいて見守る中見学した

それからというもの、忍びの裏とも言える凄惨な現場を見学せら
れることとなる

・・・スバルタ、なんでもんじやない

自分が優っていないのは立派な恥（前書き）

他人と比較して、他人が自分より優れていたとしても、それは恥ではない。

しかし、去年の自分より今年の自分が優っていないのは立派な恥だ。

ラポック

自分が優れていないのは立派な恥

昼は鍛錬、夜は裏社会科見学というパターンが出来て一月もたつた
だろうか

本日は珍しく、演習場ではなく、忍待機所の受付に集合とのこと
よりやく任務を受けるのかと内心ワクワクしている

家に帰ればナルトが今日の任務がどうだ、明日の任務はこうだとう
るさかつた

自慢されているようで腹立たしかつたのだが、これでオレも下忍の
一步を踏み出したか・・・

興奮しすぎて寝不足だが、今日も元気に頑張るぞ

「よし、六班揃っているな

それでは初任務の発表する

・・・抜け忍の死体の後始末・・・墓穴掘りだ」

・・・え？

「待った、それ下忍にさせる任務か？」

「D・・・Cランクを初任務にさせる？」

言葉をかけることも忘れ、ただただシナイ先生を見上げるオレ

シユロとイカリは冷や汗たらして抗議していた

何故Cランクなんだろ？が、Dでもよさそうだけれど・・・

そう思つてみるとイカリが説明してくれた

「忍者の死体つて術や血継限界の宝庫なんだよ
どこの里でも死体の処理はランクが高い
私達にやらせるつてことは重要度の低い抜け忍・・・かな」

そのとおりとも言いたげなシナイ先生

死体か・・・

切り刻まれてるまだ生きてる人なら耐性あるんだが・・・

「いや・・・私もまだ早いと思ったよ？」

「だけどな？お前ら拷問耐性あるしはある程度術も覚えてる
体力不足はこれからだが、そろそろ実践もしておかないとな」

半年は裏社会科見学コースの計画だったんだよと語りられる
遠巻きに眺めていた他の忍たちが責めている

そんなに酷いのか

（半年の予定が一ヶ月のこととは・・・）（ああ、短縮されるほど拷問耐性あるんだ・・・あの班ちょっとこわい）

・・・ひそひそ何話してるんだろうか

シユロは聞いたみたいだが教えてくれない

「はい、これが貸出品のスコップ
元気に墓穴掘りに行こうぜ！」

受付でのこんな会話が原因で、それから暫くオレ達六班のあだ名は
暗黒系忍者となつた

やだな

墓穴掘りから始まり、拷問部の道具清掃、医療部の洗濯、暗部の訓練器具の整備等々

あまたのD及びCランク任務をこなしてきた

基本血みどろだった

本日の集合場所は木の葉の門

昨日、先生から里の外へ出るため弁当を作つて持つてくるようひこと言われ用意した

ちなみにイカリはシユロの分を作つて、オレは先生とナルトの分を作つた

ナルトも弁当持つて里の外に出るらしい

・・・あれ、なんか引っかかるぞ

「それでは今回の任務は久々のランク
暗殺でござります」

「待て待て待て！
確かにオレらは大丈夫だけどな！？」

シユロが叫んだ

イカリはオレを見てから目をそむけた

そうだ、暗部だったシユロと血霧時代を生きたイカリは暗殺は慣れ
たものだ

裏社会科見学も、オレとは違いすぐに調子を取り戻し、怯える演技
までして見せた

拷問される側のオレは・・・ダメだった

血の匂いは平氣でも、あの痛みが降りかかっているのかと思つと眩
暈が起きた

「この班の不安要素はオレ

「その任務オレがする。イカリとコノセそのサポートを」「今回の
任務はすべてコノにてむか」

ツー！」

先生がオレと向きあつ

「血の匂いに慣れて肉が潰れる感覚に慣れていても殺したことば
ないだろ？」「

殺しなさい、感情も想いも全て殺しなさい

戦乱の時代に生きるしかなかつた先生の言葉は、とても、重かつた

「それでは出発する

ターゲットは波の国に滞在している、ガトーといつ男だ
何、心配いらん、大名などと比べれば警備も薄いしな」

「・・・オレ、ここの爆弾発言に泣けばいいのか笑えばいいのかわからぬ」

本当にこの人馬鹿だよ

「コソ、気を強く持つんだ頼むから」

哀れむんじゃねー

「え、何、何の話?」

「あれ? シナイちゃん?」

「コソがいるつてば!」 「・・・イ、イカリ・・・」 「仲良しトリオ!?」

自分の発言を理解していないだろう先生の背後から第七班、原作主人公組と老人が現れる

先生を三人で囲み、彼女の耳元で囁く

(シナイちゃん先生、波の国、七班で思い出す!」と云ふ。)

(あとガトーね)

(制限時間は三十秒ですよ)

「・・・あ、原作・・・」

(気づいてなかつたんかい!)

(だつてもう60年たつてんだもん・・・)

自分が優れていないのは立派な恥（後書き）

限りなくBに近いCランク

信頼を強めることは出来ない（前書き）

どんな外面向的な強みも、自分に対する信頼を強めることは出来ない。
人間の強さは、内側からくるものでなくてはならない。

R · W · クラーク

信頼を強める」とは出来ない

「『あんせつぱじ任務やめとこう、別の任務にするから、ね！？』

「H口仙人に大蛇関係言つてあるからもう遅い！」

原作介入したくないよと駄々をこねる先生にシユロの無情な一言

崩れ落ちる先生を無視して七班と向きあつ

「「コンも波の国に任務へ行くの？」

「やうだよ」

「オレ達このおつちやんの護衛任務なんだつてばよ
コンの任務は？」

「暗殺」

「・・・」

皆が固まつた

多分うちの班は任務内容をばらしたことにひいて固まつてこりのだ
るつ

カカシが先生の肩を掴んで凄み始めた

「ちよつとシナイちゃん・・・?」

「だつてこいつ等そつち向きなんだよ・・・」

スバルタ教育にもほどがあるでしょーと怒られる先生

「あ、あのまじりす上忍つてカカシ先生とどついう関係なんですか?
シナイちゃんつて呼ばれますけどー」

サクラがこの場の雰囲気を誤魔化すつと露骨に話題を変えてくる

まあ確かに初めて会つた時はちやん付けしてなかつたけど……

友達?と見上げてから首を傾げた

「え・・・あ・・・その・・・だからちやん付けはやめてって言つたでしょーーー!」

顔を赤くして明後日の方向へ走り去つた

無表情で顔が染まつていいく光景はシユールだった

「あ・・・んー、ちよつと待てば帰つてくれるでしょ」

「あの・・・私何か言つちゃだめなことを・・?」

別に変なこと言わなかつたと思つんだけど、なあ

「おいおい・・・うちの班も大概だが、お前らのとこも妙な奴が担当だな・・・」

サスケ、一緒にしないでくれ

「あの人は遅刻しないよ?」

そういうとサスケはカカシを睨んだ

「・・・良いなお前ら」「うんうん」

うらみがましい田で見られる

「アハハ・・・でもね彼女ああ見えてす」いんだよ?」

「ど!」ら辺が?」「アホさ加減か?」「ボケつぱりか?」

「自分との担当の扱い酷くないか?」

信用できない

だって原作忘れてるし、アニメとかマンガのセリフすぐに引用していく

「シナイが戻つてくるまで波の国へ向かいながらお話ししてあげよつ
まじらす シナイ、いや、木の葉の歩く名言集のことをね」

（あいつ俺等以外にもセリフ言つてやがつた…？）（近年稀にみる
アホだ…？）（やっぱりあいつ中二病
じゃねーか！）

七班は老人 タヅナを囲み、その後ろをカカシがついて歩く
オレたち六班はカカシの後ろをついて行く

ビツセ目的地は波の国、先生も追いついてくるだろう

生徒を置いてどつか行つた先生が悪い

カカシは本を・・・イチャバラを読みながら語つてくれる

「木の葉の歩く名言集、または名言のまじらすとビーンゴブックに記
される、ある意味伝説のくのいち

外交専門の特別上忍として各国を渡り歩き、長期任務を数多く遂
行してきた

彼女の一言一言が数多の人間の心を打ち、とある戦を終結させた
とも、暴君を改心させたとも言われる

中でも有名な話は彼女のアカデミー時代、火影縁の人間を誘拐し

た他里の上忍を一喝し、殺されかけながらも救出したといつ逸話だ

「アカバニー生が……上忍と…？」

七班がざわめき出す

(木の葉創設時代に生きてた人だから……戦えたのかな)

「それと、忍びとしては珍しいほどの外交上手で
木の葉への支援金の3割は彼女が大名と交渉して手に入れたもの
なのさ

戦忍と比べると力は弱いが、優秀な支援系忍者だ
何よりその言葉に共感、感心する敵の多いこと……木の葉のく
のいちと問われると彼女の名が挙がるものだ」

「3割も……本当にすごいのいちなのね……」「いいなー口
ノの担当」

(なんだか……)

(名前だけ1人歩きしてるように……?)

「それで、カカシ上忍とシナイちゃんの関係は？」

ちやん付けを定着させる気だなイカリ

「んー・・・オレの、自称ライバルの班員でね彼女いつも突つかかってぐるソイツを回収してくれてね・・・」

((((ガイのことか)))

あの青春男と班だったのか・・・

・・・うん、名言使つたら喜びそうな男だな

「昔馴染み? なんだろ・・・最初はアカデミーの件もあつてシナイさんって呼んでたんだけど

距離を感じるつて言われてからシナイちやんだね」

カカシの中でも立ち位置が定まつていないうらしい

「ただいまー」

何やら脇に忍らしき男2人抱えて帰ってきた先生・・・いや

「おかえりシナイちゃん」

ちゃん付けを定着させることにする

「26にもなつてちゃん付けは嫌！！」

「じりなつたコンは止められませんぜ先生よー」

「どうで、そちらの方々は・・・」

「なんか水たまりに化けてたから捕まえて吐かせてみました
ガトーの手の者らしい」

鬼、兄弟か・・・

シナイちゃん、本当に原作を思い出したか？そいつら結構大事な役割してたんだぞ？

主にナルトのメンタル面の成長に関わってるんだぞ？

タヅナさんが心当たりがあるという表情を隠しきれなかつたため、カカシが問いただしている

「ちよっとシナイちゃん」ひかわおいでや？」

「あの、ロンがなんだか怖いんですけど……」

「大丈夫、O HANASHIするだけだから、ね？」

波の国編のあらすじを思い出させるため、6班全力の話し合いが行われた

面倒な人が担当になつたもんだ……

ふと七班の会話を聞いてみると、原作通り波の国に忍者がいないといふこと、火影のすこさなどが語られている

鬼兄弟を見て戸惑つたナルトに対してサスケが挑発している

イレギュラーがいても、話は進むようだ

自分自身とも違っている（前書き）

人は、他人と違っているのと同じくらい自分自身とも違っている時がある。

ラ・ロシュフール

自分自身とも違つてゐる

霧深い海を船でわたり、波の国へと入り、マングローブから陸へ上
がる

タヅナ氏を囲みながら七班が先導する

再不斬戦ではどうなることやら」と考えていると違和感を覚えた

「・・・先生」

「わかつてゐる

コンを中心に鶴翼の陣だ」

鶴翼、すなわちくの字に並ぶこと

シユロ、オレ、イカリの順に並び、その数歩進んだ場所で先生が竹
刀を構えた

「伏せろー。」

ブームランのように飛んでくる大刀を伏せて避ける

シユロは蟲を準備し次手に備えた

「へー・・・霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか」

「カカシ、スタミナ切れには気をつけろよ」

「ああ・・・だが、このままじゃあ・・・ちとキツイか・・・」

目を覆っていた額当てを上げ、写輪眼の用意が始まる

「写輪眼のカカシに、名言のまじりずっと見受け
悪いが、そのじじいを渡してもらおうつか？」

「シナイ、今回の任務にお前は関係ない、任せろ
再不斬、オレと戦え」

カカシと再不斬が睨みあい牽制しあう

距離を測っていたシユロが小さな声をかけてきた

「コソ、危なくなつたら逃げろ
先生はともかく、俺等は勘が戻つてない
守つてやることは出来ない」

仕事のへ、仕事してやるだと？

馬鹿を言つたな、神殿時代なりこそ知らず、今のオレは着実に力をつけている

守られるだけの存在などにはならぬ、なりたくない

ナルト達に「」大層な忍者の在り方とやらを語るあの男に一矢報いたい
ゆつくり印を結ぶ、チャクラが暴走しないようつゆつと、確実に

「シユロの言つことを良く聞きなせ」

七人衆は強敵だ

先生やシユロならともかく、私とお前、じゅ止手まといがいことい
る」

分かつてゐ

分かり切つてゐるやうなこと

いくらオレが力をつけたと言つても、強くなつたわけじゃない

勝てないなんてことは自分でもよく分かつてゐる

それでも、嫌なんだ

印が完成し、少しだけパルコのチャクラを多く練りこみ発動させる

「火遁・業火九球の術！」

水牢の術に捕えられた力カシ、それを発動させている本体・再不斬水分身はナルト達の相手をしている

本体めがけて、九つにわけた狐火の球をぶつける

簡単に避けられるが、構わない

シユロの蟲が再不斬の体に匂いをつけ、仕込みを終えたのを確認もしも、原作通り行かなかつた場合の後始末のための布石
目くらましになるのならそれで構わない

「下忍である火遁・・・今年のルーキーは豊作だな・・・

だがお前ら何をやつてる、逃げろって言つたろ！」

さつさとその水牢から出るよ力カシ、いや再不斬をどうにかしないとダメなんだつたか・・・

それとあの術は火遁ではなくただの狐火を九つにわけただけ

ん？狐火だから火遁でいいのか？

「力カシ、いざというときは私がこの子達を逃がそう！
・・・どうやら、お前のところの奴は、何か策があるそつだぞ？」

・・・本当に原作介入したくないのかあんた？

「クツ・・・いつまでも忍者ゴッコかよ
オレは、お前ら位の年の頃にやもうこの手を血で紅く染めてんだ
よ」

先程までとは比べ物にならないすら寒い殺氣

七班とオレはビクついてしまっている

前にいるシユロとイカリは耐えている、その光景が酷く心を苛まれる
オレはどうしたって追いつけないのでどうか

「鬼人・再不斬、血霧と呼ばれた時代の霧隠れの里には
忍者になるための最大の難関、ある卒業試験があつた」

「ん？ 何故木の葉の下忍がそんな事を・・・」

「・・・霧からの戦災孤児なものでね・・・」

「志村さん、ある卒業試験つて・・・?」

イカリが淡々と語る

霧隠れ出身者として、奴の言葉は何かしら思つところがあつたのだ
ろうか

「生徒同士で殺し合わせる、それが試験
そして十年ほど前その試験は大変革を遂げた
そこにいる奴によつて100人以上の人間が殺されたために・・・」

248

「ああ、楽しかつたなあアレは・・・」

カカシの説明役としての出番を全て奪いやがつた

現実から逃げるように考えているとナルトとサスケが襲われている

印を組み、シユロに合図を送る

蟲がナルトのバッグに入りこんだ

ナルトから投げ渡された風魔手裏剣をサスケが投げるものの、再不

斬は受け止める

一枚目の手裏剣が奴を襲うが避けられ一変化を解いたナルトが現れる

「火遁・閃光花火！」

再不斬の目の前で花火のように狐火を破裂させ田くらましに

「寄壊蟲の術、蜂玉！」

スズメバチの大群を匂いをつけておいた急所にぶつけ、足止めに

「口寄せ・・・風魔手裏剣！」

ナルトに手裏剣で斬りかかるとする再不斬の手から、口寄せで手裏剣を奪い取る

蟲によつて口寄せの術式を付けていたものだ

その隙を逃さず、水牢の術より逃れたカカシが再不斬を止めた

「ナルト・・・それに六班の子達、作戦見事だつたぞ」

「だがコンは後で説教だな」

いつのまにか再不斬の背後に竹刀を突き付けた先生

一言もしゃべつてないと思つたらいつの間に・・・

あと説教されるようなことはなにも・・・と聞いかけようとしたところでも気づく

自分の口から血が流れていることに、いや、口だけではない

一度認識してしまえば嫌でも分かる

目、口、鼻、耳・・・至る所から血を流していた

興奮しそぎて分からなくなっていたようだ

「てめえら・・・」それで勝つたと思つたの・・・ッ！？

再不斬の首に千本が突き刺さる

千本が降ってきた方向を見ればそこには、1人の仮面の少年がいた

カカシが倒れた再不斬の脈を調べているやめろお前がすんな

せめて先生にしてもうおひと手を伸ばすが体がふらついて立てない

ひざから崩れ落ち、イカリに受け止められた

「ン・・・今は休みなさい、良いな！？」

白い肌が青ざめている

そんなに、今のオレは酷いのだろうか

イカリに目を閉じさせられ、増血丸を食べてから身を預けると眠気が襲ってきた

次に目を覚ますと、見知らぬご婦人が顔を覗き込んでいた

どういふことだ？

周囲を見渡すと、布団に寝込んでいる力カシが見えた

・・・ああ、タヅナ氏の家か

「・・・なんだか、病院でよく見る光景ですね」

先生を呼んでくると言つて出て行つたご婦人、名前なんだつたつけな

目があつたのでカカシに話しかける

「・・・「う、 やっぱり君、あの「」君だつたんだね・・・」

「・・・酷こな、短期間で入退院を繰り返す二馬鹿患者にカウンターされてるのに」

「だつて君、いつも呼吸器付けられてたりで素顔見たことなかつたんだよ?」

「あんたもマスクしてるじゃないですか」

「・・・」

無言の睨み合い

わっと手足が動いたなら蹴りあいが始まつていただろハ

「な、なんでお前りそんな雰囲気悪いんだ?」

おかゆを持ってきた先生が立つている

ああ、お腹すいたな

「せとかー、せとひ、せとひ」

からうじて動く右手で布団を連打して催促する

「パンパン叩くんぢやない、行儀の悪い・・・
食べたくば私から奪い取れ！」

「大人げないよシナイちゃん！？」

頭上におかゆの入った土鍋を掲げられる

取れるかよ

「・・・・じはん・・・」

「・・・・・・・・・あ、あーん・・・」

「あーん」

(折れた・・・！あのガイのテンションにも折れないシナイちゃん
が折れた・・・！)

後日、しおりしくすれば先生にお願いを叶えてもらえたとカカシから報告される

なんのこいつぢや

「（もつもつ）・・・といりあの後どうなったんですか」

「再不斬仮死状態、仮面少年奴の仲間、カカシ一週間安静」

「・・・オレ、そろそろ大丈夫です」

「そうなのか？」

「食べてても血の味が混ざらないですかね、もう回復しましたよ」

（（それって回復したって言つの？））

「まあとつあえずナルト達は木登り修行させてるから
コソも参加しなさい」

「シユロロヒイカリは？」

「あの二人はもう修行終えたから任務の下準備をさせている
・・・コソ、お前は何事も焦りすぎだ
人間みな、得手不得手つてものがある
あの一人に追いつかなくて良い、あの一人だけしか見ないのをや
め、自分を見なさい」

「・・・はこ」

オレを、見る

どひゅうって？

聞きたこに酒井を飲み込んで、布団に寝ぐつた

自分自身とも違つてゐる（後書き）

駆け足氣味？な波の国編

一度データがとんだので書き直したけれど力尽きました

三馬鹿患者のメンバーはコン、カカシ、あともう1人は例のあの人
です

チョイ役なのに人気高くて恋人持ちなリア充さんです

ある真実を教える（前書き）

ある真実を教えることよりも、いつも真実を見出すには迷うしなければならないかを教えることが問題なのだ。

J・J・ルソー

ある真実を教える

大木の前に横たわるナルトとサスケ

刻まれた線が2人が長い間修行していたことを物語っている

「あれ？ ハン、 お前もう大丈夫なのか！？」

オレの姿を確認した途端飛んでくるナルト

サスケは一度振り返った後もう一度木登りを始めた

「ああ、 オレも修行に参加することになった
クナイで線をつけるのか？」

「そうそう、 ま、 一度やった方が早いんじゃねーか？」

それもそつだな、 頷いて足にチャクラを込める

一步だけ踏み出すと、 チャクラが強すぎたらしく、 弹かれそうなる

少しだけ調整して片足だけで垂直に立つ

残った片足でチャクラのバランスを取りながらゆっくり歩き出す
自来也との修行では水面歩行を主にしていたせいか感覚が掴みづらい
木の幹をめり込ませて進んでいたが、徐々にめり込みが少なくなり、
軽やかに歩けるようになった

そこで気を緩めすぎたのか、チャクラが少なくなりすぎ、木から落
ちた

「・・・サスケまであともうちょいだな」

「・・・ッ！」

あともう一歩でちょうどサスケの位置まで行けたといつのこと・・・

気を取り直してもう一度歩き直す

すると今度はすぐにサスケを追い越し、天辺まですんなり行けた

「コソ、すげえ！」

ナルトの称賛の声がむず痒く、誇らしい

照れて頬を隠そうとするとき、壁せ返り吐血しながら木から落ちた

「おい、無事かねたみ」

受け身も取れずに落ちると思っていたのだが、サスケが受け止めてくれたらしい

なんと珍しいこともあるもんだ

「・・・すんなり天辺まで行きやがって・・・
・・・コツ、とかあるのか」

あれ、ナルトから聞き出すんじゃなかつたのか

首を傾げてしまつ

「シユロも・・・イカリもさつさと木登りを終わらせやがった
六班はもともと木登り修行していたのか？」

アカデミー時代のライバルが簡単にこなしたのが悔しかつたのか

「いや、シユロは家族から見てもらつてたらしいし、イカリは霧に

いた時に習得してたはずだ

・・・ オレも木登りじゃないけど、水面歩行なら木の葉に来る前にやつてた

忍者の家系の子はよくあることみたいだしな

「水面・・・カカシや再不斬がしていたあれか」

木の葉だと木より水面歩行のほうが難しいって言われてるようだ

「オレは木より水のほうが流れが掴みやすくてやり易いな」

あくまでオレなりのやり方でいえば・・・だけど

「 「流れ？」」

話にはいれず木登りを続けていたナルトが混ざる

「・・・ほら、チャクラって体をぐるぐる廻ってるもんだろ? いわば血みたいな

水も元々流れているものだから、その流れに自分の流れを合わせる、つて感じかな」

流れに逆らわず、一体化するとといえば見栄はいいな
気配の消し方に通じる考え方だと工口仙人に言われたものだ

約一年ほど前の話だといつのに懐かしい

今も覗きしてんかと考えると無性に怒りが湧いてきた

「流れに合わせる・・・か」

こんな感覚的な話で納得したようで、早速木登りを始めるサスケ
先程より随分長く登つているようだ

「・・・木登り出来ても、長い間できないんだよなオレ・・・」

体力的な問題はこれから鍛錬でどうにかするしかないな

タジナ氏の家に戻り、食事の支度をしているツナリさんの手伝いを
申し出る

他愛ない会話をしながら準備を整え、食卓を飾る

「ツン君はいつも料理するの?」

「ナルトと同居してましてね、料理担当はオレなんです
料理の腕ならイカリのほうが美味しいですよ」

血霧時代の配給食が不味くて自炊しなきゃヤバイレベルだったらしいからな

「そうなんだ、一度食べてもらおつかしら」

「イカリよつしゅロが喜びますね、あ、サスケも喜ぶかな」

「あらあらっ、もしかして三角関係……？」

実際に楽しそうですな」婦人

一児の母でもこうつ話は好きなんだな

ナルト達が帰ってきたので、全員そろつての夕食

オレは自分でおかゆ作ってあります

「……体悪いの？」

イナリに話しかけられる

多分、こいつオレのこと同年代だと思ってるんじゃなかろうか

「生まれつきだ

医者からは30歳まで生きれるかどうかって言われてるがな

「……怖くないの？」

怖い、か

パルコより怖いものなんてなかつたからな

「怖いつて言ひよりも時間が足りないのが惜しいな
やりたいこともやれない、だから今出来ることをしなきゃ
あと10年ぐらこしかないしな」

監が固まつた

ビリやらオレの年齢を計算し始めたらしい

「・・・ん?」

イナリが首をかしげている

「・・・・・・・・」れでもオレもうすぐ19歳なんだよ

「うわだー!」

・・・うわじゃないよ本物だよ?

「ま、こんな体だから安定するまで学校とか行けなかつたし
忍者の修行とか全然だつたからな
年下と混ざつて勉強するのも楽しいもんだよ」

だから同期一同、そんな有り得ないものを見る目でオレを見るな

シユロもイカリもなんで教えてないんだよってハンドサインを送つてこないでくれ

先生ズもじろじろ見ない

視線に耐えきれなくなつて体調が優れないと言つて寝間に入る

・・・鏡を見て、自分を見る

大体、6歳ぐらいからかな・・・成長しなくなつたの・・・

布団にもぐりこんで目をつむると、いつのまにか深い眠りに落ちていた

朝起きると、先生たちしかいなかつた

シユロとイカリは先生の指示で波の国を走り回つているらしく

ナルト達は修行、サクラはタヅナ氏の護衛だそうだ
先生の指示は仕込みを待て、とのことなのでナルトの元へ行く」と
にした

ナルトは夜から修行に出て帰ってきていないらしい

修行場である森へ行くと、ナルト以外に1人の・・・美、少年?が
いた

これで男なんだぜ、うそだといってよバーニイ・・・

「あ、コソ!」

「おはようござこまゆ」「あ、ビツモ」

あまりの美少女っぷりに見惚れてしまつ、危ない危ない

「貴方も、忍者なんですか?」

「ああ、ナルトとは同期なんだ」

「?・・・すいません、貴方はナルト君より、年上、ですよね?」

・・・まさか、一目で見抜かれた?いや、当たつてるから嬉しいん

だけれども・・・

「体が弱くてな、入学が遅れてこうなんだよ」

「そうだったんですか・・・

今ですね、ナルト君に大切な人がいるかお聞きしていました

貴方にもいますかと問われた

・・・ああ、あの大切な人云々・・・ナルトの心に刻み込まれたあの会話か

ナルトには悪いけれど・・・オレは、共感できない

前世の時は素直に感心したものだけれど、今のオレには無理だ

「生まれてこのかた、大切なものなんかなかった・・・いや大切な
ものなんていらない

そんなものに縛られた生き方をしたくない
これからもそんな存在は、必要ない」

大切、そう聞いて思い浮かぶものが何一つなかつた

助けてくれた自来也の顔も、同じ転生者であるシユロやイカリ、先生の顔さえも何一つ想い浮かばなかつた

「人は・・・大切な何かを守りたいと思つたときに、本当に強くなれるものなんです」

「うん・・・」

ナルトが白に共感して、オレの顔色を伺いながら頷いた

いや、お前はそれで良いんだよ、ただオレはそういうのはいらないだけだから

「本当は貴方は知つてているんじゃないですか、自分を大切にしてくれた人を」

自来也の大切は木の葉、シユロやイカリはお互いが大切、先生は知らない

誰もオレを大切だと言う人はいなかつた

「そんな奴いない」

首を横に振つたオレに、白は語りを止めなかつた

「いいえ・・・いたはずです

いたからこそ、貴方は生きている
そして本当は求めているはずです、何よりも大切なものを「知つ
た風な口きくんじやねえ！」・・・

感情が乱れて狐火が纏わりつく

ナルト、逃げておけ、うつかり燃やしちまうかもしれないし、共鳴
してお前のチャクラまで暴走しかねない

何故オレが生きていることで大切な人がいると思うんだ

意味がわからない

「オレにとっちゃ全ての他人は比較及び妬みの対象！」

大切だとかそんなものは存在しない！

才能ある奴が上から物を語るんじゃない！」

白の真っ直ぐな目が怖くなつて、啖呵きつて逃げ出した

足がもつれて転びそうになる

視界の端に狐火が燃え盛っているのが見える

「つあ！」

転倒したところを追いかけてきた白に助け起こされる

「こんなにも・・・こんなにも貴方を思つている人がいるんです・・・

・
・・・逃げないでください、

大切な人の覚悟を無駄にしないでください」

なんなんだ！

お前はなんなんだ！なんでオレにそんなこと言うんだ！

ただのキャラクターのくせに、そういうことは主人公であるナルト
に言つておけばいいだろう！？

なんでオレなんだよ、大切な人ってなんだよ、覚悟つてなんなんだ
よ！！

言つだけ言つて立ち去つた白の背中を見ながら、オレは泣き続けた

様子を見に来たナルトの手を振り払い、一人で泣き続けた

自分が吐いた血の海に座り込んで、子供のように泣き続けた

彼らから離れたといつにでもなお泣き声が聞こえてくる

耳に残るのは叫び声

彼はまだ、言葉の意味を分からぬでじょう

それでも、いつおかねばならなかつた

大切な者の存在を、何故こけらへ逃れることが出来たのかを

匂わせなければならぬ、逃がしてくれたひとがどうなつたのか

再不斬さんの元へ帰る歩みを止め、前方を睨んだ

まるで彼の炎のように、いや、あの炎の源たる九尾の狐パルコが現れた

・・・あの仔の存在意義を、狂わせるな

殺意が込められた怨念深い声

従わなければ殺される、そう思えるほどの声

「・・・だからといって・・・妬みや恨みだけで人は生きていけません

貴方が見えなくしている周囲のことも、彼自身が背けている自分のことを知らなければなりません

彼には覚悟が足りない

「これ以上、あの仔に余計なことを知らせようのなら・・・

お前の大切な、再不斬の命はないと思え？

吐き捨てるように咳いて消えて行つた

その場に座り込んで体を抱きしめた

「全てが、狂っているんです

始まりの貴方が知らなければ、正しくならないんですね

だから、思い出してください、大切なものを

お願いです、巫子さま」

祈りは、届かない

ある真実を教える（後書き）

ゴンの性格・嫉妬深い、涙脆弱い

三を囁ひゆ（繪畫集）

田を聞じよ。そしたらお前は見えるだらう。

- サムエル・バトラー -

泣き腫らした眼で帰つてシユロやイカリに問いただされたくないで、夜中にタヅナ氏の家に戻つた

気配で気づいていたらしく、先生が玄関の前で立っていた

「・・・何があつたか、聞いてほしいか？」

「嫌だよ

・・・遅くなつてすみません」

手を差し伸べられる

握りしめて家に入り、遅い食事をとつた

病人組と看護人ということでオレとカカシと先生は同じ部屋

オレが寝付くまで手を握つたままでいてくれた

「・・・先生、大切ってなんなんだろう」

「さあなあ・・・でも、こういう風に誰かと話が出来るのって、大切だと思つけどな」

「・・・任務つて、どうなつてますか」

「明日決行だ

仕込みは終え時がたつのを待つだけだ
・・・あとはお前の覚悟次第だな」

覚悟

大切なもの

オレが生きていることに繋がるナニカ

オレを思ってくれている人つて、誰だろう

先生の心臓の音がやけにはつきり聞こえて、眠りに着いた

朝が来た

きっとこれから先、忘れる事のできない朝だ

「それでは第六班の任務の確認だ

目標はガトーカンパニー社長、ガトーの暗殺
暗殺はコン、ガトーの護衛の足止め、かく乱はシユロが担当
イカリ、暗殺成功時に飛ばす伝書鳩の用意は良いな?よし、
なお、この任務が失敗したときの退路の確保及び後始末は私が担
当する

・・・だからといって失敗は許されない」

気合を入れろ

そう言われて姿勢を正す

念のために毒を塗ったクナイを用意し、小刀も懷に収める

「・・・今頃力カシ班は霧のなか再不斬と戦っている事だろう
これまで我々と言つイレギュラーがいながら原作通り進んできた
シユロの記憶から導き出した地点にコンを潜ませる
コンはガトーが来るまでその場から何があつても動かぬよう」

「はい。」

「ではその場所まで私が運ぶ
シユロ、イカリ、お前たちはそれぞれの役目が果たせるよう動き
なさい」

「了解」「役目が果たせるなら、原作介入もOKってことですね?」

「やりたきゃやれ
その代り、任務に支障が出るようなら今後許可しない」

「まあそりゃそうだ」

覚悟

・・・覚悟か、オレにそんなの出来るかな、やつてみなくちゃわか
んないかな

先生がオレを抱き上げ、瞬身の術で移動する

そして、ガトーが来るであろう橋の下に下ろされた

「コソ、ここからはお前一人だ
・・・出来るな?」

大きく首を縦に振った

出来るも

先生が消えた

力カシ班の援護にでも行つたか、それか別の場所でオレを見ているのか

力カシの血継限界の説明が聞こえてくる

あの野郎・・・白の想いが聞こえてくる

ずっと息をひそめ、人を殺すためだけに隠れるオレの耳に深く入り込んでくる

「お前らみたいな平和ボケした里で本物の忍びは育たない・・・
忍びの戦いにおいて最も重要な”殺しの経験”を積むことができ
ないからだ・・・」

・・・いや、ここにその経験を積まされそうのが1人居りまして
ね?

再不斬の言葉に思わず心の中で突っ込んだ

まだか、まだガトーは来ないのか?

依頼主であるガトーを殺せば自動的に奴らの依頼は意味の無いもの

になる

とつとと終わらせるにはガードを殺すのが一番早いってのこ・・・

殺してやる

ナルトの声が聞こえた

九尾の、暴走だろ？

腹部が熱くてたまらない

共鳴現象？こちらの九尾のチャクラに反応しているのか？

パルコのチャクラが暴れそうになるのを抑えつける

鳥の鳴き声のような音が聞こえてくる、これが雷切か

霧が晴れてきた

・・・白は、死んだのだろうか、死んだんだろうな

あいつは一体何だったんだだろうか

カツン・・・カツン・・・

誰かの足音、それに続く無数の人の気配・・・ガトーが来た！

シユロの蟲が一匹近寄つてくる、足どめ開始か

蟲の毒で護衛が1人、また1人と氣配が消える

ガトーはそれに気づかない、蟲がまた現れ合図がでた

「派手にやられて、がっかりだよ再不斬・・・！」

ガトーカンパニー社長ガトー・・・よつやくおでましか

コン、お前が殺せないなら私が殺す

私が、お前を守つてやる！

そう心に誓い、毒を塗ったクナイを用意し、構える

着実に護衛はショロが仕留めて、可哀想なことにガトーは『気が付いていない

カカシや再不斬はもう、その異様な光景に気づいているところに・

「ガトー！？」

今さら驚いたふりをして取り繕つたか

何かが起きているのを理解しているらしいが、どうなることやら

ショロの合図はコソに伝わったがどのタイミングで殺るのか

ガトーはゲスそのものといった目で白の死体を不躋に眺め、それに向かつて唾を吐きかけた

「なんだ、私の腕を折った子供、死んだのか
良い気味だ

さて・・・次に死ぬのは、君たち「てめーだよ」・・・があ！？」

高らかに宣言したガトーが小刀で貫かれる

・・・ そつか、ちゃんと自分で殺すんだな

だけど暗殺なのに声なんかかけちゃいけないって、後で説教しないとダメだな

「・・・ 狐火」

吐きかけた唾を狐火で燃やした

コンなりに怒つて、ビうにかしたかつたんだろうか

死亡を確認し、首と胴体を切り離したあとコンはこちりこ・・・いや、白の元まで歩いて来た

この光景に、皆黙つたままだ

依頼主であるガトーが殺されたため、再不斬との戦いは終わり、傷を癒そうとしている

「・・・ なあ、お前、大切なものがあると強くなれるって、言つてただろ? ただろ?

別になくても強くなれるよな?あれからずつと探してたんだ、大切なも

・・・ でもさ、思い浮かばないんだ」

泣きそうな顔でコンが白に声をかけた

「もつ、白は死んでいると止めようとした時、声があがった

「・・・ああ・・・そう、ですね、なくとも・・・強くは、なれますよ・・・」

「白ー。」

まだ生きているー思わずといった風に再不斬が白へ走り寄る

泣いている、あの鬼人が泣いている

2人して白の傍に座り込んで、手を握っていた

「まだオレは見つけられてないだけなのかな

それともオレにとつて大切なのは自分の命なのかな」

「巫子様もいつか・・・命より、大切な人が見つかる」とでしょう

思い出すことでしょう・・・

・・・そのときは、想ってくれている人よりも・・・もつと強く、

覚悟を決めてくだ・・・さいね・・・」

「そつか、白は神殿のこと知ってるんだ・・・
覚悟・・・するよ

お前みたいに、道具みたいって言われても、大切なもののために
覚悟を決めるよ

いつか、絶対に」

「白・・・今までありがとう・・・悪かつたなあ」

「再不斬・・・さん・・・ボクは、いま、とても・・・嬉しいです。
・・・」

雪が降つてきた

それからもう一度と口を開かない白の体を覆つよつて、雪が降つて
いた

雪で、2人が泣いているのかどうかも分からなくなつた

「・・・なあ巫子、だつたよな?・・・白の葬儀、頼めるか
俺にはよく分からない宗派なんだ・・・」

「・・・火葬になるけど、良いかい?」

「あ

ゴンが白の体に何か持たせた

あれは 三口円型の紙？

「・・・信徒と出合つ」となんて、一度とないと想つてたんだけど
な

略式で、じめんなと声をかけ白の体を狐火で燃やしていく

肉の焼ける匂いが立ち込めるかと思ひきや、何故だか匂いがない

あの紙、匂い消しが含まれていたのだろうか

遺骨をまとめ、月のような色匂いの和紙で包む

それを再不斬に渡した

「・・・お供えとかは、気が向いたらやつてくれ
墓も、作る作らないは自由だ」

「・・・スマンな・・・

それから長い間、2人は黙つて遺骨眺めていた

声をかけることも出来ずに、ただ自分の役目を果たすことしかできない自分が、ひどく腹立たしかった

2週間後

後にナルト大橋と呼ばれることとなる橋の完成を祝い、ささやかながら宴会があった

主役はナルトたち第7班、オレたち6班はシュロとイカリのみの参加として場を離れた

暗殺なんて汚れ仕事をした奴が祝い事に参加するのは気が引けた

修行場近くの森に作った白の墓に行くと、先客がいた

再不斬だ

大刀首切り包丁を墓につき差し、旅装に大荷物を抱えている

「置いて行くのか？」

「・・・少し、離れてみるのも良いかと思つてな」

欲しけりや持つていけと言われた、いらぬえよ

「・・・依頼しても良いか?」

「高じギヤ」

「・・・三忍の自来也を探して、この手紙を渡してほしい報酬は・・・千柿鬼鮫の情報とかどうよ」

「お前、本当に下忍か?まあいい、受け取るやる」

「うつこつ意味だ

手紙を受け取り懐に直した

「自来也にあつたらパルコの器のコンに頼まれたと言えば良じよ
ああ、鬼鮫は今晩にこむから」

「・・・仕事が終わってから書くものだ」

「そうだよな

曉についての情報は自来也がより詳しく調べてるから

「そりが、なら詳しく聞いてみるか

・・・金は、いらねえ

葬儀代の代わりみたいなもんだ、世話になつたな

「・・・江北、同期がお世話をなつました」

「ふん・・・

お前、気配の消し方上手かつたぞ・・・向いてるかもな」

何にだ

問いただす前に彼はもう行ってしまった

墓に手を合わせる

なんだかよく分からぬことが多いかったけれど、いろいろ考え方が
変わった気がする

何故白が神殿時代のことを知っていたのか

白が言いたかったことは何なのか

いつか全部分かりますよつこと、神に祈つた

波の国編・完

中忍試験編は数話挟んでから進みます

白が可愛いことについてはよく聞きますが、再不斬が可愛いこと思つのは
私だけだらうか

ここ数年誰にも賛同されたことがないです

椿を見よ（前書き）

椿の花言葉

至上の愛らしさ

椿を見よ

波の国から帰還し、木の葉で鍛錬、任務の繰り返し
そんな日々に疲れが溜まっていたのか、起きぬけに吐血し動けなく
なり、ナルトが泣きながら俺を病院に運びこんだ

「入院させます」

担当上忍といつことで呼び出された先生と、泣きながらオレにすが
りつくな爾トに向かって医者はそう言った

「ひじてオレは問答無用で入院させられた

「まさか・・・集中治療室に入院とは・・・」

「ゴホッ・・・君も難儀な体ですねえ・・・」

「まだ若いのにねー」

今ではお馴染となつた面子

そう、知る人ぞ知る、木の葉病院の三馬鹿患者が勢揃いしているのだ
基本入れ替わりで入退院を繰り返していたため、同部屋で顔を合わ
すというのは初めてだ

「ハヤテさん、咳きこみ過ぎて肋骨折ったんですか・・・
オレも氣をつけないと・・・」

「コン君も十分氣を付けてくださいね、意外とキますよ
しかし力カシ上忍も眼精疲労で入院とは・・・」

「今度ばかりは無許可で写輪眼摘出されるかと思つたよ」

はあ・・・と三人揃つて肩を落とす

最近は医者の言動が棘だけで悲しい

力カシがイチャパラを取り出した

お前眼精疲労で入院してんのに・・・また医者に怒鳴られるぞ

そつ思ついたら力カシが何者かに殴り倒された

検温にきた看護婦が言うには、何度言つても憲りない力カシを痛め
つけるためだけに暗部を雇つたらしい

また、見舞いの名目でイチャイチャし始めるハヤテとその恋人暗部

の対策として暗部モテない連合までもが病室を見張っているとか

「・・・オレは・・・?」

大丈夫だよね?何もしてないよね?と看護婦にすがりついてみるものの・・・

少しでも病院を脱走しようものなら、森乃イビキ＆みたらシャンコのドリコンビを差し向ける手配がすんでいるそりだ

「病院こわい」

数時間後、6班メンバーと任務帰りの森乃イビキが一緒に見舞いに来てくれた

思わず何でも吐きますと泣き続けた

病院が本気出すとマジ怖い

「よつシナイ

聞いたぜお前の班、じランク50回達成だつて？」

「△△のお見舞い用に花を買いに行くと猿飛アスマト△△班が居た

そうか、△△が山中イノの花屋だつたか

「いつの間にやら、な

おかげで後始末班とあだ名されるよつになつたよ」

シユロやイカリが△△班とじゃれあう光景を微笑ましく見守る

若こつて良いなあ

「・・・そりゃ、拷問部とかの雑用任務受けのせいだろ」

「今までしつひの班拷問部の癒しだぞ」

特に「コン」

そりやもつ、万年寝不足部隊の拷問部に弁当やら茶菓子の差し入れまでしてゐからな

しかも蜂蜜はシユロ自家製で妙に栄養が取れると謳される幻の甘味
そのうえ美人のイカリとちつちつといコンの手作り

未婚の連中から可愛がられるイカリと既婚組みから息子のようだと
可愛がられているコンだ

「・・・あの小さい奴か、確かにイビキのお気に入りだつたか？」

「アン」「のお気に入りでもあるな
・・・本当、どうに好かれる子だよ」

イビキ経由で差し入れの菓子が特別上忍へ回つてから、今では会つたびに菓子の催促をされてくる

よく頬を抓られているのを田撃する

ちなみに、うちの班はいつも誰か一人は甘いもの持つてゐる

私はあまり甘いもの好きじゃないから持つてないけどな

今だつてせい、チョウジに餡せりガムやリチウムを分けている

市販品を持ち歩くのはショロで、チヨウ系はイカリが、手作り系はコンの短剣だ

「昨日も「ひつた」プランター ケーキがまだあるんだが、食べるか？」

食べやすくて、スティック状に切られたものだ

「いつこいつに気を回すダメな子である

「お前、甘いもの嫌いじゃ……」

「酒をたっぷり使ってあるから食べれる
むしろこれは酒の味しかしない

「……美味しいのかそれ」

「これが意外と……雪国なら毎日持ち歩きたて逸品だ」

残念ながら未成年には食べさせられない。ぐらこ酒がキツイところとか

酒好きの私と紅は喜んで食べる

「まじりゅう上忍、これから見舞いですか？」

傷だらけの強面男・・・森乃イビキが現れた

この時間帯にこいつが外を出歩くことは任務終わりだな

「ああ、花でも持つていろいろと思つてな
・・・お前、その手の甘栗甘の・・・」

「ええ、団子じゃなくて薦きりですがね
これなら食えるだろ?」

手に持つた袋を掲げられる

随分と仲良くなつたものだ

「へえ、本当にイビキのお気に入りだったのか

アスマが心底驚いたよつに声を上げた

「コンだけじゃなくて油女や志村も、だがな
六班全員うちの隊に貢えませんかね?」

なかなか成りたがる者がいない部署だ

人員の確保に忙しいらしい

確かに、六班みたいに嫌悪感を抱かない下忍はそういうだらう

「シユロは暗部に売約済みだよ

イカリは養父の許可がないとダメだぞ？」

意外と子供に甘いからなあの親は

ちなみにシユロは兄トルネと同じく暗部の根に入るordanゾウと密約を交わしていた

いつかordanゾウを倒してイカリを嫁に貰つらし

ordanゾウもその時のために体を鍛えて修行していると「コンが言つていた

娘の父親というのは案外楽しいものらしい

「コンはたしか医療部隊が欲しがつてたな・・・実験体に」

「実験体！？」

そりなんだよ、実験体なんだよ

「ああ、あの新開発の増血丸の被験者つて……」

特別上忍つてのは噂が流れやすいな

お前りくだらないことでも情報交換しそうだらつ

「コンだ

確かによく効くようになつたけどな新・増血丸・・・

「　「　「実験体か・・・」「

病院で処方されてる薬のほとんどが未許可の新薬だと上が知つたら
どうなることやら

本人了承してるからまたややこしい事態になりそう

アスマ達と別れ、コンの将来について語りながらイビキと共に見舞
いに行つた

コンは看護婦に何やら脅されている最中だつたらしく、イビキの顔
を見た瞬間涙目になつていた

恐怖はつねに警告者（前書き）

恐怖はつねに人間の中に何か正しくないことが生じた徵候である。恐怖は、苦痛が肉体に対して果たすのと同様に、精神に対しても貴重な警告者の役目を果たす。

ヒルティ

恐怖はつねに警告者

木の葉病院から退院して一、三日

任務も鍛錬もなく、久しぶりの休暇を買い物で楽しもうと市場を歩く

忍び里の名に相応しい忍具店、武器屋、鍛冶屋、反物等を扱う専門店を冷やかし、気に入ったものの値段を覚える

もう少し金がたまれば買いに来ようと田標を立てた時　ふと、見覚えのある人物を見つけた

(・・・あの、特徴的な髪・・・)

まさか、抜け忍である男が木の葉の里に堂々と現れる筈がない

そう自嘲してみるものの、あの変装への字もない姿は奴以外思いつかない

声をかけてみるべきか、意を決した瞬間

「コソ久しぶりだな、うん！」

お兄ちゃんだぞーと明るく声をかけてきた・・・背後から

「ダラーナんでお前いるんだよー!？」

「ああ、火薬を買いにな」

良い火薬を見つけたんだと語る男・・・泣く子も黙るS級犯罪者・
暁の一員デイダラ

真昼間からこんな大通りにいていい男ではない、といふか時間帯問
わず木の葉にいるべきではない

「芸術のためにには各国を渡り歩き、良い物を得る
それが大事だ」

「ついでにいって、芸術家としか自己紹介してなかつたな

「雷の国から火の国まで・・・長旅お疲れ様」

「コソだつて・・・よく無事だつたな、うん

体は良くなつたのか?」

「・・・ハハハ」

良くなるはずがねえ

少しばかり雑談して、お勧めの店を聞かれた
甘いものなら甘栗甘、食事ならラーメン一樂、もしくは焼き肉Qを
勧めておく

案内すると駄賃として葛きりを奢つてもらつた

最近葛きりばつか食べてる気がする、美味しいからいいけど

デイダラは団子を大量に買つて包んでもらつてこる

・・・1人で食べるのか?

「これが?」こいつは仲間たちへの土産さ、うん」

「仲間つて・・・#芸術?」

暁のことを芸術家集団と評されたことがあつたな

しかし土産なんて用意するのか、意外とマメな奴だな

「そ、オイラと同じアーティストのあつまりや
・・・ただ最近、様子がおかしいんだけどよ」

酷く悩んでいるのがわかるほど深刻な表情

様子がおかしいってなんなんだろ？

「・・・何か、変わったことでも？」

「うん・・・ひ・・・仮にHって奴がいるんだけどな
そいつが妙なことを口走るようになつて・・・

元から宗教系の奴だからオイラはそんなに気にしてなかつたんだ、
うん」

H、飛段のことだよな

ジャシン教を本格的に布教し始めたのか？

「周りの人影受けちゃったのか？」

湯呑を一気にあおると頭を抱えだした

それかなり熱いお茶だつたんじゃ・・・

「やつなんだよ、古株のＫと紅一点がもろに影響受けたんだ……エヒペア組んでる爺もおかしくなり始めたと思つたら、オイラの相棒まで変な事言いだして……

月がどうとか、拷問とか、存在理由とか良く分かんない」とばつかで

ついに紅一点とペア組んでたリーダーが耐えられなくなつて会合に出なくなつちましたんだ」

月・・・あれか？マダラの月の暇計画の話か？

鬼鮫なら計画教えられてそうだけど・・・

でもそれなら飛段から話がこじれるつておかしいな

「リーダーさん、ストレス溜まつてしんどいんだろう？・・・なあ一度ダラーとリーダーさんで飲み会でもしたらどうだ？お互い相棒がおかしくなつたんだから愚痴の言い合いでもしたら楽になると思うよ？」

「うん・・・次に会つたら誘つ
はあ・・・」

話が重すぎて雰囲気が悪い

何か話題を変えなくては・・・話題、話題・・・

「……あのセ、話変わるけどオレ、忍者になつたんだ」

「え、うそー？」

あんなに体が弱かったのにか！？と驚かれる

額当てを取り出して見せるとまじまじと見つめられた

「本当だよ」

「……そ、うか、忍者か……」

良かつたなあと笑いかけられ、こいつは本当に犯罪者なのかと疑つた

・・・そういえば、原作でも後輩の面倒見良かつたな

(もうじき、中忍試験の時期だつたな、うん)

ん？デイダラが小声で何かを呟いたが上手く聞き取れなかつた

何か言つたかと聞くとなんでもないと言われる

包まれた団子を持ち、そろそろ帰ると告げられた

「今度は一楽に行ってみるよ、うん
忍者になつたからつて体が丈夫になるわけじゃないんだ、気をつ
けろよ」

「身に染みて分かつてるよ
・・・ダラーも体には氣をつけて
あと、仲間関係がんばれ」

「お前人ごとだからつて軽いぞ
ま、リーダーと飲みにでも行くや、うん」

そういつて門の前まで送り、見えなくなるまで手を振り続けた
暁も、大変なんだなあ・・・

まさかあのコソが木の葉で忍者になつてゐるとは思いもしなかつた
それだけ体力がついたといづれとか

以前より血色の良くなつた顔色を思い浮かべ、自然と微笑んでいた
今にも死んでしまつのかと見紛えるほどの虚弱や

固形物などほとんど摂れなかつたのに、葛きりを一杯も食べれるようになつていた

何よりあの濁つた眼に輝きが増していくこと

驚きが尽きない

「でも、中忍試験大丈夫かなコソ・・・」

大蛇丸が中忍試験に向けて何か策略をめぐらせてゐるとサソリから
報告を受けていたため不安がよぎる

考え事をして「アジトに到着した

とつあえず土産をと皆が集まる広間へ行くと小南とサンヨーの旦那、あとイタチがいた

「旦那、これ土産な
リーダーは？」

旦那に渡したはずの土産はすぐさまイタチへ流れた

わかつた、勝手に団子食つてろ

ただしコンお勧めの麸饅頭は俺のだから食つなよ

「ペインは人を探しに行つたわ
・・・ねえデイダラ、少し提案があるのだけビ・・・」

何の感情も移さない濁つた眼

最近の小南はずつとこんな旦だ、前はもっと輝いていたのに、やつ思つと嫌になる

「・・・何だよ」

疑い深く睨みつけるオレに、らちが明かないと感じたのか、サソリの
旦那が進み出た

「オレと小南と三人で

木の葉へ行かねえか?」

恐怖はつねに警告者（後書き）

段々とずれていく原作、気づかない主人公

麩饅頭って知ってる？もちもちして美味しいですよ

こしあん粒あん論争で揉めますが

死へゆかるのせ駆っこ（前書き）

死へをするのは易しいが、一時を永続するのは難しい。
ジョンソン

アベセカルの仕事

シナイ

水面歩行しつつの演武、組み稽古、トラップ解除練習・・・昼夜の鍛錬がよつやく終わろうとした時、招集用の鳥が鳴いた

「・・・本日はここまでだ
中忍試験、どうする?」

「あ、もしかして今日が推薦する日?
コソも最近落ち着いてるし、抜けても良いんじゃないかな」

「サバイバル以外なら良い線行くだろ? な
・・・サバイバル以外なら・・・」

「・・・一回も無いなよ」

「うちの班は今日も仲が良くて結構なことだ

「それではお前らを推薦していく、ゆっくり休めよ」

はーい、と良じいの返事をしつつ組み手を始めた

休めと言つただらう

コン曰く忍者的スピードで里を駆け抜け火影邸に集まる

主なメンバーは大体集まっているようだ

「さて、新人の下忍を担当している者たち、前に出る
・・・カカシに紅、アスマにシナイか
どうだ？今回の中忍試験に推したい下忍はいるかな？」

「・・・第六班、油女シユロ、志村イカリ・・・ねたみコン以上3名
まじらばシナイの名において試験受験を推薦します」

「待つてください、まじらば上忍！」

貴方も知つてゐるでしようねたみコンの体を！
もつと体力をつけさせてから試験を受けさせるべきです！」

イルカか・・・カカシに突っかかるだけでなく私にまで・・・

良かつたなコン、お前をまともに案じてくれている奴がいたぞ

「ふー・・・何も忍者というのは体力が必要なわけではありません

イルカ中忍、貴方のそれは過保護といつものです
温室でぬくぬく育つた花が突然外へ出されても枯れるだけ
慣れさせることが必要です

「ま、確かに体力不足は問題ですが・・・あいつほど忍者らしい忍者もいません

・・・正直、暗部入りを検討してもいいぐらいです」

珍しく賛同してくれる力カシ

確かにコソの気配の消し方は上手い

派手な動きもなく着実に仕留める傾向は暗部向きだな

こぶしを握り締めたイルカ

言いたいことが山ほどあるだらつ、イルカには悪いが殺氣を吊きつけて黙らせる

「シナイ、イルカ、2人とも抑えよ」

3代目の仲裁によりすぐさま解散することにした

はやく同意書持つて行ってやらないとな

コン

「中忍試験か・・・」

確か大蛇丸の介入があるはずだったな

起爆札に毒塗りクナイ、麻痺毒を塗りつけた小刀を装備し、限界まで兵糧丸、増血丸を詰める

また血臭隠しの香料もポーチに入れておいた

中忍試験への合意書をもち、家の戸締りを終えて出発した

アカデミーの裏門には予め伝えておいたとおり六班が集合する

「現在午後2時・・・何事も早め早めに、ね」

「予定通り、忘れものもない、疲労回復の甘いものも完備」

「一次試験用に試験勉強もばっちり・・・だよなシユロ?」

「すいません全然勉強できません」「めんない」

土下座しながら泣き続けるシユロ

わかつてゐる、お前が暗記もの嫌いなの知つてる

「それじゃ、301に行くか」

「幻術解除、忘れるなよ」

今さら原作介入しないとかするだと関係ない

木の葉崩しがどうなるか分かったもんじゃないが・・・俺たちはや

れることをやるだけだ

「どうせ原作のこと忘れきつた先生が介入するだらうしな！」

幻術対策としてチャクラを乱しながらアカデミーに入ると誰とも出会わず301に着いた

「……ああ、いや、何事もなくてよかったです……？」

「……誰もいなって淋しいな」

「なんでこの世界の奴らって時間ギリギリで来るんだらうな」

「まさかの一一番乗りいか……どうする？」

301には誰一人、いや監視役の試験官がいたがその人も事前準備として来て居ただけであつてすぐに去つて行つた

三人だけの空間に虚しく風が吹いた

開いた席に陣取り、荷物を置いて雑談して数分後、人の気配がした

「おいおい……たつたの一組しかいねえとは……待たなきゃいけねえのかよ……？」

「待たされるのが嫌なら後から来れば良かつたわね」

「あー」「ンー」

見たことのある変装姿

黒髪ポニー・テールなティダラと・・・サソリ本体だな、もひひとりは藍色のロングストレートの少女

・・・小南・・・?

とつあえずサソリはもつと変装しなせこ、あとティダラは一々オレに声かけない

変装の意味がないでしょ

「「ンサンオシコアイテスカ?」

「やめてシロロ田が怖い!
なんでこるんだよダラー!」

事情を話せやフンヒと低い声で囁かれる

アーフニヤーの間ティダラと再会したことまだ話してなかつたな

何故ハリヒてるんだわ?か

「ふつ・・・何を隠そうオイラは雨隠れの芸術家兼下忍だったのだ

ーッ！

「チームメイトその一カイだ」

「チームメイトその二カイナリよ」

「あ、『トトロ』も・・・」

深深とお辞儀でいいわつそれ面喰らつ

なんだかこのノリの軽さ、デジャヴュ・・・

「こいつが噂の芸術作品か・・・ダラーと似たような美意識もつた奴がいたとは思わなかつたぜ」

なんというかデイダラ本人なんですただ世界が違うだけなんです

「早死にしたのも美意識のせいかもな
でもこうして最後の作品たるコンを残してくれたんだ、オイラが
その後を継いでやるぜ！」

田指せ一瞬の芸術！」

お前は人のことを作品と捉えていたのかふざけるな

「けつ・・・何が一瞬だ爆発魔・・・美つていうのは永久に残るものだ・・・

やっぱりお前とはあわねえ」

永久に残るもの、それが耳に入った途端混乱のあまりロボットダンスをしていたシユロが叫び出した

「永遠・・・！」

「そうだ永遠とは愛！イカリーお前への愛は永遠だ永久不滅だ ツ
！…」

いつもの告白だった

もうやるやる3時でいつもの時間だもんな、広場で叫べないのが残念だね

「シユロ、混乱してるのはわかるが落ち着こう

そもそも人が増えてきたし、恥ずかしい」

教室に入ってきた瞬間告白が聞こえるとかマジないな

ほら、音隠れが何事かと吃驚してるぜ

デイダラと美意識について言い争っていたサソリが固まっている

・・・油差そつか？

「恥ずかしがつてゐるオレの嫁マジかわいい、マジ美しくね？…」

木の葉の人々が「広場の告白魔だ・・・」「リア充しね」「嫁ペロペロしたい」などと呟いている

真ん中の人と最後の人は後で拷問部に来るようにな

全身全靈をもつてそんな感想抱けなくしてやる

「永遠・・・愛・・・」

サソリは何か衝撃を受けたように顔色を変える

傀儡なのに顔色まで変わるとか器用だな

「そもそも一オレトイカリの愛の結晶が子々孫々と未来に向けて大繁殖！

一族の始祖として夫婦は語り継がれることであらつー！」

これが愛だツ美だツ美しさだツ

「油女さんマジぱねえっす」「ショロさんすげえ真似したくないけど」「恥ずかしさに震えるイカリさんペルペルしたい」

最後の人、ショロの前に出頭するよう

たぶん寄生バチで許してくれるのはすだから

「お前……知る?」

「ふつ知りやあ言つて聞かせやしちつ……

午後3時の広場の告白魔もしくは油女一族の異端児こと油女ショロたあ、このオレのことよ。」

高らかに宣言した後背後からシノに殴られるショロ

よつやく茶番が終わつたと言わんばかりに視線を逸らす参加者の方々

「何をやつているんだお前は……」「

・・・シノがいるつてことは・・・

「これはこれはみなさんお揃いでエ！久しぶりだな、まだ生きてやがったか保健室の主！」

「い、イカリちゃん久しぶり！」

やつぱり出やがったな犬塚！

ヒナタとイカリはハイタッチして、仲良いなお前ら

「良かつた、コン生きてたよシカマル」

「ああ・・・死んでるかと思つてた」

「酷い事言つなお前ら」

シカマルとチヨウジか、イノは何処へ行つた？と思いつやフ班を引き連れてこちらへやってきた

もつそんなに時間がたつていたのか

「今年の新人下忍1・2名、全員受験つてわけか
何処まで行けますかねえサスケ君？」

「フン・・・えらく余裕だなキバ」

すかしつつ視線はイカリの元へ・・・分かりやすい奴だ

「相当修行したからな、お前らにや負けねーぜ・・・あとねたみには絶対負けねえ」

「いっちのセリフだ犬塚！」

赤丸がハラハラと見守る中睨みあいを始める

「うん?なんだコン、こいつと仲悪いのか?
よし、オイラが潰してや「ダラーダメ絶対」ぐえ」

小南がデイダラを絞め落とし引きずりつて雨隠れ集団の中へ去つて行つた

本当、なんでこんなにノリが軽いんだろう・・・

「なんで雨隠れの奴らと・・・?」

「木の葉に来る前に知り合つた・・・友達だよ」

「と、友達！？」

涙目で叫んだ犬塚

一体なんなんだと思つているとシノが、もう少し大人になるまで待つてやれと言つてきた

わけがわからないよ

そいつは会話しているとカブトが近寄ってきて注意された

忍識札の話になり、サスケが何故かオレとリーと我愛羅の情報がほしいと言つた

なんでオレ

「カカシの奴がお前のこと妙に褒めてたからな」

何かしたつけな、イチャバラ初版をあげたことだらうか

「まずはねたみコン君だね
年齢は19・・・え、え？」

一度見すんな眼鏡

「体が弱くてアカデミー入学がだいぶと遅れたんですよ」

「ううかい、悪かったね

班長はあのまじりずシナイ、任務達成回数はロランク58回、Cランク51回・・・!?

間違いなく今季下忍のなかで任務成功回数NO.1じゃないか

す”じこよと褒められ照れているとショロヒイカリに頭を撫でられた

やめろよ

やめろひばー!

「しかし俺等任務受け過ぎかね?」

「シナイちゃん絶妙なバランスで任務入れてくるからな・・・基本一日最低五回はやってるし」

「同時進行でこなしありに任務ばつかだもんな・・・」

出来ない任務は絶対やらない、それが我が班のモットーです

「静かにじやがれどぐされヤロー共！」

・・・待たせたな中忍選抜第一の試験、試験官の森乃イビキだ」

「キャーッイビキさんカツコイイイ！ステキイダンゴトイ！」

シユロの黄色い声援が響き渡る

それに片手を上げてしたえのイビキさんかつけえ

オレも声援を上げるべきか本気で悩んだ

〜をやるのは易しい（後書き）

キバはツンギレ異論は認める

入力した文が全消去されると二回目・・・なんだか疲れた・・・

今回から試験的に視点切り替え時に名前を表記するようにしました

見辛いとか、記号変えた方が見易いなどなビゴーザいましたらご連絡
ください

健康は最初の条件（前書き）

人生にとって健康は目的ではない。しかし、最初の条件なのである。

武者小路実篤

健康は最初の条件

□ン

志願書を提出し、座席番号につく

試験官側の一一番端の席、草隠れの忍びに囲まれて、シユロやイカリと離れてしまつた

席順はこんな感じ

サソリ	シユロ	デイダラ
草忍	草忍	イカリ
コン	草忍	小南
砂忍	砂忍	砂忍

この席順ある意味奇跡じゃないかな

□パクでシユロが気まずいと主張してくれる

試験時間は一時間、試験用紙が配られ説明が終わる

まずは問題を眺め、時間配分を決めて取り掛かった

暗号問題は楽勝だな、解読班での任務の経験が生きている

計算、証明、地理、歴史などなど・・・詰まる」となく問題を解き終える

難しくもないし、簡単でもない、それなりに頭を使うテストだ

書き終えて見直しを始める

ケアレスミスは痛い、前世のテストの悲劇が蘇る

イカリは暗記得意だから大体とけるだろっし・・・問題はシユロだ

シノのように蟲に探らせれば良いものの、蜂は危ないから使わないと言ひだしている

オレの所にカソニーングすれば問題ないじゃないかと言つたが頑固なもの

頑なに自力で問題を解こうとしている

なんでそこまで蜂に拘るのか、シノのように小さな蟲でいいじゃな

いか・・・ヒシノの蟲が来た

カンニングしやすいよう用紙を置き直してやる

しばらく眺めた後シノの元へ戻つていく・・・と思つたらまた蟲が
やってきた

・・・この虫、おもかやっぽいな・・・皿を凝らして見てみればチ
ヤクラ糸が伸びている

・・・サソリ、か？

小さな折り鶴が机の上に飛来する

小南まで・・・

ふと顔を上げると赤丸と目があり、露骨に逸らされた

視線を落とすと見覚えのある粘土の蜘蛛がいるお前もか

・・・好きなだけカソニーニングしやがれ・・・

シユロ

（暗号文すら解けねえ・・・なんで暗部用暗号を使ってくれないん
だ・・・）

サソリ

(・・・ペーパーテストなんて・・・何年ぶりだ・・・!?)
毒物問題ぐらいいれろよ木の葉!—)

イカリ

(前のデイダラの貧乏ぬすりが気になつて集中出来ない・・・
あ、ヒナタがナルトに話しかけてる!
がんばれひーちゃん、私がついてるぞ!—)

デイダラ

(わからぬえ)

シノ

（カンニングするならコンだらつ・・・何故ならコンはアカニア
男子クラス座学トップ・・・！

キバも変なプライドを捨ててコンをカンニングするんだ・・・！）

キバ

（無理分んねえだけどねたみだけは駄目だねたみは駄目だ駄目だ駄
目だ

神様仏様コン様たすけて問題解けないねたみは駄目だつて駄目だ
あ、でもこれを切つ掛けに友達に・・・無理だ何カンニングして
やがるって言われる
なんであいつ頭いいんだよお）

（くうーん・・・）

サスケ

(態々頭よせうな奴探さなくともコンがいたじゃねえか・・・・・)

日々、深く考えすぎである

呆れてものも云えねえ

思わずため息をついて 盛大に吐血した

「げほつじえつじほつー。」

服に掛からなかつたが、問題用紙が犠牲となつてしまつた

問題用紙エ・・・

そう考へている間にも嘔せ返してしまつ

はやく新しい問題用紙を貰わなければ時間が・・・つ

「Iの子に新しい問題用紙をお願いしますわ」

そういつてハンカチを渡してくれる隣の席

ありがてえと顔を拝もうと直視すると・・・大蛇丸だった

あの髪の長い草忍である

やだこわい

渡された問題用紙を速攻で書き直していく

十問目の説明が始まっているが知つたことか

時間内に書き上げ一息ついていると視線を感じた イビキさんだ

「お前、話聞いてたか？」

「十問目のことなら吸止ますよ？」

「・・・はあ・・・

では「」に残った84名全員に第一の試験合格を申し渡す！」

なんでオレ呆れられたんだらうか

「」の試験はカンニングを前提としていた

そのためカンニングの獲物として全ての回答を知る中忍を一名、
あらかじめお前らの中に潜り込ませておいた

その時小さなざわめきが起つる

「え、三人じゃねーの？」 「オレあの小さい奴がそつだと思つてた。
・

何故か皆がオレを見る

・・・小さい奴ってオレか？

何人才オレの答えをカシニングしてるんだよ

「・・・まあ中には自力で全問正解という奴もいたようだな・・・
愚かなカンニングをした者は当然失格だ
何故なら情報とはその時々において命よりも重い価値を発し
任務や戦場では常に命がけで奪い合われるものだからだ・・・」

そいつって額当てをはずし、拷問の痕を晒す

六班は見慣れたものだが、下忍のなかには怖気づく者もいる

唾を飲み込む音が響いた

「入口は突破した

中忍選抜第一の試験は終了だ
キミたちの健闘を祈る」

その瞬間窓ガラスを割つて何者が侵入する

身構える人々などお構いなしに高らかに彼女は宣言した

まったく・・・本当にあの人は

「あんた達喜んでる場合じゃないわよ

私は第一試験官、みたらしアンコ！次行くわよ次い！！

ついてらっしゃ「少しほ忍べよ」い・・・・・ね～た～み～？」

しまった

そう思つて口を防いだ時には既に遅く、周囲の視線が犯人がオレだ
ということを指し示す

思わず考えていたツッコミがえらく響いてしまい誤魔化すに誤魔化
せない

他の試験官たちが腹を抱えて笑いをこらえるなか、アンコさんはオ
レの元へ足早に近づいてきた

「いひやいひやい（痛い痛い）」

頬を抓り上げられ、引きずられながら第44試験会場へと移動した

「 ！」が、死の森よ」

オレは頬を抓られ続けている

誰一人として助ける奴はない

薄情者め

「こひやい（痛い）」

「お黙り」

「 あい」

「それじゃ第一の試験を始める前にあんたらにこの同意書を配つて
おぐね！」

・・・ ）から先は死人もでるから、それについての同意をとつ
とかないとね

私の責任になつちやうからせー 丶

明るく酷いことを言う人だ

何人か引いてますよ

「責任問題になつて説教されればいいのに」 〽

シユロ、お前勇者だな

「はん！私に説教なんできかな「シナイちゃんに頼みます」・・・やめてよ私のテンション駄目なんだから・・・

まず第一試験の説明をするからこれにサインして、班^一とに後ろの小屋に行つて提出してね

ここではサバイバルに挑んでもらうわ
なんでもありの 巻物争奪戦ね
ちょっとねたみ、服から巻物出して」

両手で頬を抓つたままなのでオレに探しよとすると

え、あのこれ服を弄らなきゃ取れない・・・セクハラにならない？
大丈夫？

促されるまま巻物を取り出す

「ひやい・・・ほへ？（「れ？」）

「うん、それ

この天の書と地の書、この一つをめぐつて戦う
ここには84人、つまり28チームが存在する

その半分14チームには天、もう半分の14チームには地をそれ
ぞれ1チーム一巻きずつ渡す

天地両方の書を持った1チーム三人が中央の塔にたどり着くこと
が合格条件」

ただし

「この第一試験の期限は120時間、すなわち五日間！

自給自足のサバイバルだから猛獸、毒虫、毒草なんかに気をつけ
てね

そして失格条件だけど、時間以内に塔に三人揃つて天地の巻物を
持つてこれなかつたチーム

班員を失つた、再起不能者を出したチームが失格
途中のギブアップは一切認めてないからね

また、巻物の中身は塔の中にたどり着くまで見てはいけない
それでは、同意書と巻物を交換するから試験スタートよ

・・・最後に一言アドバイス、死ぬな！」

ようやく解放された

「のまあまあと抓られたままかと案じていた

「「ン・・・死ぬな」

背後から忍び寄ってきたシノ

「めんどうだけば、危なくなつたら誰かに助けてもらひうんだぞ」「

兵糧丸を渡していくシカマル

「匂い消しは持つてきてるな？吐血したらすぐ処理するんだぞ」「

増血丸を握りせるサスケ

「や、やつかも吐血してたから・・・」れ・・・」

ハンカチをくれるヒナタ

「「れ喉飴、あげるよ」

「いや、おれが死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

「いや、おれはお前が死ぬとでも思つてゐるんだよ

今生の別れか

「・・・だつてねたみだしな・・・」

犬塚、小声で言つたつもりでも聞こえてるからな

健康は最初の条件（後書き）

小学生に負けてたまるかと勉強しまくったアカデミー時代

出世のために真面目に試験を受ける、ずれたやる気がこの結果

直感と感情（前書き）

宗教の本質は思考でも行為でもなく、直感と感情である。
ショーライホールマッハー

「」

俺たちに渡されたのは天の書

地の書を持った奴を探さなければならないが、六班には秘策がある

シユロの田配せで仕込みが終了したことが分かつた

試験スタートの合図がして数分、隠れやすく奇襲に対処しやすそうな岩場を見つけイカリが口寄せを発動する

「口寄せの術！」

天、地の書混じり合つて数本現れると同時に巻物にくつついていた
蜂がシユロの元へ戻つた

「シユロ、いりこいつのつてあり？」

「ありだろ？ 試験中なんだから工夫しなくちゃな」

口寄せの術式を組み込んだ蜂を、巻物を受け渡す小屋に忍ばせて各班について行かせる

その蜂には巻物にしつかりへりついているように命令し、適当な場所でイカリの口寄せ

蜂しか口寄せ出来なかつたり、天地の巻物ではなく別の巻物があつたりするが何とか作戦成功である

「とにかく、目的のもの以外はどうある？」

「回収しておくか・・・それともばらまいて罠でも仕掛けるか？」

「手間かかるけど・・・まあ良いか」

食料確保しつつ罠仕掛けようぜ、そつ軽口たたいて場所を移動しうとした瞬間

シユロが急にオレを突き飛ばした

「何だー?」

今までオレがいた場所を見ると紙で出来た手裏剣があった

「・・・試せてもいいわ・・・」

髪の長い少女、ミナミと名乗ったティダラ達のチームメイトーと云
南・・・!

「おこおこ・・・逃げていいか?」

今の俺たちでは勝てない

明らかな実力不足を痛感する

「逃げれるものなら・・・」

吹雪のよひに紙が周辺を覆う

「逃がすつもりはないってか?」

舞い散る紙とともにクナイが投げられる

蟲分身で回避したシユロの顔色が変わった

「毒つきクナイとかあぶねえな！」

「まあやつこいうな

油女シユロだったな、お前の相手はオレだ」

カイと名乗った赤髪の少年、サソリが現れる

シユロの不自然な動きに田を凝らすと右腕にチャクラ糸が巻きつけ
られている

・・・チャクラ刀なんて持つてきてないぞ・・・！

「この、糸をなんとかしてもらえませんかねえ？」

「フン・・・」匕首に来な

サソリのチャクラ糸に引っ張られ、おとなしくシユロほこの場から
離れて行つた

「・・・コソ、どうやらこいつら殺す氣はなさそうだ
目的は？」

「言つたでしょ? 試させてもらつて……

今回はほんのあいさつ、貴方の相手はダラーよ

「なんでこいつなるのかね、うん

おいミナミ、あんまりコンをいじめるんじゃないぞ

粘土の鳥にのつて飛来したティダラがイカリを連れ去る

この場に残つたのはオレと小南の2人だけ

「・・・何の用があつてこんなことを・・・」

「先生には色々教えたようだけれど、何故木の葉の者には何も教えていないのかしら

「コネも地位も何一つなかつた前の貴方ならともかく、今の貴方はそれなりのコネを手に入れているわ

・・・なのに、貴方は何の行動も起こさない」

先生・・・自来也か

確かに自来也と会つたばかりのオレはただの子供で、そんな奴が何を言つても信用して貰えないと何の行動も起こさなかつた

木の葉崩しのこと、大蛇丸が音隠れの長である」と、サスケを狙っているのである「こと

知つていながら教えていないことばかりだ

子供の戯言と笑い飛ばされるのが怖くて何も言わなかつた

今は今期のルーキーのなかでは注目してもらえてるし、シナイ先生の存在もあり、班で情報を手に入れたと言えば信じてもらえるかもしれない

そう考えて転生者会議の議案にしたこともある

・・・議案にしただけで、それで終わってしまったことだった

結局、俺たちは怖かつたんだ

自分たちの知らない話になることが、原作に介入したいとかしたくないとか盛り上がりっていても、怖かつたんだ

だからシナイ先生が羨ましい

原作をほとんど忘れかけているから行動できるシナイ先生が、酷く羨ましい

「自来也に、アンタあつたのか?!」

「私は会っていないわ、ペインは接触しに行つたけれどね」

ん？

ペインが自來也に会いに行つた？自來也がペインに会いに行つたのではなく？

何故ペインが行動に移すんだ

「・・・本当に知つてゐるのね、ペインのことも、先生のことも何もかも・・・
あの方の仰つたとおりだわ・・・」

・・・もしかして、カマかけられた？

マダラのことはあの方と呼んでいなかつたし・・・

「あの方って・・・？」

誰だ？と聞いひと口を開くと、いつのまにか近寄つていた小南に、
唇に指をあてられ言い躰んだ

にこりと笑つたその顔が、その笑つていないうつた眼が無性に恐ろ
しく感じた

「そうね・・・邪神、とでも言ひておあましよ」

シユロ

チャクラ糸か、一応カンクロウ対策として小型のチャクラ刀は携帯しているが・・・

これは奥の手だ、今使つべきものじやない

コンたちから随分と引き離れた場所へ誘導させられる

「アーティスト」

悪いが、お前にほんたうの話が終わるまで待っててもいいから

上空から飛来してくる鳥・・・粘土があれば

デイダラとイカリが下りてきた

「シユロ、なんだか様子がおかしい・・・」

足早にオレに近づき極く

確かにおかしい

「なあ旦那、ミナミは口に向をあるつもりなんだ、うん?」

「俺だつてしらねえよ

ただ・・・邪神さま絡みだつていつのは確かだ」

「まーたジャシンさまかよ・・・うん
いつから暁は宗教団体になつたんだ、うん」

・・・デイダラ、暁つて普通は言ひちやダメだろ

犯罪組織じゃないか

(ジャシンをま・・・飛段絡みで何かあったのか?)

(そんなの原作には無かった……」「最近のそれが影響したのか
もしけねえ）

「俺だつて嫌だ
・・・油女ショロ、お前の班長はあのまじらすシナイで相違ない
な？」

あの・・・つて、まじらすシナイは木の葉で一人しかいないんだけど

「・・・木の葉の歩く名言集のことなら、うちの先生だな」

変なネームバリューあるからなあの人

「わつか・・・ククッやつと見つけたぜ・・・」

先生、サソリに何か因縁つけたんですか

蟲を出して臨戦態勢・・・鼻で嗤われる

「ミナミの奴は話に来ただけ、俺たちはただの暇つぶし兼数合せだ
お前らの試験の邪魔をする気はない、むしろ応援してやるよ」

チャクラ糸で蟲たちが弾かれる

操られないだけマシか・・・

「どういう意味だ？」

イカリが口寄せで刀を取り出す

チャクラ刀だ、チャクラ糸ならこいつで対抗できる

「」にも持たせておくべきだったな

「さあな？邪神さまの命令とやらは理解出来ねえ

お前らの道は作ってやる、この試験、合格できたら教えてやう」

俺たちの様子を見て隙あらば襲いかかるとしていた草隠れの忍びたちをチャクラ糸でしめ落とす

取りこぼしたであろう一人に向かつて蟲を差し向ける

全員の絶命を確認し、サソリに向き直す

「道を作るってのは、じつじつ」とかい？」

死体が連なる道

「こいつらが通つたことを露骨に指し示す趣味の悪い目印

睨みあいいつ蟲をけし掛けようかと思い悩んでいると小南が現れた

コンは無事だらうか

「お疲れ様力イ、ダラー
・・・行くわよ」

「ああ」「わかった、うん」

俺等の存在が見えていないように小南は2人を連れて去つて行つた

眼中にもないつてか・・・?

これだからマダラ関連の奴は嫌いだ

「コンの元へ戻るぞ!」

「ああー。」

無事を祈り、すぐさまコンのもとへ駆け寄る

「や、もう一つもな、ようだが、幻術にかかるたらしく田が虚うだ

幻術を解くのはイカリに任せ、周囲の警戒を怠らないよう蟲を飛ばす

蟲からの情報によると、近辺の忍びたちは皆絶命しているとのこと

・・・曉・・・なんでそんな手間のかかることを・・・

「・・・月がふってぐる」

コンが呟いた声がやけに響く

愛で月が降つてぐる・・・つてなんだつたつけな

「コン?」

「数多の怨念が降り懸かる月が潰れ世界が破れて混ざりあう玉藻は押し潰され凝縮されて一つに至る計画の失敗紛れもない失敗が世界を平行から並行に・・・」

ぶつぶつと何かを呟き始めた

怖い

焦ったイカリが頭をはいた

え、それ大丈夫なん?

「起きるー。」

「痛いー。」

正氣に戻つたようだ

秘訣は斜め45度だとデヤ顔で誇らしげに語られる

・・・嫁さん可愛いからどうでも良いやー！

「あれ？ 小南は？」

「お前幻術かけられて変なこと呟いてたぞ
あいつらならもう行つちまた」

俺等も行くぞ

折角道を作ってくれたんだ、利用しない手はない

巻物も奪われず手の内にあるし、いつなつたら素早く試験クリアを
目指そ�

木々の間を走りながらしゃべり続ける

「うふふー・・・なあ、あいつジャシンとか言つてたんだけど・・・」

「あ、うひひも言つてた
ジャシンとか言わるとクトウルフ的な奴かと身構えるからやめてほしいよな」

ガマ親分対クトウルフ的邪神・・・胸熱だぜ・・・

「うめん、オレそつち分からん」

TRPG面白いぜ？ ルールブックあつたら貰すのになあ・・・

死体がおりなす道を辿り何の妨害も障害もなく塔にたどり着く

天地の巻物を取り出し、開け広げるとイルカ先生が出てきた

ん？ これって中忍がランダムに出てくるんじゃない？

「久しぶりだな、コン、シユロ、イカリ

第一試験は合格だ、3番目不合格なんてすこいいじゃないか
伝令役として伝えなきやいけないことがあるんだが・・・」

「中忍の心得ですね？」

「私とコンは体力、シユロは頭脳を磨いていきますよ」

・・・はい、勉強ガンバリマス

「ハハツ流石はイカリだな

・・・コンは死活問題だからな、
気をつけなさい」と

本当にナ

「中忍とは部隊長クラス、チームを導く義務がある任務における知識の重要性、体力の必要性をさらに心底心得よ!」

「はい！」

やつぱりイルカ先生は良い先生だな！

イルカ先生は絶対3代目の教育面の弟子だと思うんだけどなあ

3代田と仲が良すぎるとこ、うか特別扱いとこ、うかなんとこ、うか・・・

イルカ先生に控室に案内され、施設の説明をされる

食事は食堂でとれるようになっていた

調理場の使用許可を求めるが、試験官の一部からすでに届け出が出ていたらしくすんなり許可された

早速食堂で簡単な食事を作り始めるイカリと「ン

また口寄せられるまで塔で待機しなきやならないといつイルカ先生を食事に誘い、共に待つ

「はい、中華粥

焼き豚に蒸しササミヒビ、イカ、卵焼きにきのこの佃煮、好きなものをのせて食べてください」

イカリが土鍋」と粥を運んでくる

香ばしいコマ油の匂いが漂ってくる

「イルカ先生、今中華ちまき蒸しているんで、あとで試験官のみなさんに渡してくれますか?」

「ああ良いぞ

本当にイカリは料理が上手だな

「オレの嫁ですからね!」

「分かつてゐる分かつてゐる」

こゝにしてオレたちの一次試験は終了した

何故か暁はまだ塔にたどり着いていなかつたが、3次試験予選時にはその姿を見せていた

奴らの考えがわからぬ

極端な臆病と無鉄砲との中間（前書き）

真の勇氣といつものほ、 極端な臆病と無鉄砲との中間にある。

セルバンテス

ン

第一試験通過者27名、3代目火影の前に整列し、第3試験を待つばかり

暁3人組もギリギリになつて塔に現れ、一番端に並んでいる

デイダラがこちらに手を振つてぐるんで振り返した

サソリは何故か先生を睨みつけている、何かしたのかと先生たちが並ぶ上段を見れば・・・濃い

初めてマイト・ガイを直視した

濃い

左隣にいる先生が華奢見える

何やらガイがカカシに向かつて語りかけているが・・・聞いてなかつたらしい

先生がガイの肩を持つて落ち着かせている

・・・なんていうか、うちの先生が一番良いな

(なあ・・・コン、あえてスルーすべきかな)

(・・・言ひな・・・)

音隠れの変装・大蛇丸先生の隣に音隠れの先生がいる

・・・すいません、どうみても鬼鮫なんですが・・・

しいていえばちょっと年が若いかなーってぐらいで

ほら大蛇丸も何度も彼を見返している、計画にそんなんなかつたんだよね

(サメ怖いサメ怖いサメ怖いサメ怖い)

イカリのトラウマモードが発動してしまっている

だれかこの力オス空間をどうにかしてください

ぼーっとしているとハヤテさんが進み出る

よつやく予選が始まるのか

「えー・・・それでは本選の出場を懸けた第3試験予選を始めます。
・
・

体調の優れない方、これまでの説明でやめたくなつた方今すぐ申し出でください

これからすぐ予選が始まりますので・・・」

原作通りカブトが手を上げた

ナルトがカブトに言い募つているがそのまま下がつて行つてしまつ
ナルトがカブトに言い募つているがそのまま下がつて行つてしまつ
そのうちサスケの周りがざわめいた

呪印が疼いているのだろう、3代目の周りでも出場停止が求められ
ている

カカシが出てきて話は治まつたよつてそのまま試験説明が始まつた

「えー・・・それではよつび6名になつたため合計13回戦行
い、

その勝者が第3の試験に進出できます

ではこの電光掲示板に1回戦ごとに対戦者の名前を一々ずつ表示
します

・・・早速ですが、第1回戦の一員を発表します

電光掲示板に、うちはサスケ、赤胴ヨロイの名が表示される
ハヤテさんに促され、対戦者以外は上に移動する

「コン、イカリ、体調は大丈夫か？」

先生が近づいてくる

皆がサスケの戦いを注目し、ナルトは必死になつて応援している
まるで自分のことのように・・・

そしてヨロイのチャクラ吸引術から逃れ、見事勝利を得たサスケに
満面の笑みを浮かべたナルト

ナルトも、サスケも良い顔をしている

そうしてカカシとサスケが連れたつて去つて行つた、今頃呪印の封
印がされるだろう

「それでは一回戦・・・
ザク・アブミ対ねたみコン！」

あ、オレになつたんだ

下に降りるとすでにザク・アブミが着いており、見下された

「は・・・何処のザコだよ・・・」

睨みつけるが何の効果もなく、へらへらと笑われる

この野郎め・・・

「コーンー・シユロパパとイカリママがついてるからなーー！」

「がんばれーー！」

2人の声援に思わず顔が綻ぶ

応援して貰えるってのは嬉しいものだ

「てめーみてえなチビに、負けるかよ

気分が乱される、ムカつくヤローだ

大蛇丸の捨て駒のくせに・・・

「余計な挑発は控えてください
・・・それでは始めてください」

「食らいやがれ斬空波！」

開幕直後の攻撃、空気の塊がオレを襲う

自分から地面をけり上げてからつじて衝撃を受け流すが、床にゴロゴロと転がった

転がりながら懐の起爆札を数枚取り出しクナイと共に投げつけた

時間差で爆発を起こす起爆札をかわされ、蹴りあげられ、衝撃波がオレを襲う

地べたに這い蹲るオレを踏みつけ、勝利の笑みを浮かべるザク・アブミ

・・・ムカつく・・・

「おまえ、はつきり言つて才能ねえな
そういうや、第一試験で吐血してたっけ?
そんなんでビリヤつて忍になるんだ?ん?」

何度も何度も踏みつけられる

才能、か

そんなもんあつたら、いっちに来てなかつたさ

「才能なくとも努力すりやなんとかなる奴もいるけどよ?
お前みたいな奴は努力しても無駄・・・わかるかア?」

馬鹿みてえ!と高らかに笑い、嘲るザク・アブニ

才能はない、努力しても実らない、変わらず弱り続けるそんな体

「・・・そんなことは、自分が一番よく知ってるさ・・・」

「あ?」

「オレに才能がない」とぐらー、努力しても無駄だつて知ってるさ
!」

一の努力で足りなくて、百の努力をしてきても無駄だつて分かつて
る!

叫びながらザクの足を払いのけ、体制を整える

クナイを構え、起爆札の準備をしようとして、上から聞こえてきた
声に戸惑つた

「いや、それは違うぞコンー！」

鉄柵から身を乗り出し、竹刀片手に叫ぶ女・・・シナイ先生

はらはらと両脇にいるショロとイカリがやけにか細く見える

「たしかに百の努力は一つの才に効るかもしねん…

だが！..千の努力ならどうだ！..

万の努力なら！..

なぜ武術・..違う、忍術が何千年も伝えられてきたか..それは
忍者の世界において..

努力は才能を凌駕するからだ！..

まだまだお前は努力が足りないだけで、無駄じゃない！

ああ・・・良いセリフだ・・・だけどな先生

オレ、ＷＳ読者なんだ・・・元ネタわかると感動も出来ねえぜ・・・

思わず頃垂れる

だけど

「コソ、顔を上げろ
・・・そうだ、笑え」

まつすぐ先生を見上げ、笑つて見る

どんな情けない笑顔だろうか、滑稽だろう

視界の端にいるザクが呆れたように殺意を飛ばしていく

「前に進む時は下を見ちゃダメだ」

眩しい

ひどく、先生が眩しい

いつの間にか出ていた涙を拭う

「笑つて前を見る」

印を組み、チャクラを練り上げる

弱い弱いと笑われてきたオレだが、やるときは、やるんだ

「笑うべきだとわかった時は・・・泣くべきじゃない・・・って奴
ですね先生」

笑つて先生に問いかける

「・・・まさかのからサー・・・よし、何やつても私が何とかして
やる、思つ存分やつてしまえ!」

死亡フラグ立てたような気もするが・・・先生がなんとかしてくれ
れるらしいし、大丈夫だろう

腹部に力を込めてバルコのチャクラを引き出す

だがパルコのチャクラは極小で、今まで見せたことのない大きさの
狐火をつくる

天井に届くであろう火柱は、周りの鉄柵を徐々に溶かす

チャクラに守られたオレに熱は伝わらないが、周囲のざわめきから
察するに異常な高温だということしかわからない

もう一度印を組んで準備は万全

「というわけで・・・行くぞ、パルコ・・・！」

「は、そんなもんオレの術で・・・?！」

斬空波がオレを襲う と見せかけて

術をまともに受けたのはオレの分身、火柱状の狐火を作った瞬間入
れ替わったのだ

見た眼が派手な狐火に注目しすぎて気付かなかつたらしい

本体であるオレは、ザクの背後で小刀を首に添えた

一筋の血が流れる

「ツーメ・・・二つのまにつー...?」

小刀だと掘まれ、引き離されるが、もう遅い

「がつ・・・!
体が・・・?！」

麻痺毒を塗りつけた小刀だ

疲労した体にはよく染み届いたらしい

身動きが取れなくなり、そのまま崩れ落ちて行くザク・アブ＝

「これが致死毒なら・・・もう死んでたな」

チャクラ切れか、意識が朦朧としてくる

最後に暴走しないよう狐火を消してから、地面に横たわった

何を使つたって、最後に勝てりやいい、それが自分の力じやなくて
パルコの力だとしても、勝てばいいんだ

でも、今回はパル「のチャクラはあんまり使わなかつたから・・・少しほ頼らざりに戦えるよつになつてるかな

「勝者、ねたみonsoー。」

「せんせーつかれたー。」

だらだらと口から血が流れているがどうでもいい

下に降りてきた先生が兵糧丸を口に放り込んでくれた

「珍しく泣かなかつたな」

「そのうち笑つて殺せるよつになりますよ」

忍者になるんだから

「・・・じゃああの火柱はもう使えないな
田立ちすきだ」

「ですよねー」

先生に支えられながら上へ昇るとシユロとイカリ、ナルト、デイダ
ラが出迎えてくれた

「頑張つたなコソーツンつん！」

「コソーツンてば相変わらず気配の消し方すげーってばよーーー！」

よつてたかつて揉みくちゃにされる

「褒めるとこるはんじだけが！？」

「え・・・あ、今日の吐血一段とすごかつたつてばー！」

「嫌味か」

イカリが思わず突っ込んだ、トラウマモードが解除されたっぽい

次の試合はシノとナリと小南

しかし小南はすぐさまギブアップしてしまつ

一体何なのかと眺めていると田があつた、相変わらず濁つた眼だった

一瞬だけ微笑まれそのまま鬼鮫の元へ去つて行つてしまつ

次は剣ミスミ対カソクロウだ

「・・・といろで・・・先生の一いつ名の意味を実感しました
確かに歩く音ですしねシナイちゃん」

そう言つと嬉しそうに田を輝かせた

基本無表情だからこんなに感情を示すのは珍しい・・・！

「・・・感動してくれた？」

小首を傾げた

びつしょつ、先生が可愛い、無表情なのに可愛い

「元ネタ知ってるからあんまり・・・」

感動・・・八割ぐらいかな

「頑張つて思い出したセリフなの」・・・

「！」、「めん先生」

頃垂れた先生に謝つていると視線を感じ、振り向くと青春師弟が泣いていた

なにか言つてゐるようだが嗚咽に混ざつて聞き取れない

「シナイ！良い弟子を持ったな・・・ずびつ」

「ガイ・・・私の班は青春していないんだが・・・」

「お前の言葉、リーと共にしかと胸に刻んだぞー」

「ああ、聞いてないな」

いつものやつとつりしき、そのままガイの言葉をスルーする

「勝者カンクロウ！」

それでは次・・・ダラー対油女ショロー！」

シユロの皿つきが変わった

極端な臆病と無鉄砲との中間（後書き）

あんまりパルコに頼らなかつた

頼つていいたらそれは勝ちじやなかつた

恐怖には限度がない（前書き）

苦痛には限度があるが、恐怖には限度がない。

ブルニウス

恐怖には限度がない

ン

シユロとトライダラか・・・ビリ戦うんだわ

ナルトと共に鉄柵に身を預け觀戦する

所々鉄柵が溶けかかっているものもあるが・・・多分大丈夫

身構える2人、シユロはすでに蜂を出現させている

「油女一族のシユロ・・・聞いたことがあるな
分家の出身ながらその方は本家に勝るとも劣らずと」

解説役のネジの声が聞こえてくる

名家出身だけあって他の一族のことも詳しいんだな

「ええボクも聞いたことがあります
・・・週一度、午後三時に大広場で愛の告白を叫ぶ・・・熱い人
物だと！」

油女一族つていうより、そっちのが有名なんだうな・・・

「確かルーキーでも上位の実力者だそうだが・・・頭は良くないら
しい」

いや、頭は良いよ？

暗記が嫌いなだけであつて悪くはないんだよ

「その言葉、撤回しろ」

イカリがネジに詰め寄る

そうだよな、事実だと言えども頭良くないとか言われて怒らないわ
けないよな

「あこつは頭が良くないんじゃなし、変なんだ」

「・・・やつか」

・・・

「なあ『ノン、イカリがおかしごり』」

「・・・放つておけ」

「ヤーて、ダラーんでも見ぬかに? オレは出来てる」

スズメバチが威嚇行動をとる。シクロの周囲を飛ぶ

「ふうん? 蟻なんかでオイリに勝てるとは思ひへんのか?」

粘土の蜘蛛がばら撒かれる

「おーおー・・・油女一族は皆、蟲しか使わないとでも？」

「何・・・？」

「風遁・真空玉!」

口から複数の風の玉を吹き出し、粘土の蜘蛛たちを吹き飛ばした

「あの術・・・」

「養父さんの術だな・・・ケンカで覚えたか」

御父さんボクに娘さんを下さいからの娘はやらんパターンでケンカしてゐもんな・・・

「木の葉剛力旋風!」

驚異的な速さで繰り出された強烈な後ろ回し蹴り・・・デイダラは避けずに吹っ飛ばされた

あいつ、わざと受けたとしてもあれじや、衝撃が殺せないぞ

「・・・起き上がつてこないね」

「うん・・・」

壁に穴があくほどめり込んでいる

普通の相手ならこれで勝利を確信できるのだが・・・ディダラ、わざと負けたか?

「・・・起き上がりつてしませんね・・・勝者、油女ショロー。」

小南がディダラを回収して介抱している

しかしそうに起き上がりつてしまらへ笑いかけた

・・・やつぱりわざとかー

「・・・イカリー」「ーン、なんか知らんけど勝つたー」

とりあえずハイタッチ

「オメデトー」

何の考えがあつての中忍試験なんだか

参加してゐる意味があるのか？

あつさり試合が終わつてしまつたため皆次の試合を待ちかねてゐる

次の試合は誰と誰だ サクラとイノか

長くなるな

そう考えているとリーが話しかけてくる

「流石はガイ先生のご友人、シナイ上忍の弟子！
素晴らしい体術でした！」

「お？ ありがとな先輩！

蟲を使わなくて助かつたぜ」

「そういうえば油女一族でしたね
どうして蟲を使わなかつたのですか？」

「・・・肉を食いちぎるからマイシラ・・・グロいんだ

・・・スズメバチって怖いよな

一度スズメバチの捕食風景を見たが・・・恐怖しか感じなかつた

「可愛い時は、可愛いんだがな・・・」

はちみつ好きだし

やつ壇につつ蜂の頭を撫でる・・・あ、噉まれた

サクラヒイノの女の戦いかり田をそむけ、蜂を愛でる」とした

はちみつをチロチロと舐める姿は愛らしく

女同士の戦いその1が終わり、女同士の戦いその2が始まる

テンテン対テマリが始まつた・・・がこじらもあつたりと決着がついてしまつ

テマリの勝ち、だからとつて敗者に鞭打つ真似はどうかと思つが・

そして次の試合は イカリ対カイことサソリだった

イカリ

イレギュラー同士がつぶし合ひ、コン以外は原作に影響が出ない組み合わせだな

まあ小南とシノが戦ったがここも原作と変わりなかつたな

「さて……どうしたものか……」

ショロやコンと違つて火力がないからな、どうせつても長期戦を覚悟すべきか・・・

デイダラのように正面戦に戦わないという可能性もある

難しいな、とりあえず口寄せでチャクラ刀を取り出しておく

「なんだあの刀・・・変な形だつてば」

「あれはチャクラ刀つて言つて、チャクラを流し込んで切れ味を上げる効果をもつた刀だ

あの刀を使えばチャクラ糸や術を斬ることも可能になる」

「へーー。」

思わず笑みがこぼれる

ナルトも「ンも、楽しそうだな

まあ試合に集中しますか

印を組みチャクラを込める

「霧隠れの術！」

濃霧を発生させ姿を隠す

今のうちに出来る」としておかないとい、そう思いつつ起爆札を各所に仕掛ける

・・・何の行動も起こされないことが怖い

何を考えているのや、

「ちょ、霧で何にも見えないじゃないーー！」

「霧隠れの術だから仕方ないよ」

「木の葉の忍びが霧隠れの術を使つて変じやん？」

「イカリは元々霧の出身だから仕方ないよ」

・・・霧、解いた方が良いのかなあ

「おい」

「ーー」

田の前にサソリが現れる

気配はしなかつたのに・・・！一応私は感知系なんだけどな・・・

流石は曉と言つたところか

「お前・・・霧の、出身なんだつて？」

「・・・ああ、戦災孤児でな」

「さつきのシユロも、お前も・・・邪神さま」執心の「コンつてガキも俺等と似たよつのもんか?」

ジャシン様の、『執心』?

確かにコンは木の葉に来る前は湯隠れで療養していたと聞いたが・・・

そのときに飛段と接触してあるのか?

デイダリの時に、変装した飛段? だが何故ジャシンさま?

「何の話だ?」

さつぱり理解できなー

そういうと低く笑いながら、仕掛けた起爆札を糸で外していく

・・・いつもおつとつとばれると、自分の未熟さが痛感してしまつ

「お前らも、記憶があるんだろう? 別の歴史を辿った自分の記憶が、
・・・」

記憶？！

まさか、こいつら・・・

「前の歴史じや、あの小娘に負けちまつたが・・・まあ良い

今度は弟子でも取つて・・・俺の芸術を伝えるだけだ、永遠にナ

小娘、サクラのことか！？

なうりじつは原作通りサクラと戦い死に、記憶だけ憑依したのか？

サソリだけじゃない、小南もそつなのか、デイダラはどうなんだ？！

暁全員が記憶を持っているのか？！

「フフッ・・・そう睨むなよ・・・

そうだな、デイダラ以外は全員つてところだな
・・・鬼鮫は、テメエのことを覚えてこるぜ？」

聞きたくない名前

私を殺した男の名

「一.」

干柿 鬼鮫

鬼鮫、迫る鮫肌、削れる肉の感覚、痛み、恐怖、無慈悲な目

思いだすのはそればかり

傷跡なんてないのに、斬られたはずの場所が痛む

覚えてるだつて・・・?

やめてくれ・・・お願ひだから、殺さないでくれ

ちがう、ちがう

俺は・・・

私は、スパイなんかじゃない！

「霧が晴れたわ！」

「・・・なんだあいつら、棒立ちで何してんだ・・・？」

体に力が入らない

怖い、どうしようもなく、恐い

ああ、誰か、先生、コン、シユロ・・・寒い・・・助けて

コン

霧が晴れて、棒立ちだった2人

イカリが座り込んだと思つたらサソリはすぐにギブアップした

「ふん、これ以上やつても無駄だな・・・おい試験官、オレの負けだ」

「・・・霧の中で何があつたか知りませんが・・・それで良いんですけどね？」ほつ

ならば勝者志村イカリ！」

様子がおかしい

シユロはすでにイカリのもとへ駆け寄つている

オレはあつたけの毛布を借り、大慌てでイカリの元へ向かう

イカリの体は冷え切つていて爪の色も変色していた

毛布で包み、シユロに抱きかかえられて医務室へ向かう

寒い、恐いと呟くイカリの手を握り締めるシユロを置いて調理場へ
赴く

内側から温めなければ、そつ思つて簡単なスープを作つて持つていぐ

イカリが壊れる、そつ思つたら酷く恐ろしかつた

何か自分に出来ることを、そつ考へてもオレじや何が出来るのか、全く分からぬ

どうすればいいんだろ？

スープを持つてゐるから医務室の扉が開けられない

仕方なく一度床に置いてから扉をゆっくり開く

ベッドの上で、シユロとイカリが抱き合つていた

イカリは泣きながら何度もシユロの名を呼んで、シユロは彼女を抱きしめながら・・・ずっと頷いていた

決して立ち入ることは出来ないと、オレなんかが2人を邪魔してはいけないと思えるほどなの・・・

強烈な疎外感

気配を消したまま医務室から遠ざかる

すれ違った医療班の人ースープを託し、1人塔を彷徨う

オレじゃ何も出来ないし、イカリにはシユロがいる

シユロがいればイカリは持ち直す

オレがいたところどうなる

冷たい壁に背中を預け、座り込む

「・・・オレ、何やつてるんだろ・・・」

分からぬ

何がそんなにショックだったのか

分からぬ

自分のやりたいことが分からぬ

死にたくない、だけど、忍びになりたい、でも、この体は忍の仕事
は耐えられない

神殿で大人しく生活していても、30になる前に死ぬだろつと言わ
れてきた

バルコの尾のおかげで体力は持ち直しているけれど、長くは生きら
れない

だけど忍になりたいといつ気持ちは変わらない

忍になつて生きる

ただの我が儘、本当に死にたくなければ養生してれば良い

下忍に合格して、シユロやイカリと任務をこなしていくと心に引っかかっていた

あの一人は長生きできる

シユロが語ったように、子供を作り、ひ孫の代まで生きることができる

だけど、そのときオレはいない

オレはあの一人とともに生きれない

あの一人の世界に・・・オレはいるない

「淋しいのかしら」

影が差した

「・・・小南・・・！」

顔を上げると小南がいた

変装は解かれ、髪飾りが風で揺れている

「目的は果たしたからね、お別れを言いに来たの

・・・分かるわ、貴方の気持ち」

隣に座り、肩が抱き寄せられる

頬に手をあてられ、なだめるように優しく話しかけられる

「貴方は知ってるわよね？」

私が仲間と三人で行動していたこと・・・

他の2人は目に見えない絆があって、それは男の友情と言われるものだった

私には到底入り込めない絆・・・

貴方の場合は男女の情愛、そして貴方は友と見られていない

ただの庇護欲で守られているだけの存在「

頭を撫でられる

心臓の音が聞こえるほど近い

ゆっくりと頬を撫でる手が、顔を持ちあげ視線を合わせられる

「そしてただの足手まとい

知ってる

声に出でず呟いた

「・・・お互い、淋しいわね

「これ以上2人と一緒にいられないと思ったなら・・・私の元へいらっしゃい

一緒にあの御方と生きましょ」

悲しげに微笑まれ、手を握られる

今この手を握り返せば、あの御方とやうの元へ連れて行かれるのだ
ろづか

「私の生徒に手を出すな

「そこまでだ」

「一陣の風が吹き、声が響き渡る

「一瞬で風景が変わったこの場所は、塔ではなく、小南の紙で作られた部屋

「オレはこいつの間にこんなとこいたのだらつ

「まじりす、シナイ……」

「小南の顔が醜く歪んだ

「わざわざあなたに優しい顔だったのに

やつぱりシナイ先生は眩しかった

恐怖には限度がない（後書き）

あつさり終わつて腑に落ちないシユロ

傷を抉られたイカリ

両親の秘め事を見てしまつた幼子の気分なコン

天使は、神は統計上悪魔よりも人を殺しているものな小南

べつに「コが光つてゐわけじゃないよ眩しいシナイちゃん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070z/>

ひねくれヒーロー

2012年1月12日20時52分発行